# 吉野ヶ里遺跡

平成8年度~10年度の発掘調査の概要

2003年3月 佐賀県教育委員会

# 吉野ヶ里遺跡

平成8年度~10年度の発掘調査の概要

2003年3月 佐賀県教育委員会



田手一本黒木地区第222調査区環壕跡空中写真(上が南)



第222・223調査区空中写真(上が東)



第222調查区SD0105環壕跡木製品出土状況



SD0105環壕跡木製品出土状況(鍬・鋤)



SD0105環壕跡木製品出土状況(臼)



SD0105環壕跡木製品出土状況(柱)



SD0105環壕跡木製品出土状況(容器)



SD0105環壕跡木製品出土状況(容器・柱)



田一本松地区 I 区第294調査区(弥生時代中期環壕跡)空中写真(上が北東)



田一本松地区 I 区第232調査区北部発掘状況 (北西から)



田手二本黒木地区 I 区第230調査区空中写真(上が北)



第230調査区SD0312環壕跡発掘状況(北から)



田手二本黒木地区 I 区第270・275調査区周辺空中写真 (上が西)



田手二本黒木地区 I 区第270調査区発掘状況(上が南西)



田手二本黒木地区 I 区第236調査区掘立柱建物跡群(北から)



吉野ヶ里地区V区第306調査区遺構検出状況空中写真(北から)



吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区第227・228調査区空中写真(上が南)



第227調査区SD2101溝跡遺物出土状況(南東から)



田手一本黒木地区Ⅰ区第267調査区・田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区空中写真(上が西)



田手一本黒木地区 I 区第267調査区SX0210遺構壺出土状況

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、工業団地計画に伴い昭和61年5月から開始しましたが、国内最大規模の弥生時代環壕集落跡や墳丘墓の発掘などにより、平成元年2月以来大いに注目されてきました。その後、吉野ヶ里遺跡を取り巻く状況は、元年3月の工業団地計画中止と遺跡保存の決定、翌2年・3年の史跡・特別史跡としての指定、4年の国営公園化の閣議決定、7年11月からの整備工事着手、13年4月21日の第1期開園と急速な展開を遂げ、現在は多くの来園者で賑わっています。整備工事は現在も着々と進められ、集落全体のたたずまいが復元されつつあります。

このような状況の中で、当委員会としては平成元年度から文化庁の補助を受け、遺跡の範囲確認や内容解明のための確認調査を継続して実施しています。この間、南墳丘墓(祭壇?)青銅器鋳造遺構、北内郭跡、高床倉庫群跡の発見や、北墳丘墓の再調査によって新たな甕棺墓と銅剣の発見など多くの成果をあげることができ、また、別事業の調査により、九州初の銅鐸が発掘されるなど、ますます、遺跡のもつ重要性が認識されています。これらの調査成果は国営歴史公園整備の重要な基礎資料として最大限に活用してきています。

この事業の平成元年度~7年度の成果については過去に公にしていますが、本書は平成8年度~10年度の3年間にわたる調査についてその概要を記したものです。本書を学術資料としてお役立ていただき、吉野ヶ里遺跡の今後の調査研究あるいは保存活用に関して、適切なご指導、ご助言をいただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査にあたり適切なご指導をいただいた文化庁はじめ諸 先生方、ならびに調査員を派遣して調査に協力いただいた三田川町教育委員会の ほか、地元神埼町、東脊振村教育委員会、発掘や資料整理に従事いただいた作業 員の方々には衷心から感謝申し上げます。

平成15年3月

佐賀県教育委員会 教育長 松 尾 正 廣

### 例 言

- 1. 本書は、佐賀県教育委員会が国庫補助事業として平成元年度から実施している吉野ヶ里遺跡発掘 調査事業のうち、平成8年度・9年度・10年度に実施した発掘調査の概要報告書である。
- 2. 発掘調査は、佐賀県教育委員会が主体となり、三田川町教育委員会の協力を得て実施した。調査に あたっては、文化庁、大学、佐賀県文化財保護審議委員、その他各種機関の専門家の指導を得た。
- 3. 出土遺構の実測図作成は業者に委託したほか、調査員、調査補助員、作業員がおこなった。また、 出土遺物の実測図作成は調査員、調査補助員、作業員がおこなった。調査記録の作成及び整理作 業の分担は下記のとおりである。

遺構実測:石松澄子・中島茂子・平野三枝子

遺物実測:秋吉京子・伊東直子・野口孝子・原口晴美・御厨瑞枝・山崎常美・吉江博子・戸塚洋輔

遺物復元:井節子・江口啓子・大柿珠美・坂口サチ子・佐藤春子・羽田すま子・山崎ひとえ

遺構実測図整理・写真資料整理:石松澄子・中島茂子・平野三枝子

報告書用挿図トレース:御厨瑞枝

- 4. 出土した遺構・遺物の写真撮影は調査員がおこなったが、空中写真と遺物写真の一部については 業者に委託した。
- 5. 出土遺物の整理や調査記録類の整理は、吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所でおこなった。
- 6. II. 位置と環境で用いたFig.1吉野ヶ里遺跡周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の50,000分の1 の地形図(『佐賀』『広滝』)を使用した。
- 7. 本書の執筆は七田・細川がおこない、編集は、細川の協力を得て七田がおこなった。
- 8.出土遺物と調査記録類は、主に佐賀県教育委員会文化課吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所(〒842-0035 神埼郡三田川町大字田手2721番地 ILL 0952-52-9735) に保管している。但し、重要文 化財に指定された青銅製品や青銅器鋳型などは佐賀県立博物館に保管されている。

### 凡 例

1. 平成8年度から10年度にかけて調査を実施した地区とその略号は以下のとおりである。

平成8年度:田手一本黒木地区II区(TDI-II)、吉野ヶ里丘陵地区VII区(YGK-VII)

平成9年度:田手一本黒木地区I区(TDI-I)、田手二本黒木地区I区(TDN-I)

田手二本黒木地区Ⅲ区(TDN-Ⅲ)、田一本松地区Ⅰ区(DEI-Ⅰ)

平成10年度:田手一本黒木地区I区(TDI-I)、田手二本黒木地区I区(TDN-I)

田手二本黒木地区Ⅲ区 (TDN-Ⅲ)、吉野ヶ里地区V区 (YNG-V)

2. 遺構については、調査地区ごとに一連の番号を付し、その前に遺構の種別を示すアルファベット 2文字の略号を記した。以降の種別は以下のとおりである。

SB…掘立柱建物跡 SD…環壕跡・溝跡 SE…井戸跡

SH…竪穴住居(建物)跡

S J ···甕棺墓

S K···土壙

S X ···不明遺構

- 3. 遺構の法量はm単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
- 4. 遺構分布図や遺構実測図の北方位や座標値は、国土座標(第Ⅱ系)を用いた。

## 本 文 目 次

I. (3	tじめに ······	1
1.	調査の経過と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
	(1) 平成8年度の調査	2
	(2) 平成 9 年度 の調査	2
	(3) 平成10年度の調査	4
2.	調査体制	7
	(1) 平成8~10年度の調査体制	7
	(2) 平成14年度の報告書作成体制	7
3.	調査の方法	7
II. 遺	遺跡の位置と環境	11
1.	位置と地理的環境	11
2.	歴史的環境	11
Ⅲ. 訓	骨査の概要と成果	17
1.	田手一本黒木地区 II 区の遺構と遺物	
	(1) 第222調査区	17
	(2) 第223調査区	32
2.	田一本松地区 I 区の遺構と遺物	34
	(1) 第232調査区	34
	(2) 周辺の調査区	36
3.	田手二本黒木地区 I 区の遺構と遺物	
	(1) 第230調査区	36
	(2) 第233~249調査区 (特に第235・236・237・239調査区)	
	(3) 第236調査区	
	(4) 第270調査区	
	(5) 第275調査区	48
4.	吉野ヶ里地区V区の遺構と遺物	
	(1) 第306調査区	
	(2) その他の調査区	53
5.	吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区の遺構と遺物	
	(1) 第227調査区	
	(2) 第228調査区	
	(3) 第229調査区	
6.	田手二本黒木地区Ⅲ区・田手一本黒木地区Ⅰ区の遺構と遺物	
	(1) 第267調査区	
	(2) 第268調査区	
IV. ∄	<b>ミとめ</b>	73

#### 巻頭図版目次

- 1. 田手一本黒木地区第222調査区環壕跡空中写真 第222·223調査区空中写真
- 2. 第222調查区SD0105環壕跡木器出土状況
- 3. 田一本松地区 I 区第294調査区(弥生時代中期環壕跡)空中写真田一本松地区 I 区第232調査区北部発掘状況
- 4. 田手二本黒木地区 I 区第230調査区空中写真 第230調査区 S D0312環壕跡発掘状況
- 5. 田手二本黒木地区 I 区第270·275調査区周辺空中写真 田手二本黒木地区 I 区第270調査区発掘状況
- 6. 田手二本黒木地区 I 区第236調査区掘立柱建物跡群 吉野ヶ里地区 V 区第306調査区遺構検出状況空中写真
- 7. 吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第227・228調査区空中写真 第227調査区SD2101溝跡遺物出土状況
- 8. 田手一本黒木地区 I 区第267調査区・田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区空中写真田手一本黒木地区 I 区第267調査区 S X 0210遺構壺出土状況

#### 本文中図版目次

出手	一本	黒木地区11区弟222調食区調食風景(1)	3
田手	一本	黒木地区 II 区第222調査区調査風景(2) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	3
吉野	ケ里	丘陵地区Ⅷ区第227調査区調査風景	3
吉野	ケ里	丘陵地区Ⅷ区第228調査区調査風景	3
田手	二本	黒木地区Ⅲ区第268調査区調査風景	3
田手	二本	黒木地区 I 区第270調査区調査風景 ·····	3
竪穴	住居	跡発掘状況 (ほぽ完全発掘)	9
		跡発掘状況(半分発掘)	
貯蔵	穴跡	発掘状況 (ほぼ完全発掘)	9
		発掘状況(半分発掘)	
		発掘状況 (一部発掘)	
環壕	跡発	掘状況	9
	<b>.</b>		
挿図			
Fig.	1	吉野ヶ里遺跡周辺地形図・遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Fig.	2	吉野ヶ里遺跡発掘調査調査地区位置図	18
Fig.	3	確認調查調查区位置図	
Fig.	4	田手一本黒木地区II区第222·223調査区遺構分布図 ····································	20
Fig.	5	田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土土器実測図(1) ················ 2	
Fig.	6	田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土土器実測図(2) ················ 2	22
Fig.	7	田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(1) ·············· 2	
Fig.	8	田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(2) ·············· 2	

Fig. 9	田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(3) ·······25
Fig. 10	田手一本黒木地区 II 区第222調査区 S D 0105環壕跡出土木製品実測図(4) · · · · · 26
Fig. 11	田手一本黒木地区 II 区第222調査区 S D 0105環壕跡出土木製品実測図(5) · · · · · 27
Fig.12	田手一本黒木地区 II 区第222調査区 S D 0105環壕跡出土木製品実測図(6) · · · · 28
Fig.13	田手一本黒木地区 II 区第222調査区 S D 0105環壕跡出土木製品実測図(7) · · · · 29
Fig. 14	田手一本黒木地区 II 区第222調査区 S D 0105環壕跡出土木製品実測図(8) ······ 30
Fig. 15	田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(9) ······ 31
Fig. 16	田手一本黒木地区II区第223調査区掘立柱建物跡溝跡·出土土器·陶磁器実測図 ······ 33
Fig. 17	田一本松地区第232調査区遺構分布図 35
Fig. 18	田一本松地区第232調査区SD0001環壕跡出土土器実測図 ······36
Fig. 19	田一本松地区第232調査区出土「貨泉」・木製品実測図(1)37
Fig.20	田一本松地区第232調査区出土木製品実測図(2)第295調査区出土船形
	木製品実測図
Fig.21	田手二本黒木地区 I 区第230調査区遺構分布図 39
Fig.22	田手二本黒木地区 I 区第230調査区溝跡・環壕跡出土土器実測図 40
Fig.23	田手二本黒木地区第230調査区SD0312環壕跡出土木製品実測図(1) ······ 41
Fig.24	田手二本黒木地区 I 区第230調査区 S D 0312環壕跡出土木製品実測図(2) · · · · 42
Fig.25	田手二本黒木地区 I 区第233~249調査区位置図、遺構分布図 ······ 44
Fig.26	田手二本黒木地区 I 区第236調査区遺構分布図 … 45
Fig.27	田手二本黒木地区 I 区第235·236·237·239調査区溝跡環壕跡出土土器実測図 46
Fig.28	田手二本黒木地区 I 区第236調査区掘立柱建物跡出土土器実測図 47
Fig.29	田手二本黒木地区 I 区第270·272~278調査区位置図、遺構配置図 ······ 49
Fig.30	田手二本黒木地区 I 区第257~270·270調査区溝跡·環壕跡出土土器実測図 ······ 50
Fig.31	田手二本黒木地区 I 区第270調査区 S D 0319溝跡出土銅鏃木製品実測図 51
Fig.32	田手二本黒木地区 I 区第275調査区溝跡・環壕跡出土土器実測図 ····· 51
Fig.33	田手二本黒木地区 I 区第275調査区 S D 0322溝跡出土木製品実測図 52
Fig.34	吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区第227・228(・310)調査区遺構分布図 55
Fig.35	吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区第227調査区竪穴住居跡・貯蔵穴・土壙出土土器実測図 56
Fig.36	吉野ヶ里丘陵地区VII区第227調査区SD2101溝跡出土土器実測図(1) · · · · · 57
Fig.37	吉野ヶ里丘陵地区VII区第227調査区SD2101溝跡出土土器実測図(2) · · · · 58
Fig.38	吉野ヶ里丘陵地区VII区第227調査区SD2101溝跡出土土器実測図(3) · · · · 59
Fig.39	吉野ヶ里丘陵地区VII区第227調査区SD2101溝跡出土土器実測図(4) · · · · · 60
Fig.40	吉野ヶ里丘陵地区VII区第227調査区SD2102溝跡出土土器実測図(1) ······ 61
Fig.41	吉野ヶ里丘陵地区VII区第227調査区SD2102溝跡出土土器実測図(2) · · · · 62
Fig.42	吉野ヶ里丘陵地区VII区第228調査区SD2122・2130溝跡出土土器実測図 ······ 64
Fig.43	吉野ヶ里丘陵地区VII区第228調査区SD2121溝跡出土土器実測図65
Fig.44	吉野ヶ里丘陵地区VII区第228調査区SD2121溝跡出土小形仿製鏡実測図 66
	(附. 第221調査区SD0265溝跡出土小形仿製鏡実測図)
Fig.45	田手一本黒木地区 I 区第267調査区・田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区遺構分布図 ··· 69
Fig.46	田手一本黒木地区Ⅰ区第267調査区・田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区土壙・その他の遺

	構出土土器実測凶······//0
Fig.47	田手一本黒木地区I区第267調査区・田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区溝跡出土土器・陶磁器実測図
Fig.48	田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区溝跡出土土器実測図 71
Fig.49	田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区SD0431溝跡出土土器実測図 ············ 72
Fig.50	吉野ヶ里遺跡環壕集落跡概要図 74
J	
巻末図	版目次
PL. 1	田手一本黒木地区II区第222調査区全景(上層)、SD0105環壕跡(北部)
PL. 2	第222調査区SD0105環壕跡木製品出土状況(鍬鋤エブリ杵杓子容器)
PL. 3	第222調査区SD0105環壕跡木製品出土状況(鎌柄網枠鼠返し柱履物矛形)
PL. 4	田手一本黒木地区II区第223調査区西部全景、柱枕木出土状況
PL. 5	田一本松地区 I 区第232調査区 S D 0001環壕跡、北部杭群
PL. 6	田一本松地区 I 区第232調査区木製品出土状況(鋤・杵・ヘラ状木製品・鼠返し・杓子・貨泉)
PL. 7	田手二本黒木地区 I 区第230調査区全景(東から)、同(西から)
PL. 8	第230調査区SD0310溝跡、SD0313溝跡(北から)
PL. 9	第230調査区SD0310溝跡木製品出土状況(鍬・鋤・鎌柄・斧柄・杓子・槽)
PL.10	田手二本黒木地区 I 区第233~249調査区全景(東から)、第236239調査区 S D 0307環壕跡、
	第236区掘立柱建物跡群、同SD0307溝跡
PL.11	田手二本黒木地区 I 区第236調査区 S B 0301~0306掘立柱建物跡
PL.12	第236調查区掘立柱建物跡柱穴跡(SB0301·0303·0305·0306)
PL.13	田手二本黒木地区 I 区第270調査区 S D 0319溝跡(南から)、同北部の溝跡内木材・礫敷遺構
	出土状況(東から)
PL.14	第270調查区SD0319溝跡、同北西部礫敷遺構、木材·木製品出土状況、第272調查区櫛出土状況
PL.15	田手二本黒木地区 I 区第275調査区全景、同SD0322溝跡、同木製品出土状況(鋤・手網・斧柄)
PL.16	吉野ヶ里地区V区第306調査区遺構検出状況
PL.17	吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区第227調査区全景(上が南)、同第228調査区全景(上が南)
PL.18	第227調査区甕棺墓群(北から)、同SD2101溝跡(西から)、同SD2102溝跡(東から)
PL.19	第228調査区全景(南東から)、同SJ2125(左)2126甕棺墓、同SD2122溝跡、同SD2121
	溝跡、同SD2121溝跡小形仿製鏡出土状況、第229調査区全景(西から)
PL.20	田手一本黒木地区 I 区第267調査区全景(東から)、田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区全景
	(南から)
PL.21	田手一本黒木地区 I 区第267調査区 S X 0210遺構土器出土状況、同遺構壺内部の貝殻鳥骨
PL.22	田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区北西部、貯蔵穴跡、弥生時代溝跡、中世溝跡
PL.23	出土木製品(1)〔鍬・鋤・エブリ・杵・臼〕
PL.24	出土木製品(2)〔横槌・鎌柄・履物・網枠・斧柄・鏃・弓〕
PL.25	出土木製品(3) 〔鼠返し・加工板材・刷毛目原体・杓子・容器・船形木製品〕
PL.26	出土木製品(4) 〔容器群・武器形祭器〕
PL.27	銅鏃、貨泉、小形仿製鏡

PL.28 整備進行中の国営吉野ヶ里歴史公園(全景、北内郭、南内郭西方倉庫群)

#### I. はじめに

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県神埼郡の神埼町・三田川町・東脊振村の3町村にまたがる通称「志波屋・ 吉野ヶ里丘陵」の南部に位置する弥生時代初頭から中・近世にいたるまでの大規模な遺跡である。

明治時代末頃から一帯に散布する土器片や石器片などが注意され始め、大正時代から昭和時代初期にかけて吉野ヶ里遺跡に関する幾つかの報告がなされていた<sup>(1)</sup>。いずれも夥しい遺物の量と甕棺墓群の存在、周辺での青銅器や青銅器鋳型などの出土から、重要な遺跡としての見通しが語られている。

吉野ヶ里遺跡一帯に各種開発事業が及んだ昭和50年代以降で、水田部の農業基盤整備(圃場整備)事業や工場・宅地の造成工事に伴う小規模な発掘調査が実施されるようになった。工業団地計画がほぼ固まった昭和57年には予定地全域(丘陵部)の確認調査が実施され、遺跡の内容がおぼろげながら知られるようになった。吉野ヶ里遺跡の本格的な発掘調査は、神埼工業団地計画に伴う事前調査として昭和61(1986)年度から開始されたが、その最終段階であった平成元年(1989)の2月下旬に、全貌がほぼ明らかになった弥生時代後期の大規模な環壕集落跡が報道によって全国的に注目されることとなった。その後、弥生時代中期の大型墳丘墓が調査され、8基の甕棺墓が発掘され把頭飾付き有柄銅剣をはじめとする5本の細形銅剣と79個のガラス管玉などが発見されたのを機に、3月上旬、県は工業団地計画を縮小し、環壕集落跡と墳丘墓を含む南部地域の保存を決定した。平成5(1990)年5月の史跡指定(約22ha)、翌年5月の特別史跡昇格を経て、平成4年10月には国営吉野ヶ里歴史公園(約54ha)の設置が閣議決定され、周囲の県営公園(約63ha)とともに、整備工事が進み、平成13(2001)年4月21日に整備が終了した北内郭を中心に第1期開園となり、現在も整備工事が進展している。

文化庁の補助による吉野ヶ里遺跡の確認調査は、平成元年(1989)度から遺跡の範囲確認と工業団地計画に伴う発掘調査で対象外となった地域の内容確認を主目的として開始されたが、環壕集落跡の範囲の確認、青銅器鋳造遺構の確認、北墳丘墓の再発掘による新たな甕棺墓と銅剣などの副葬品の発見、北内郭跡の発見など、遺跡の持つ情報量の豊富さが明らかになった。これまでの各種調査のうち補助事業の概要については既に報告書<sup>(3)</sup>などによって公にしており、本書は補助事業によって平成8年度から10年度の3年間に実施した確認調査の概要について記したものである。なお、この事業によって明らかになった情報は、整理・分析の上、国土交通省(旧建設省)国営吉野ヶ里歴史公園工事事務所が策定する国営吉野ヶ里歴史公園の基本設計や実施設計の基本資料として活用されている。

#### 註

- (1)藤谷庸夫・古賀孝・松尾禎作『古代東肥前の研究』1925
  - 七田忠志「その後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡について」『史前学雑誌』6巻4号 1934 三友国五郎「佐賀県における合甕遺跡地」『考古学雑誌』24巻5号 昭和9年
- (2)中牟田賢二『吉野ヶ里遺跡』吉野ヶ里遺跡調査会 昭和1983
- (3)佐賀県教育委員会『吉野ヶ里遺跡―佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ヶ里遺跡の確認調査報告書―』1990

佐賀県教育委員会『吉野ヶ里遺跡―平成2年度~7年度の発掘調査の概要―』1997



田手一本黒木地区 II 区第222調査区調査風景



田手一本黒木地区 II 区第222調査区木製品発掘風景



吉野ヶ里丘陵地区WI区第227調査区調査風景



\_\_\_\_\_ 吉野ヶ里丘陵地区VII区第228調査区調査風景



田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区調査風景



田手二本黒木地区 I 区第270調査区調査風景

時代の環壕跡や溝跡、土壙からは多数の木製品が発掘され、また、自然流路からは中国新時代の銅銭 「貨泉」が1点出土した。

南内郭跡南西方谷部には多くの調査区を設けて状況把握に努めたが、過去に谷の水田化の際に西方 向の勾配を階段状の水田として整備されていたため遺構の遺存状況が悪かった。しかし、一部破壊を 免れた区域も存在し、第236調査区では弥生時代後期の掘立柱建物跡群が、谷口に近い第230調査区 では弥生時代後期の新たな環壕跡が、谷の南側に沿って弥生時代中期の環壕状溝跡、谷の北側に沿っ て後期の自然流路らしい溝跡が検出され、多くの木製品を出土した。付近一帯の調査によって、それ まで情報が不足していた遺跡西方低地の遺構の残存状況やその年代などが明らかになるなど大きな成 果をあげることができた。

第230調査区で発見された後期の環壕跡の北への延長線を探すために、丘陵裾部にトレンチを設定 し調査を実施し、丘陵裾に沿って北方へ延びる環壕跡を確認した。

遺跡南部丘陵上の田手二本黒木地区Ⅲ区・田手一本黒木地区 I 区 (第231調査区) では、平成元年度・2年度の確認調査で青銅器鋳造関連遺構があった地区 (田手二本黒木地区Ⅲ区) と、墳丘状の盛土遺構が存在した西側の地区 (田手一本黒木地区 I 区) に小規模な調査区 (第231調査区) を設けて調査を実施した。翌10年度にこの付近一帯の広域的な調査を継続して実施した。

平成9年度の調査の主な目的は、丘陵西側の丘陵裾部や低地の状況を知るためのものであったが、 弥生時代中期の環壕とみられる溝跡や弥生時代後期の溝跡や掘立柱建物跡を多数検出し、また、中国 新時代の銅銭「貨泉」を発見したことも、大きな成果となった。

これらの調査で出土した遺物の水洗・注記・接合や写真などの調査記録類の整理作業は、前年度までの事業によって得られた遺物や調査記録類とあわせ、吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所でおこなった。

#### (3) 平成10年度の調査

平成10年度の確認調査は、前年度から遺構検出・一部発掘を実施していた遺跡南部丘陵上の田手二本黒木地区II区・田手一本黒木地区I区の第231調査区を拡張して実施したほか、南内郭跡西方の丘陵緩傾斜地から裾にかけての地域(高床倉庫群の存在が推定された部分)である吉野ヶ里地区V区(第306調査区)の遺構検出作業を実施した。なお、本格的な調査は次年度に実施した。

遺跡南部丘陵上の第231調査区を拡張した調査区は、北を田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区と、墳丘墓様の盛土遺構が存在する南の田手一本黒木地区I区第267調査区に分けて調査を実施したが、この付近では、妙法寺と呼ばれる中世寺院に近いため、中世の溝・壕跡や掘立柱建物跡・井戸跡などが検出され、弥生時代の中期から後期を中心とした遺構も検出された。第267調査区の墳丘状の盛土遺構では、南東部の堆積土層の中から中期の祭祀用土器を含む多量の土器群が出土した。この土器群の中には貝殻や獣骨が充満した装飾壺があり、また、第268調査区にかけて、この盛土遺構を取り囲むように巡る弥生時代後期の溝跡も検出されるなど、この人工丘の性格を知る上で重要な発見となった。

吉野ヶ里地区V区(第306調査区)は、昭和63年度に実施した工業団地計画に伴う発掘調査によって多数の大型掘立柱建物跡群が検出された地区の南に位置する調査区で、南内郭跡西方の丘陵緩斜面一帯の遺構分布の状況を把握するため、確認調査を実施した。この調査区の発掘調査は2ヶ年の計画で、10年度は表土・耕作土の除去と遺構検出をおこない、11年度に本格的な確認調査を実施した。

#### 1. 調査の経過と概要

#### (1) 平成8年度の調査

平成8年度の確認調査は、前年度から遺構検出・一部発掘を実施していた遺跡南端西方の丘陵裾部から平地の旧水田にあたる田手一本黒木地区II区(第222・223調査区)と、南内郭跡南の丘陵上の吉野ヶ里丘陵地区VII区(第227~230調査区)で実施した。

第222調査区の周辺では、昭和56年の農業基盤整備事業に伴う発掘調査や、平成2年の吉野ヶ里遺跡発掘調査事業などによって、掘立柱建物跡などが検出され、木製農具が出土しており、遺跡周辺部の集落跡や水田跡の存在を推定していた。泥炭層や夥しい数の木片や木製品の出土などで、作業は困難を極めたが、後期の大規模な環壕集落を取り囲む外環壕跡の延長部分と考えられる壕跡や、農具・工具・その他生活用具・祭祀具・建築部材など多種多様な木製品を得た。特に、過去の吉野ヶ里遺跡の発掘調査で断片的にしか出土していなかった各種木製品が多数出土したことは大きな成果であった。

第222調査区の東に隣接して設置した第223調査区の調査では、弥生時代後期の掘立柱建物跡群のほか、中世の溝跡・井戸跡などが検出され、陶磁器などが出土した。この調査区の東側は、過去に遺構が消滅するほどの土取工事がおこなわれていた。

丘陵上の第227・228調査区の調査では、弥生時代中期から後期にかけての甕棺墓群や、後期と考えられる溝跡が数条検出されたが、陸橋部をもち直線的に東西に延びる弥生時代後期終末期の溝跡を切って存在した溝跡は、一辺約20mのコ字形(方形)に巡るものであった。この溝跡からは弥生後期終末期・古墳時代初頭を主体とした土器群とともに、小形仿製鏡や鉄製斧・ガラス小玉などが出土した。ただし、後の調査で、平面コ字形に巡る溝跡は、前方後方墳(ST2200)の後方部を画する周溝跡であることが判明した。第229調査区の調査では、吉野ヶ里遺跡発掘調査事業の中で、調査の手があまり及んでいなかった地区に調査区を設けて確認調査を実施した。その結果、古墳時代前期の溝跡が検出された。

これらの調査で出土した遺物の水洗・注記・接合や写真などの調査記録類の整理作業は、前年度までの事業によって得られた遺物や調査記録類とあわせ、調査事務所においておこなった。

#### (2) 平成9年度の調査

平成9年度の確認調査は、遺跡南部の西側水田部の田手二本黒木地区 I 区 (第256~266調査区、第270~278調査区) や田一本松地区 I 区 (第232調査区)、南内郭跡南西方谷部の田手二本黒木地区 I 区 (第233~252調査区)、南内郭北西方丘陵裾部の吉野ヶ里地区 V 区 (第283~287調査区)、遺跡南部丘陵上の田手二本黒木地区 II 区・田手一本黒木地区 I 区 (第231調査区)について実施した。

遺跡南部の西側水田部の田手二本黒木地区 I 区一帯は、調査前は水田であり、湧水のため調査は困難を極めたが、多数の溝(環濠?)跡などが検出され、遺跡西部丘陵裾部の過去の状況が明らかになった。第270調査区では環濠状の溝跡や、その西側に礫を敷き詰めた部分などが検出され、溝跡からは木製品のほか、銅鏃 1 点が発見された。また、第274調査区の低湿地からは木製の櫛が、第276調査区の弥生時代後期前半と考えられる溝跡からは、網枠や鋤などとともに、鋳造鉄斧用の組合せ式の柄が出土した。

これらの調査区とは貝川を隔てた西側に設けた田一本松地区第232調査区では、弥生時代中期の環 濠とみられる溝跡や土壙、自然流路、中世と考えられる多数の小杭群や流路などが検出された。弥生 検出された遺構や断片的に出土する遺物などから、この付近には、弥生時代中期から後期終末期に属する竪穴住居跡や弥生時代後期を中心とした掘立柱建物跡群、弥生時代中期の甕棺墓、古墳時代の竪穴住居跡群、中世の掘立柱建物跡群や井戸跡などの存在が判明した。これらの調査で出土した遺物の水洗・注記・応急的な接合や写真などの調査記録類の整理作業は、前年度までの事業によって得られた遺物や調査記録類とあわせ、調査事務所において実施した。

Tab.1 平成8~10年度調查区一覧表

細木豆	Lth 57	<i>\$7</i>	云往	細水	<b>ナ 4、</b> 塩 推	→ ♪、塩 №m	市坐廷団
調査区	地 区	名	面積	調査	主な遺構	主 な 遺 物	事業種別
番号	H 7 - 1- H 1- W.F	Z 11 EZ	m²	年度	74. 4 700 15 05 1. 05 05		備考
222	田手一本黒木地	X II IX	1,1/1	<i>1</i> ∼8	弥生…環壕跡・水路跡	木製品(鋤・鍬・杵・臼等	網切爭業
						の農具、柱・鼠返し・梯子	
						等の建築部材、容器・杓子)	
000	田子 七田上山口	71157	00.4	7 0	中世…溝跡	陶磁器	사라 HL 국국 사사
223	田手一本黒木地	X II IX	294	<i>1</i> ∼8	弥生…掘立柱建物跡、土壙、溝跡	木製品 (柱など)	補助事業
224	田手二本黒木地	र गा रि		8	中世…溝跡 弥生…外環壕跡	陶磁器	補助事業
225	田手二本黒木地			8	弥生…外環壕跡		補助事業
226	田手二本黒木地			8	弥生…環壕跡		補助事業
227	吉野ヶ里丘陵地区	-	321	8	弥生…環塚跡 弥生…環塚跡、竪穴住居跡、貯蔵穴、	ガラス小玉、鉄鏃	補助事業
221	ロ野ケ玉山阪地	△ VII  △	321	0	掘立柱建物跡、甕棺墓	カノヘ小玉、	
					古墳…溝跡(前方後方墳周溝)		
					中世…溝跡		
228	吉野ヶ里丘陵地口	र गाउ	3,001	8	弥生…環壕跡		補助事業
220	日封り主止欧地区	27 AH 157	5,001	O	古墳…溝跡(前方後方墳周溝)	小形仿製鏡、ガラス小玉、	而助于木
					口氨 一种奶,(两万 及万 氨内 种)	鉄製斧	
					中世…溝跡	陶磁器	
229	吉野ヶ里丘陵地区	z vii iz	74	8	古墳初頭…溝跡	鉄鋤先	補助事業
230	田手二本黒木地		526	9	弥生…環壕跡、溝跡·水路、杭列、	木製品	補助事業
200	H 1		020	O	自然流路	7174СИН	111127 4-70
231	田手一本黒木地	X I X	3,000	9	弥生…盛土遺構、竪穴住居跡、掘立		補助事業
1 201	田手二本黒木地		0,000		柱建物跡		第267・168調査
					中世…溝跡、井戸跡	陶磁器	区で報告
232	田一本松地区Ⅰ	<u>X</u>	3,080	9	弥生…環壕跡、溝跡、土壙	貨泉、木製品	補助事業
			,		中世…溝跡、自然流路		
233	田手二本黒木地口	図Ⅰ区	119	9	遺構なし		補助事業
234	田手二本黒木地口		48	9	弥生…自然流路		補助事業
235	田手二本黒木地	区I区	63	9	弥生…溝(環壕?)跡		補助事業
236	田手二本黒木地	区I区	320	9	弥生…掘立柱建物跡6基、土壙		補助事業
237	田手二本黒木地		51	9	弥生…自然流路	木製品	補助事業
238	田手二本黒木地口	区I区	55	9	遺構なし		補助事業
239	田手二本黒木地口		183	9	弥生…溝(環壕?)跡	木製品	補助事業
240	田手二本黒木地		148	9	弥生…自然流路		補助事業
241	田手二本黒木地口		131	9	弥生…柱穴		補助事業
242	田手二本黒木地		143	9	弥生…柱穴、溝(環壕?)跡		補助事業
243	田手二本黒木地		10	9	遺構なし		補助事業
244	田手二本黒木地		113	9	弥生…溝(環壕?)跡		補助事業
245	田手二本黒木地	-	148	9	遺構なし		補助事業
246	田手二本黒木地		18	9	遺構なし		補助事業
	田手二本黒木地		30		弥生…溝(環壕?)跡		補助事業
248	田手二本黒木地		34	9	遺構なし		補助事業
249	田手二本黒木地		22	9	弥生…自然流路		補助事業
250	田手二本黒木地		8	9	弥生…環壕跡		補助事業
251	田手二本黒木地		12	9	弥生…環壕跡		補助事業
252	田手二本黒木地		5	9	弥生…環壕跡		補助事業
253	吉野ヶ里地区Ⅵ□			9	弥生…環壕跡		県土木部再配当
254	吉野ヶ里地区Ⅵ□			9	弥生…環壕跡		県土木部再配当
255	吉野ヶ里地区VI	<u>X</u>		9	弥生…環壕跡		県土木部再配当

			_	Selectific Science		I but tom
256	田手二本黒木地区I区	38	9	遺構なし		補助事業
257	田手二本黒木地区I区	149	9	弥生…環壕?跡		補助事業
258	田手二本黒木地区I区	93	9	弥生…環壕?跡		補助事業
259	田手二本黒木地区I区	19	9	弥生…溝跡		補助事業
260	田手二本黒木地区I区	50	9	弥生…溝跡		補助事業
261	田手二本黒木地区I区	45	9	弥生…溝跡		補助事業
262	田手二本黒木地区I区	22	9	弥生…溝跡		補助事業
263	田手二本黒木地区I区	43	9	遺構なし		補助事業
264	田手二本黒木地区I区	15	9	遺構なし		補助事業
265	田手二本黒木地区I区	52	9	遺構なし		補助事業
266	田手二本黒木地区I区	12	9	遺構なし		補助事業
267	田手一本黒木地区I区	2,200	9~10	弥生…盛土遺構、溝跡 (盛土遺構を	貝殻入り壺、祭祀土器	補助事業
		,		囲む)、掘立柱建物跡	7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7	
				中世…溝跡		
268	田手二本黒木地区Ⅲ区	2,000	9~10	弥生…溝跡 (盛土遺構を囲む)		補助事業
200	田 1 二十二八八四四 正 四	2,000	0 10	中世…溝跡		III DJ T A
269	吉野ヶ里地区VI区			弥生…環壕跡		県土木部再配当
270	田手二本黒木地区I区	311	9	弥生…環壕?跡、溝跡	銅鏃	補助事業
271	吉野ヶ里地区VI区	311	3	<u>沙工一块绿;</u> 奶、再奶	<b>型</b> 円 到大	県土木部再配当
271	音野ヶ里地区 VI区 田手二本黒木地区 I 区	58	Ω	弥生…溝跡		補助事業
	田手二本黒木地区 I 区		9			
273		11	9	遺構なし	_L. chil Low	補助事業
274	田手二本黒木地区I区	53	9	弥生…環壕?跡	木製櫛	補助事業
275	田手二本黒木地区I区	228	9	弥生…溝跡、土壙	組合せ式木製斧柄	補助事業
276	田手二本黒木地区I区	70	9	弥生…溝跡		補助事業
277	田手二本黒木地区I区	5	9	遺構なし		補助事業
278	田手二本黒木地区I区	24	9	遺構なし		補助事業
279	吉野ヶ里地区VI区		9	弥生…溝跡		県土木部再配当
280	吉野ヶ里地区Ⅵ区		9	弥生…溝跡		県土木部再配当
281	吉野ヶ里地区Ⅵ区		9	弥生…溝跡		県土木部再配当
282	吉野ヶ里地区VI区		9	遺構不明		県土木部再配当
283	吉野ヶ里地区V区	11	9	遺構なし		補助事業
284	吉野ヶ里地区V区	6	9	遺構なし		補助事業
285	吉野ヶ里地区V区	32	9	弥生…溝?跡		補助事業
286	吉野ヶ里地区V区	24	9	弥生…溝跡、柱穴		補助事業
287	吉野ヶ里地区V区	10	9	遺構なし		補助事業
288	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
289	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
290	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
291	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
292	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
293	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
	田一本松地区I区			弥生…環壕跡		県土木部再配当
					<u> </u>	
295	田一本松地区I区		10	弥生…環壕跡	船形木製品	県土木部再配当
296	田一本松地区I区		10	<b>亚丹 河南市</b>		県土木部再配当
297	田一本松地区I区		10	弥生…環壕跡		県土木部再配当
298	田一本松地区I区		10	弥生…環壕跡		県土木部再配当
299	田一本松地区I区		10	弥生…環壕跡		県土木部再配当
300	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
301	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
302	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
303	田一本松地区I区		10			県土木部再配当
304	田手一本黒木地区I区		10	弥生…溝(環壕?)、溝跡		建設省委託
				中世…掘立柱建物跡		
305	吉野ヶ里丘陵地区V区		10	弥生…外環壕出入口跡		建設省委託
306	吉野ヶ里地区V区	6,800	10~11	弥生…竪穴住居跡、掘立柱建物跡、		補助事業
	·			溝跡、甕棺墓		10年度は遺構検
				古墳…竪穴住居跡、溝跡、掘立柱建		出のみ、11年度
				物跡		に調査
				中世…溝跡、掘立柱建物跡		7
				1 □ 1146/4 1 4/H → ITVE 1/46/4.	I .	

#### 2. 調查体制

参事

#### (1)平成8~10年度の調査体制

( )内の数字は担当年度

課長	内田	泰智	$(8 \cdot 9)$
	西野	文夫	(10)

佛坂 勝男(8)

山口 裕史 (9・10)

課長補佐(副課長) 福山 正廣(8)

横田 榮士 (9・10)

庶務係長 岩瀬 茂生 (8・9)

津野 健夫 (10)

主査 久保 信行 (8~10)

黒田 誠(8) 相川ミエ子(10)

主事 吉村 俊也 (8~10)

富窪 道代 (8・9)

#### 【文化財課】調查担当

課長 高島 忠平(8)

佛坂 勝男 (9·10)

参事 木下 巧(8)

課長補佐(副課長) 深町 昌司(9)

田平 徳栄 (8・9)

大橋 康二 (9 · 10)

東中川忠美(10)

企画調整主査 七田 忠昭 (8~10)

指導主事 原 直樹(8・9)

文化財保護主事 吉本 健一(8.9)

細川 金也 (10)

渋谷 格 (10)

#### 三田川町教育委員会

主杳

草野 誠司(8)

主任主事 鷲見 昌尚 (9・10)

#### (2)平成14年度の報告書作成体制

#### 【文化課】事務局

 課長
 佛坂 勝男

 参事
 中園 一次

 副課長
 山口 康郎

東中川忠美

天本 洋一

野口佐智子

総務班専門員 天本 茂春

島田 一幸

主事 陶山 優

#### 【文化課吉野ヶ里遺跡班】調査担当

副課長天本洋一(班業務総括)専門員七田忠昭(調査総括)

企画調整主査 江副 一也 (管理·企画)

指導主事 山口 良弥 (調査)

長崎 浩 (企画・調査)

主査 細川 金也 (調査)

#### 3. 調査の方法

主杳

吉野ヶ里遺跡は、100haを越すと考えられる大規模な遺跡であるが、遺跡中心部の約22haは平成2年5月19日に史跡、翌3年5月28日に特別史跡に指定され、また、その周囲約28haは県史跡に指定されている。これら指定地内の埋蔵文化財は恒久的に保護されるものであり、現段階で無指定の地域にも特別史跡・県史跡と勝るとも劣らない内容の埋蔵文化財が包蔵されている。そのため、発掘による遺構への損害を最小限に止めるべき方法を模索しながら発掘調査を実施している。

また、調査の成果は、国営吉野ヶ里歴史公園での遺構復元設計の際の基本資料となるため、細かな情報を取り出すことも必要であり、方法を試行錯誤しながら、最善の方法を模索しているというのが現状である。将来の遺構の再検証や、進歩した調査方法や分析技術を駆使した調査のための遺構保存という観点から、現時点の調査によって、遺構内埋土を完全に除去することは避けなければならないと考えている。従って、現在は遺構発掘について、基本的に次のような方法を取っている。

なお、調査区の設定や調査の方法、成果の分析などに関しては、文化庁記念物課はじめ佐賀県文化 財保護審議委員会、各分野の研究者など埋蔵文化財に造詣の深い専門家の指導を得ている。

#### 調査区の設定

前年度までの調査成果を検討し、遺跡の全体像の解明に必要な地区に調査区を設定する。また、過去に調査を全く実施していない区域についても確認調査の対象にする。過去の調査区に近接して新たな調査区を設定する場合は、調査区付近の土層堆積の状態が将来にわたって観察できるように、調査区と調査区の間に畦となる未発掘区域を数m確保する。

#### 表土除去と調査の手順

遺構を覆っている耕作土や表土の除去は、基本的には重機(バックフォア)を用いるが、遺構面が極端に浅い位置に存在する場合については人力で行う。人力による遺構検出の後、座標杭を設置し、遺構分布図を平板測量(基本的に100分の1)にて作成する。その後、下記のような発掘を行いながら、性格が判明したものについて遺構番号を付す。発掘を進めながら遺構の個別写真を撮影し、全域の発掘が完了すれば、空中写真によって全景写真を撮影する。遺構の写真撮影は、主に35mm版とブローニー版(4 inch×5 inch版を使用する場合もある)のカメラを用い、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムに記録している。空中写真はバルーン式のものでフィルムは6 cm×6 cm版のモノクロームとカラーポジフィルムを使用している。なお、遺構の実測は、全域を20分の1縮尺でおこない、細かな図面が必要な遺構や断面土層については10分の1やさらに小縮尺で実測をおこなう。

#### 竪穴住居跡・貯蔵穴跡・土壙などの調査

平面プランを確認後、基本的には中軸線より片側を完全に発掘し、深さや埋土の堆積状況、柱穴などの内部遺構を確認する。ただし、遺構の残存度合いが著しく悪く全体プランが把握できなかった場合には、周囲または中央畦を残し全体の埋土を除去する場合もある。

#### 掘立柱建物跡の調査

掘立柱建物跡を構成する柱穴跡は、平面プランを確認後、中軸線より片側を完全に発掘し、深さや埋土の堆積状況、柱や礎板・枕木の有無や痕跡・法量などを確認する。この場合、幾つかの柱穴跡を選択して発掘し、幾つかの柱穴跡には手をつけない場合もある。

#### 環壕跡・溝跡の調査

規模の大小を問わず、平面プランを確認後、他の遺構との切り合いがほとんどない部分にトレンチ状の調査区を設け完全に発掘し、断面形状や深さ、埋土の堆積状況などを確認する。近年では、たとえば100m区間にわたって環壕・溝跡の平面プランを検出した場合、5%~10%に満たない区間を発掘し、他は完全に保存する。

#### 埋め戻し

調査終了後は、調査前に除去しておいた耕作土や表土、遺構から除去した土で埋め戻して保護して



竪穴住居跡発掘状況 (ほぼ完全発掘)



竪穴住居跡発掘状況 (半分発掘)



貯蔵穴跡発掘状況 (ほぼ完全発掘)



貯蔵穴跡発掘状況 (半分発掘)



貯蔵穴跡発掘状況 (一部発掘)



環壕跡発掘状況

いる。埋め戻しは、予め検出・発掘された遺構を人力によって覆ったのち、重機を用いて埋め戻しをおこなっている。その後、国営吉野ヶ里歴史公園整備の準備として国土交通省国営吉野ヶ里歴史公園工事事務所の手によって真砂土による盛土が施される。以前の一時期、発掘した遺構の上に真砂土で覆い、その上に表土類で埋めていたが、再発掘した際、遺構とその上の真砂土との間に雨水流によると考えられる溝状のものが確認され、また、遺構面から真砂土を除去することに困難を伴うことが判明したため、現在は上記のような方法で埋め戻している。

#### 見学者への公開

仮整備後の遺跡公開区域内及び公開区域に隣接した区域の発掘調査現場は、原則公開とし、発掘作業の状況や発掘されつつある遺構の見学ができるようにしている。その場合、見学者の便宜を図るため、調査区の周囲と調査区内部に幅1m~2mの見学路を設け、順路表示や調査の概要、個々の遺構についての説明版を設置するなどして、遺跡の理解に供している。

また、重要な遺跡や遺物が出土した場合や調査がある程度終了したときなどには、成果を公開する 発掘現場において現地説明会を、遺跡内の展示室において遺物の特別展示会などを開催している。発 掘された竪穴住居跡や高床建物跡、環壕跡と、仮整備された施設との対比ができるということで見学 者から好評を得ている。なお、平成13年4月の国営吉野ヶ里歴史公園開園以降も、同様な方法で、 発掘現場の公開を積極的におこなっている。

#### II. 遺跡の位置と環境

#### 1. 位置と地理的環境

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県の有明海沿岸に広がる佐賀平野の東部、神埼郡の神埼町と三田川町・東脊振村にまたがる通称吉野ヶ里丘陵(『志波屋・吉野ヶ里段丘』)の南部に位置する。吉野ヶ里丘陵南部の吉野ヶ里遺跡が立地する丘陵は、標高約26m~10mで、周囲の水田面からの比高は約10mである。遺跡は現行の行政区分では、神埼町大字志波屋(竹原地区)・同大字鶴(馬郡地区)、三田川町大字田手(吉野ヶ里・田手地区)、東脊振村(辛上地区)に位置する。今回報告する吉野ヶ里遺跡の各地区は大半が三田川町大字田手(吉野ヶ里・田手地区)と一部神埼町大字鶴(馬郡地区)に位置する。

佐賀平野は、有明海の潮汐と大小河川の流入による堆積作用によって形成された肥沃な平野である。 山麓部や河岸段丘、自然堤防、平野部の微高地は住居や集落の立地に適しており、広大な扇状地や谷 底平野・三角州は、豊富な水と温暖な気候(近年の佐賀市の気象は、最高気温33.4℃~38℃、最低 気温−4.7℃~−3.1℃、年間降水量1300mm~2600mm、平均湿度70%~74%、年間日照時間 2000時間前後)と相俟って卓越した農業生産基地として利用された。

現在、有明海は玄界灘沿岸に比べ、波の高さが格段に小さく穏やかで、反時計回りの方向に毎時 10kmの潮流がある。黄海から玄海灘の荒波を乗り越え、有明海に入れば容易で安全な航海が約束されたのである。また、有明海は約6mという国内最大の干満の差があり、満潮時には平野の奥深く潮が上り、船舶の航行に適していたものと考えられる。防禦といった視点で佐賀平野の地形をみると、背後に標高1000m級の脊振山地、東西両側に低山塊と丘陵、南前面に海(港津)が存在する軍事的に要害の地でもあった。

佐賀平野の東部にあたる三養基郡中原町から佐賀市にかけての脊振山地南麓には、多くの洪積世段 丘が発達して、大小の段丘が山麓部から南部の肥沃な沖積平野へ舌状に延びており、このような自然 環境が佐賀平野東部地域の特徴となっている。この地域は、県内でも遺跡が密集するところとして知 られており、旧石器時代から中・近世までの遺跡が多数存在している。以下、三養基郡西部の中原 町・上峰町・三根町以西、佐賀郡大和町以東の地域について記す。

#### 2. 歷史的環境

旧石器時代の遺跡は、山麓部や段丘上にその存在が確認されているが、本格的な調査が実施された例は少なく、表面採集か後世の遺構などに混在したものが発見される例が多い。中原町姫方遺跡からは礫器やナイフ形石器が、同町町南遺跡<sup>(1)</sup>や東脊振村山古賀遺跡<sup>(2)</sup>などからナイフ形石器が、吉野ヶ里遺跡でもナイフ形石器を主体とする石器群が多く出土している。また、数少ない本格的な調査例である神埼町船塚遺跡からは、2層にわたる文化層から礫群が確認され、ナイフ形石器や台形石器・剥片尖頭器などが出土している。特に、瀬戸内系石器群の出土は興味深く、当地域における旧石器文化の様相を窺うことができる。

縄文時代は、旧石器時代と同様に山麓部や段丘上に遺跡が確認されており、その数も増加している。 押型文士器の出土で学史的に著名な東脊振村戦場ヶ谷遺跡<sup>(3)</sup>をはじめ、中原町香田遺跡<sup>(4)</sup>(早期・晩期)、神埼町船塚遺跡(早・前期、晩期)・同志波屋六本松遺跡<sup>(5)</sup>(早期、後期)・同志波屋一の坪遺跡<sup>(6)</sup>(早期)、東脊振村タヶ里遺跡<sup>(7)</sup>(後期)、佐賀市金立開拓遺跡<sup>(8)</sup>(早・前期、後期)・同久保 泉丸山遺跡<sup>(9)</sup>(早期~晩期)・同鈴熊遺跡<sup>(10)</sup>(晩期)など多くの遺跡で確認されている。これらの内、 晩期に存在する久保泉丸山遺跡や香田遺跡では支石墓群が検出され、吉野ヶ里遺跡周辺では晩期の集 落跡と考えられる神埼町馬都遺跡<sup>(11)</sup>、三田川町田手二本松遺跡、東脊振村浦田遺跡<sup>(12)</sup>など平野に面 した遺跡で多数の土器片が発掘されており、この地域における弥生文化生成の実態が明らかになる日 も近いと考えられる。

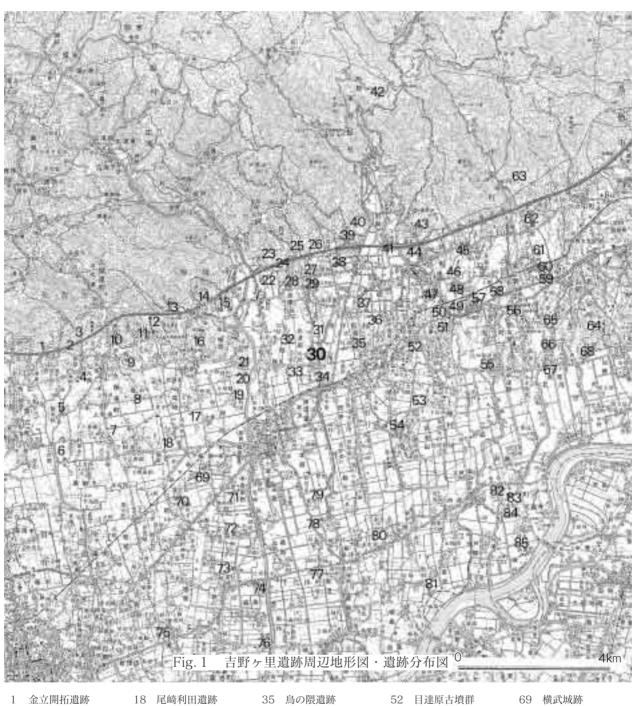
弥生時代になると遺跡の数は急増し、その分布も南部の沖積平野まで広がるようになる。近年の農業基盤整備事業などの開発に伴い平野部の調査が増加した結果、段丘上のみならず平野部の状況が明らかになった。前期の遺跡は中原町町南遺跡、東脊振村西石動遺跡(13)・同松原遺跡(14)、神埼町切畑遺跡(15)、吉野ヶ里遺跡など段丘上や山麓部に立地するものの他、前期に南部三角州地帯の千代田町黒井遺跡群(16)・同詫笛西芬遺跡(17)などの貝塚を含む集落群が形成されたことが明らかになっている。中でも吉野ヶ里遺跡や松原遺跡、町南遺跡では環壕集落が形成されるなど、地域の拠点的な集落も同時に生成されたものと考えられる。

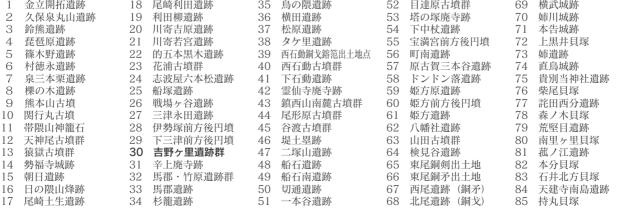
中期以降、集落の範囲はさらに拡大し数も著しく増加する。上峰町切遺遺跡<sup>(18)</sup>や東脊振村三津永田遺跡<sup>(19)</sup>・同横田松原遺跡<sup>(20)</sup>など副葬品をもった弥生時代墓地が従来から知られていたが、近年の大型開発に伴う調査の増加により、山麓部や段丘上の中原町姫方原遺跡<sup>(21)</sup>・同町南遺跡・同原古賀三本谷遺跡<sup>(22)</sup>、上峰町船石南遺跡・同一本谷遺跡<sup>(23)</sup>、東脊振村下石動遺跡<sup>(24)</sup>・同タヶ里遺跡、吉野ヶ里遺跡、神埼町的五本黒木遺跡<sup>(25)</sup>・同川寄遺跡群<sup>(26)</sup>、佐賀市琵琶原遺跡<sup>(27)</sup>・同村徳永遺跡<sup>(28)</sup>などの集落跡が、中原町姫方遺跡、船石遺跡<sup>(29)</sup>・船石南遺跡、上峰町と東脊振村にまたがる二塚山遺跡<sup>(30)</sup>、西石動遺跡、東背振村石動四本松遺跡<sup>(31)</sup>、吉野ヶ里遺跡、神埼町花浦遺跡・同志波屋六本松遺跡<sup>(32)</sup>・同朝日北遺跡<sup>(33)</sup>などから墓地跡が調査されている。また、平野部においても神埼町利田柳遺跡<sup>(34)</sup>・同荒堂 自遺跡<sup>(35)</sup>、詫田西分遺跡・同姉遺跡<sup>(36)</sup>、三根町本分遺跡<sup>(37)</sup>、さらには弥生時代終末期を中心とした諸富町村中角遺跡<sup>(38)</sup>・同徳富権現堂遺跡などの調査により、弥生時代集落立地の南下を示した。

このような多数の遺跡の中には、先に挙げた切通遺跡や五本谷遺跡・二塚山遺跡・横田遺跡・三津永田遺跡、東脊振村石動四本松遺跡・三田川町の首達原桜馬場遺跡<sup>(39)</sup>・千代田町高志神社遺跡<sup>(40)</sup>、同吉野ヶ里遺跡北墳丘墓などから漢式鏡、青銅製や鉄製の武器・武器形祭器、装身具などの重要な遺物が出土している。これに加えて西石動遺跡や姉遺跡、佐賀市櫟の木遺跡・同鍋島本村南遺跡<sup>(41)</sup>、大和町惣座遺跡<sup>(42)</sup>、吉野ヶ里遺跡からは初期のものを含む銅剣・銅矛・銅戈の鋳型などが出土している。これらは当地域が国内において青銅器製作が開始されたことを示し、弥生時代の青銅器生産に重要な資料を提供した。豊かな農業生産を背景に先進的な金属器文化が花開いていたことを示している。

これら弥生時代の数多くの集落や墓地跡の調査成果は、水稲耕作を基盤として各種の手工業的生産をおこない人口密集地として発展したこの地域の特徴を示したが、一つの地域をめぐる集落群や墓地群の構造や格差、あるいは相互の有機的な関係を窺い知る資料として重要である。

古墳時代では、集落遺跡としては三田川町で中校遺跡<sup>(43)</sup>、東脊振村タヶ里遺跡・同浦田遺跡・同瀬ノ尾遺跡<sup>(44)</sup>、神埼町志波屋六本松遺跡・同馬郡遺跡などで確認されており、墳墓としては東脊振村西一本杉遺跡の墳墓<sup>(45)</sup>、五本谷遺跡の方形周溝墓群<sup>(46)</sup>、吉野ヶ里遺跡の前方後方形墳墓や方形周溝墓群、佐賀市銚子塚前方後円墳<sup>(47)</sup>、三田川町と上峰町・東脊振村にまたがる目達原古墳群<sup>(48)</sup>(前方後円墳7基・円墳4基以上)、神埼町伊勢塚前方後円墳、二子山前方後円墳、東脊振村下三津西前方後円墳<sup>(49)</sup>、





中原町姫方前方後円墳などの古墳が築造される。山麓部では中原町山口、上峰町谷渡・同屋形原・同 鎮西山南麓、神埼町猿獄<sup>(50)</sup>・天神尾古墳群<sup>(51)</sup>などの古墳群が形成される。『古事記』や『続日本紀』 『国造本紀』にみえる目達原古墳群を営んだと考えられる筑紫米多国造、『日本書紀』にみえる嶺県主、 『続日本紀』にみえる佐嘉君などの豪族や有力農民層の動向が窺い知れる。

奈良時代には律令国家の成立に伴い、この地域の内中原町・上峰町・三根町は三根郡(律令時代初期には神埼町に属する)、現神埼郡と佐賀市の南部の一部は神埼郡、大和町、佐賀市の大半は佐嘉郡の範囲に含まれた。大和町には国庁跡<sup>(52)</sup>、国分寺<sup>(53)</sup>・国分尼寺跡などが存在し、その南には東西方向の駅路跡が存在する。この駅路跡は大和町から吉野ヶ里遺跡を経て中原町までの約17km区間に痕跡をとどめており<sup>(54)</sup>、数ヶ所で発掘調査が実施され道路側溝や切通しなどが確認されている<sup>(55)</sup>。吉野ヶ里遺跡や西に接する神埼町中園遺跡・同志波屋二の坪遺跡などの調査で、企画的に配置された多数の掘立柱建物跡群や井戸跡群が発掘され、木簡や墨書土器や箆描き土器(「神埼厨」)などの文字資料、帯金具が出土<sup>(56)</sup>するなど、神埼郡家や神埼駅家関連遺構の存在が想起される。この時代の集落跡も幾つか確認されているが、上峰町塔の塚廃寺<sup>(57)</sup>、東脊振村辛上廃寺<sup>(58)</sup>などの寺院跡は著名である。なお、ここ数年調査を継続している辛上廃寺では、方一町弱の寺域と、その内部に門跡や金堂と目される四面庇建物跡、塔の基壇などの遺構が確認された<sup>(59)</sup>。

平安時代には690町の勅旨田から発展した「神埼荘」と呼ばれる院領荘園が神埼郡域の大部分を占めるようになったと推定される。多数の中国の越州窯青磁や白磁・緑釉陶器・新羅の青銅箸・木製馬鞍などを出土した三田川町下中杖遺跡、木簡や緑釉陶器などを出土した神埼町荒堅目遺跡などか知られているが、他にも吉野ヶ里遺跡など平安時代から中世にかけての輸入陶磁器を出土する遺跡が数多く存在しており、対中国貿易拠点の一つとしての神埼荘の性格を窺わせている。

中世になると武士階級が実質的支配権を確立したと考えられ、小山塊上の山城跡や山城麓の館跡、平野部には環壕館跡などが多数存在しており、勢福寺城麓の神埼町城原二本谷西遺跡<sup>(60)</sup>や同町姉川城跡<sup>(61)</sup>などのように発掘調査によってその内容が明らかになったものも存在する。また、吉野ヶ里遺跡内には建治4・弘安元年(1278)、元寇の際に勅願祈祷寺として創建されたとされる田手川左岸の東妙寺より20年前の正嘉2(1258)年創建とされる妙法寺(尼寺)跡が存在している。

以上のように、この地域は縄文時代晩期(弥生時代早期)以降、農業と金属器などの先進文化をいち早く摂取し発展させたものと考えられる。吉野ヶ里遺跡が立地する佐賀平野東部地域が長期間にわたり政治的・軍事的に重要な位置を占めた背景には、水稲耕作に適した気候と広大な肥沃な土地や、南に国内外に開かれた有明海をもつなどの有利な地理的条件が少なからず影響しているものと考えられる。

#### 註

- (1) 佐賀県教育委員会『町南遺跡』佐賀県文化財調査報告書第68集 1983
- (2) 佐賀県教育委員会「山古賀遺跡」『西石動遺跡』佐賀県文化財調査報告書第97集 1990
- (3) 七田忠志「佐賀県戦場ヶ谷出土弥生式有紋土器について」『史前学雑誌』6-2 1934
- (4) 佐賀県教育委員会「香田遺跡」『香田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第57集 1981
- (5) 神埼町教育委員会『志波屋六本松遺跡』神埼町文化財調査報告書第9集 1983

- (6) 八尋実「志波屋一の坪遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に伴う文化財調査報告書8』 佐賀県文化財調査 報告書第98集 1990
- (7) 久保伸洋「夕ヶ里遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財報告書』1, 佐賀県文化財調査報告書第69集 1983
- (8) 佐賀県教育委員会『金立開拓遺跡』佐賀県文化財調査報告書第77集 1984
- (9) 佐賀県教育委員会『久保泉丸山遺跡』佐賀県文化財調査報告書第84集 1986
- (10) 佐賀県教育委員会「鈴熊遺跡」『九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集』 198]
- (11) 神埼町教育委員会『馬郡遺跡』神埼町文化財調査報告書第7集 1981
- (12) 佐賀県教育委員会「浦田遺跡」『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第66集 1983
- (13) 佐賀県教育委員会「西石動遺跡」『西石動遺跡』佐賀県文化財調査報告書第97集 1990
- (14) 東脊振村教育委員会『松原遺跡10区』東脊振村文化財調査報告書第22集 1998
- (15) 佐賀県教育委員会「切畑遺跡」『切畑遺跡』佐賀県文化財調査報告書第116集 1993
- (16) 千代田町教育委員会『黒井八本松遺跡』千代田町文化財調査報告書 1986 千代田町教育委員会『黒井遺跡』千代田町文化財調査報告書 1987
- (17) 千代田町教育委員会『詫田西分貝塚』千代田町文化財調査報告書第2集 1983 千代田町教育委員会『詫田西分遺跡』千代田町文化財調査報告書第20集 1996
- (18) 金関丈夫・金関恕・原口昌三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961
- (19) 金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』 196
- (20) 木下之治「考古学〈弥生時代〉—神埼郡東脊振村横田遺跡」『新郷土』20-1 1967
- (21) 多々良友博『姫方原遺跡 F地区』中野建設・中野ハウジング 1981
- (22) 中原町教育委員会『原古賀遺跡群(1)』中原町文化財調査報告書第9集 1990
- (23) 上峰村教育委員会『一本谷遺跡』上峰村文化財調査報告書 1983
- (24) 佐賀県教育委員会「下石動遺跡」『下石動遺跡』佐賀県文化財調査報告書第86集 1987
- (25) 神埼町教育委員会『的五本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第11集 1985
- (26) 佐賀県教育委員会『川寄吉原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第61集 1981
- (27) 佐賀市教育委員会『琵琶原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第13集 1981 他
- (28) 佐賀市教育委員会『村徳永遺跡―E・F・G・H地区の調査』佐賀市文化財調査報告書第32集 1990
- (29) 上峰村教育委員会『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書 1983
- (30) 佐賀県教育委員会「二塚山遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 1979
- (31) 東脊振村教育委員会『石動四本松遺跡』東脊振村文化財調査報告書第19集 1995
- (32) 神埼町教育委員会『志波屋六本松遺跡』神埼町文化財調査報告書第9集 1983
- (33) 佐賀県教育委員会「朝日北遺跡」『朝日北遺跡』佐賀県文化財調査報告書第110集 1992
- (34) 神埼町教育委員会『利田柳遺跡Ⅲ区』神埼町文化財調査報告書 1980
- (35) 神埼町教育委員会『荒堅目遺跡』神埼町文化財調査報告書第12集 1985
- (36) 千代田町教育委員会『姉遺跡Ⅰ』千代田町文化財調査報告書第3集 1985
- (37) 藤口健二他『本分貝塚』佐賀県立博物館調査研究書第7集 1984
- (38) 諸富町教育委員会『村中角遺跡』諸富町文化財調査報告書第2集 1985

- (39) 七田忠昭「文様ある銅矛について―佐賀県目達原出土銅矛の紹介を兼ねて」『九州考古学』52 1976
- (40) 千代田町教育委員会『高志神社遺跡』千代田町文化財調査報告書第27集 2000
- (41) 佐賀市教育委員会『鍋島本村南遺跡―1・2区の調査』佐賀市文化財調査報告書第35集 1991
- (42) 佐賀県教育委員会「惣座遺跡」『惣座遺跡』佐賀県文化財調査報告書第96集 1990
- (43) 佐賀県教育委員会『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集 1980
- (44) 久保伸洋「瀬ノ尾遺跡」『佐賀県文化財年報』1 1996
- (45) 佐賀県教育委員会「西一本杉遺跡」『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第66集 1982
- (46) 佐賀県教育委員会「五本谷遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 1979
- (47) 佐賀市教育委員会『佐賀市金立町銚子塚』 1976
- (48) 松尾禎作「目達原古墳群調査報告書」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第9輯 1950
- (49) 東脊振村教育委員会「下三津西古墳」『平成6·7年度東脊振村内文化財調査報告書』東脊振村
- (50) 佐賀県教育委員会「猿嶽A遺跡」「猿嶽C·D遺跡」『切畑遺跡』佐賀県文化財調査報告書第116集 1993
- (51) 神埼町教育委員会『早稲隈山』神埼町文化財調査報告書第59集 1997
- (52) 佐賀県教育委員会『肥前国府跡Ⅱ』『肥前国府跡Ⅲ』佐賀県文化財調査報告書第58集・78集 1981・1985
- (53) 大和町教育委員会『肥前国分寺跡』 1976
- (54) 木下良「空中写真に認められる想定駅路」『びぞん』64 1976
- (55) 七田忠昭「肥前神埼郡における駅路と周辺の官衙的建物群の調査」『条里制研究』4 1988 佐賀県教育委員会『古代官道・西海道肥前跡』 1995
- (56) 八尋実「馬郡・竹原遺跡群の調査」『佐賀県における古代官衙遺跡の調査』 1997
- (57) 松尾禎作「塔の塚廃寺址」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第7輯 1940
- (58) 七田忠志「肥前風土記神埼郡の條に於ける寺院に関する一考察」『上代文化』 13 1935 松尾禎作「東脊振村辛上廃寺址の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯 1936
- (59) 佐賀県教育委員会『吉野ヶ里銅鐸』佐賀県文化財調査報告書第152集 2002
- (60) 八尋実「城原二本谷西遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書』12, 佐賀県文化財調 査報告書第122集 1994
- (61) 神埼町教育委員会『姉川城跡』神埼町文化財調査報告書第50集 1996 神埼町教育委員会『姉川城跡―7次の発掘調査報告書』神埼町文化財調査報告書第63集 1998

#### Ⅲ. 調査の概要と成果

地区別に遺構と遺物に分けて、確認調査の成果の概要を報告する。個々の遺構・遺物の詳細については、後の正式な調査報告書に掲載できるように整理・分析作業を進めているので、ここでは主なものについてのみ記す。

#### 1. 田手一本黒木地区Ⅱ区の遺構と遺物

田手一本黒木地区II区は、遺跡南端西側の丘陵裾部から低地にあたる三田川町域の、調査以前は水田として利用されていた湿潤な地区である。県史跡区域にあたる。丘陵裾部の状況把握と、工業団地計画に伴う発掘調査で発掘された弥生時代後期の環壕跡(外環壕跡)の延長路線を把握し、また、平成元年度の確認調査で発見された臼など木製品の埋没状況を把握するという目的で、第222・223調査区の2ヶ所の調査区を設定して調査を実施した。いずれの調査区でも弥生時代の集落に関する遺構群、中世の遺構群が確認され、それぞれの時期の遺物が出土した。特に、第222調査区では弥生時代中期の包含層を切り込んだ後期の環壕跡が確認され、多種多様な木製品を多数出土した。

#### (1) 第222調査区

#### 概要

第222調査区は、丘陵裾部から低地にかけての部分で、弥生時代中期の土器や木製品、木片などを含む黒褐色の沖積層が堆積していたが、その層を切り込んで設けられた壕跡(SD0105)が丘陵裾部と低地との境に沿って確認した。また、この壕跡の西のさらに低地側では、中期の包含層を切り込んだ5条の溝跡(SD0106・SD0107・SD0108・SD0109・SD0110)を確認したが、出土遺物がほとんど無く、詳細な時期や性格は把握できなかった。自然流路であった可能性もある。さらに、壕跡の東に接する裾部あたりでは、中世の溝跡(SD0117)を確認したが、この溝跡は、第223調査区で確認された中世の溝跡(SD0060)の延長部分と考えられる(Fig.4)。なお、現代の水田耕作土直下には中世以降の畝跡が残り、その間にはヒトやウシの足跡らしい痕跡も遺存していた。

#### 環壕跡 (SD0105)

調査区の南東隅から北中央部へと延びる弥生時代後期の壕跡で、幅は4.0m~5.0m、残存している深さは最も深い部分で0.56mである。調査区の北あたりで、直線的に切れており幅4.0mの出入口部を掘り残している。陸橋の幅は、北側に水路が存在するため調査できなかったが、6.5m以上と考えている。

環壕跡からは弥生土器(Fig.5・6)が出土した。中期中頃の甕(Fig.5—1~3)や器台(Fig.5—13)、後期前半~中頃前後の甕(Fig.5—4~7)や器台(Fig.5—14)、壺(Fig.5—9~13・17)、高坏(Fig.5—15)などに混じって、後期後半~終末期と考えられる甕 (Fig.5—7・8・10・11) や器台(Fig.5—15)、支脚(Fig.5—12)、高坏(Fig.6—15)、壺(Fig.6—12)が出土した。中期から後期前半の土器は環壕掘削前の包含層に含まれていた可能性があり、この環壕の掘削時期や埋没時期を知る手がかりになる。いずれにせよ、遺構上面が削平されていることを考慮すれば、この環壕は、後期終末期まで機能していたと考えられる。

また、SD0105溝跡からは、弥生時代中期から後期にかけての土器や石器などとともに、多量の木製品が出土している。このSD0105溝跡に設定したトレンチにかかり、取上げた自然木を含む木製品は、400点をこえる。これらの木製品は、木の枝や枝の先端の一部を加工した杭など自然木に近い

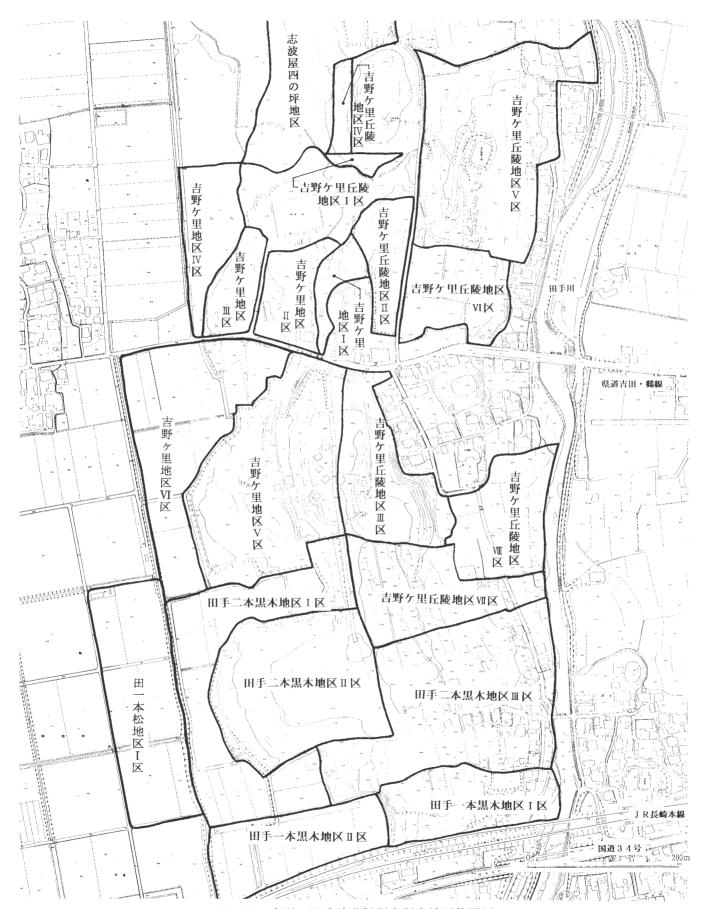


Fig. 2 吉野ヶ里遺跡発掘調査調査地区位置図



Fig. 3 確認調查 調查区位置図 (1/2,000)

ものが多数を占めるが、鍬や鋤、斧柄等の農工具や柱や梯子、ねずみ返し等の建築部材、矛や戈形を した祭祀具など人為的な加工が施された木製品が、234点出土している。このうち、保存処理が終了 し、形状を比較的良好に残す45点について図示した。

S D0105環壕跡からは多種多様な木製品(Fig.7~15)が多数出土した。農具や工具、漁撈具、容器、祭祀具、建築部材その他と数も種類も豊富である。農具には鎌の柄(Fig.7—4)・エブリ(Fig.7—6)・鍬(Fig.8—5・6、Fig.9—1)・鋤(Fig.8—3・4、Fig.9—2)・杵(Fig.9—3、Fig.10—3)・臼(Fig.10—4・5)・横槌(Fig.8—1・2、Fig.9—4)などがある。工具には斧や手斧の柄(Fig.7—1~3・5)がある。漁撈具には網枠(Fig.15)がある。容器には合子の蓋(Fig.13—1)や皿(Fig.13—2)、槽・盤の類(Fig.13—4、Fig.14—2)、高杯(Fig.14—1)などがある。祭祀具には戈形(Fig.12—5)や剣・矛形(Fig.12—6~8)、刀子形(Fig.12—4)などがある。また、図示していないが、建築部材には柱や梯子、鼠返しなども出土した。

斧柄 (Fig7—1~3・5) は、いずれも曲柄。1・2は、斧台部の破片。3は、斧台と柄が断面方形に加工されている。5は、斧台の先端に袋状鉄斧の取り付けられた痕跡が残る。樹種は、アカガシ。鎌柄 (Fig7—4) は、内湾する柄の先端の内側に長方形の抉りを入れる。同種のものが、佐賀県小城郡三日月町土生遺跡、同牛津町生立ヶ里遺跡、福岡県朝倉郡夜須町惣利遺跡等で出土している。樹種は、チシャノキ。エブリ (Fig7—6) は、刃部の一部を欠損するが、10本に復元できる。柄穴の周囲は、方形に隆起する。樹種は、アカガシ。横槌 (Fig8—1・2) は、小型のものと大型のものがある。又鍬 (Fig8—3・4) のうち、3は、刃部が40cmを超える長いものである。平鍬 (Fig8—5・6) は、いずれも方形の柄穴を持つ。鍬柄 (Fig9—1) は、折損しているが、完形品である。柄の先端には抉りがあるほか、楔を装着する部分が一段低くなっている。鋤は、握り部と柄部にわかれているが、同一個体である。竪杵 (Fig9—3・4、Fig10—3) は、3個体分みつかっている。完形の竪杵 (Fig10—3) は、全長130.0cmで握部に一条の節帯を持つ。

履物は2点(Fig.10—1・2)出土している。この履物は、田一本松地区第291・297調査区から各1点見つかっており、合計4点出土している。1は、右足の上半部の破片である。側面の両側に舌上の突出部の一部が残る。裏側は、平らである。内法の最大幅は、6.4cmで比較的小型のタイプである。2は、完形の履物である。右足で側面の左側に舌上の突出部が残る。この突出部上の側面には、穿孔があり紐を通す孔とみられる。裏面は、平らである。内法の中央部の長さ22.0cm、内法の最大幅10.1cm。この2点の履物の樹種は、いずれもスダジイである。臼は2点(Fig.10—4・5)出土している。

4は、口縁部の平面形が楕円形をしたものである。全長50.0cm、口縁の内法長径40.0cm、短径25.0cm。胴部がくびれた鼓形で柱状の突起を四方に削り出す。樹種は、クスノキ。5は、平成元年に実施した確認調査(第80調査区)で出土していたが、今回その出土位置の検討からSD0105溝跡出土と判明。全長47.3cm、口径51.0cm。胴部がくびれ鼓形で5の臼より幅広い柱状の突起を四方に削り出す。細長い先端部を欠失する木製品(Fig.11—1)は、栓または木鏃。輪状に丸められた蔓状のもの(Fig.11—2~4)は、何らかの製品を縛る紐として用いられたものか。石包丁に似た形態をした木製品(Fig.11—5)は、近畿地方等で出土する木包丁と形態が異なっており、穂摘み具として用いられたものではない。現段階では用途は不明である。ただ、側縁部両端がすり減っており、土器製作用のハケ目原体として使用された可能性(愛媛大学田崎博之氏教示)を考えている。樹種はス

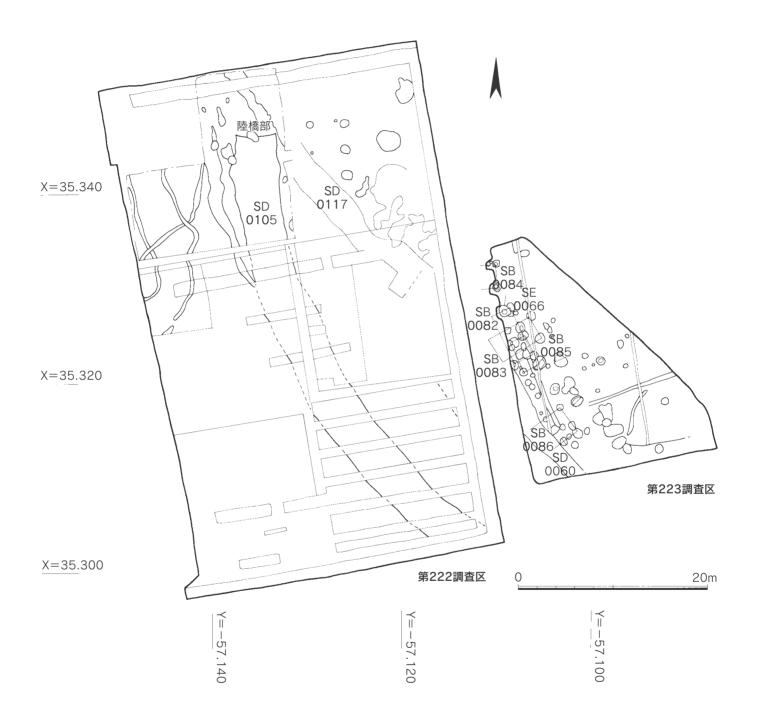


Fig. 4 田手一本黒木地区II区第222·223調査区 遺構分布図

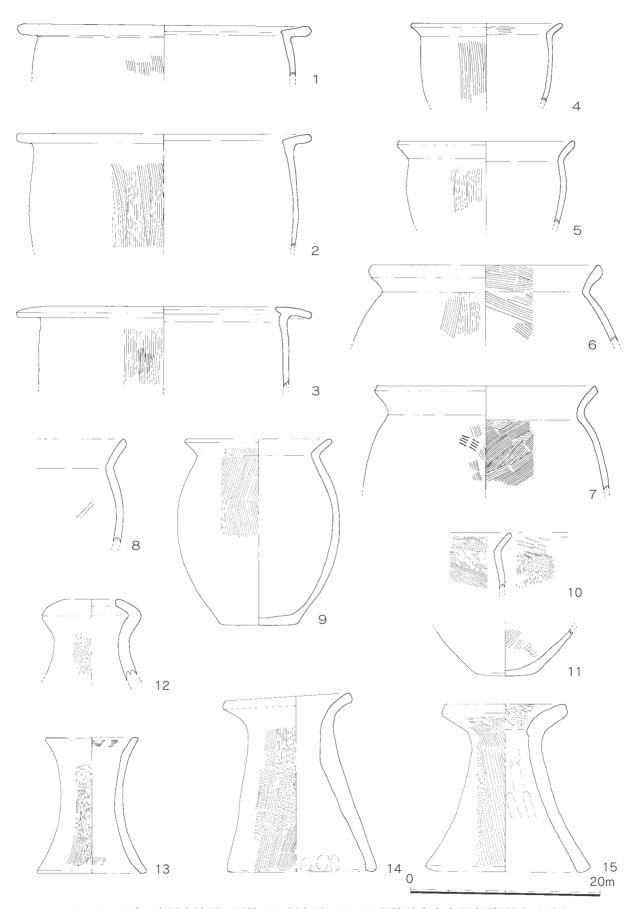


Fig. 5 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土土器実測図(1)(1/4)

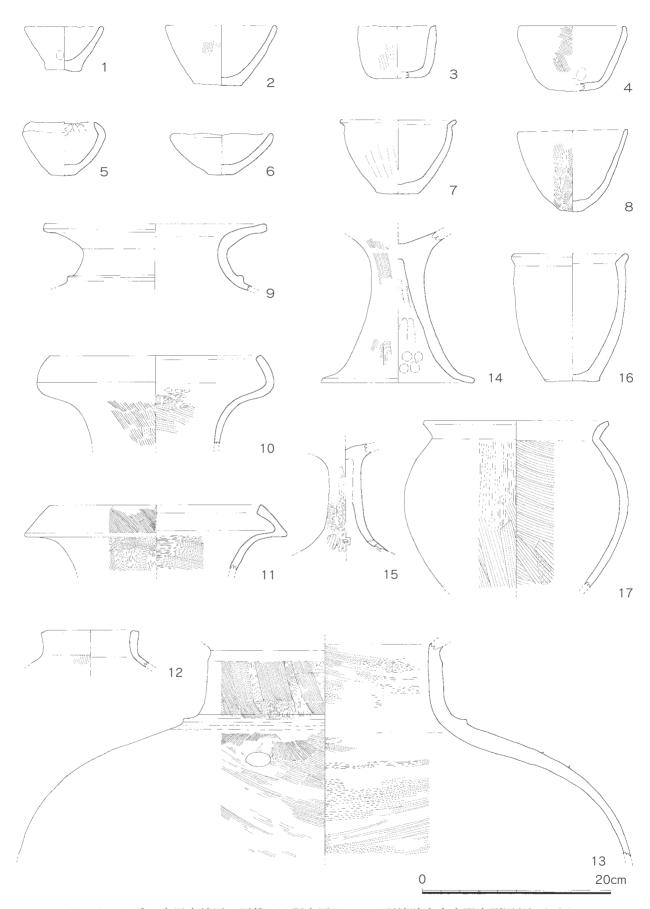


Fig. 6 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土土器実測図(2) (1/4)

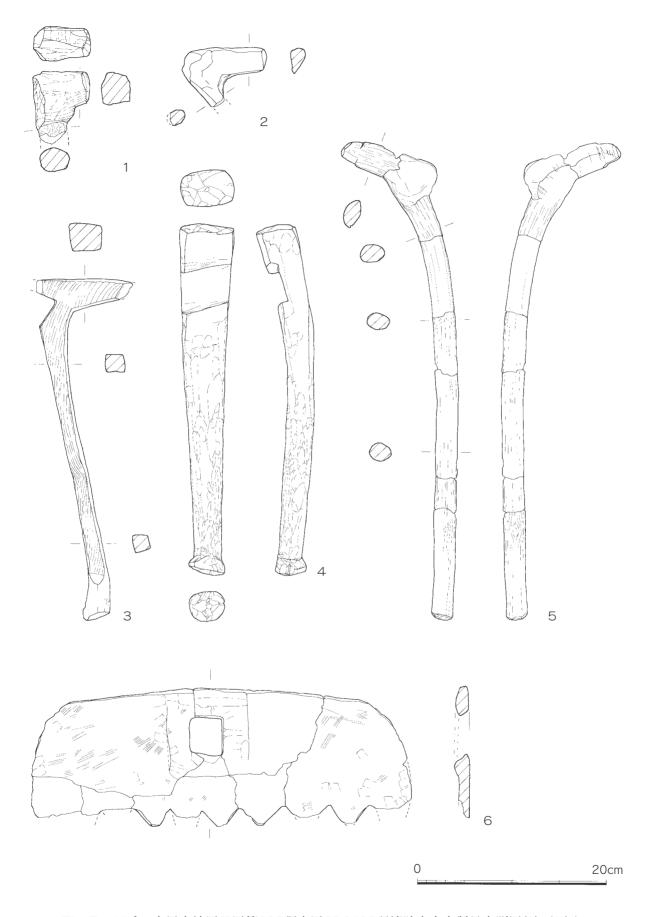


Fig. 7 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(1)(1/4)

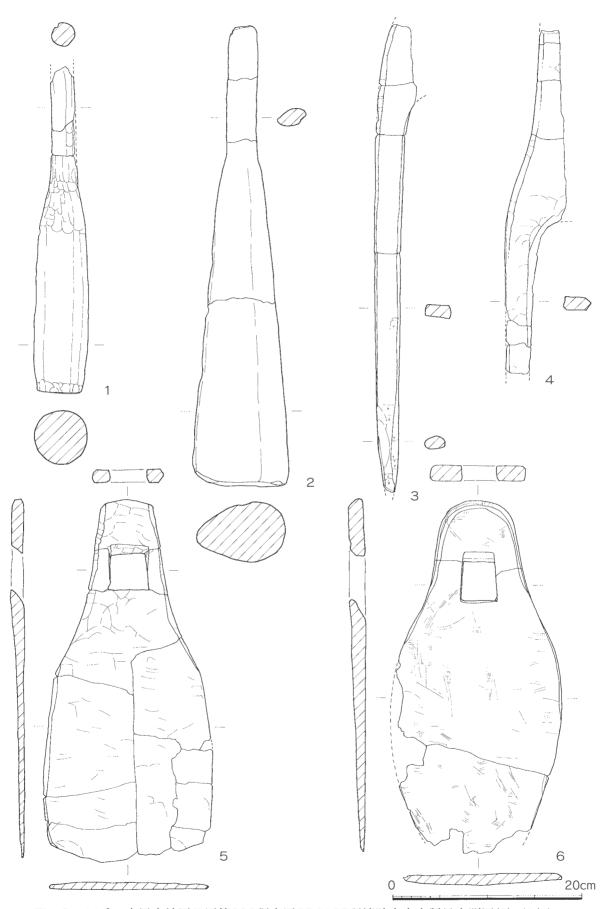


Fig. 8 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(2) (1/4)

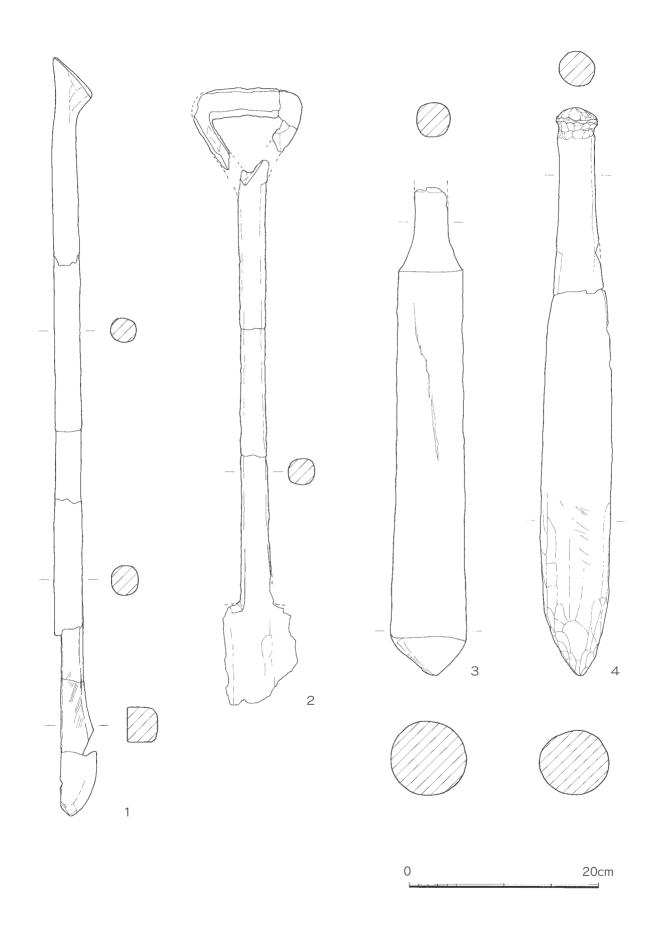


Fig. 9 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(3) (1/4)

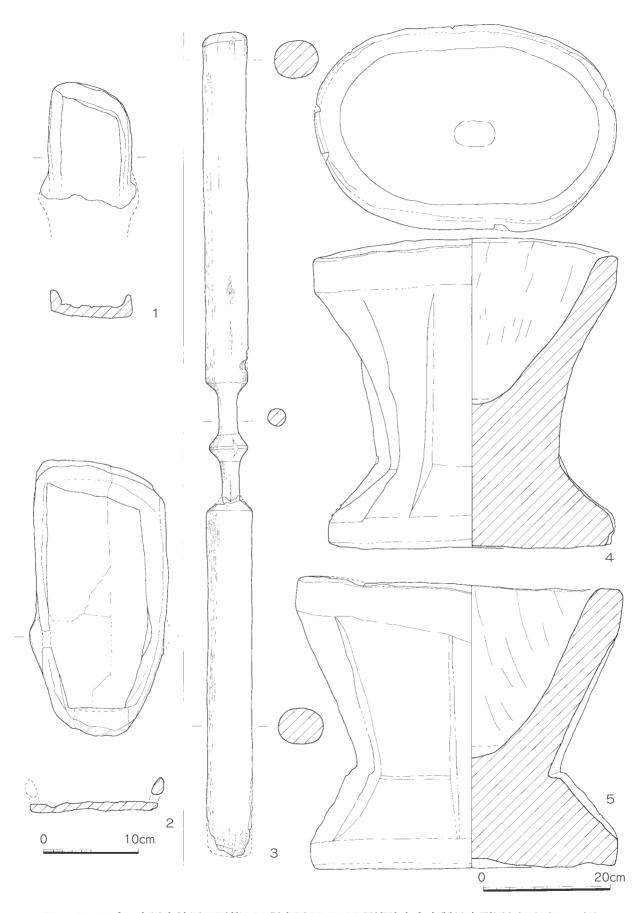


Fig.10 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(4)(1/4·1/6)

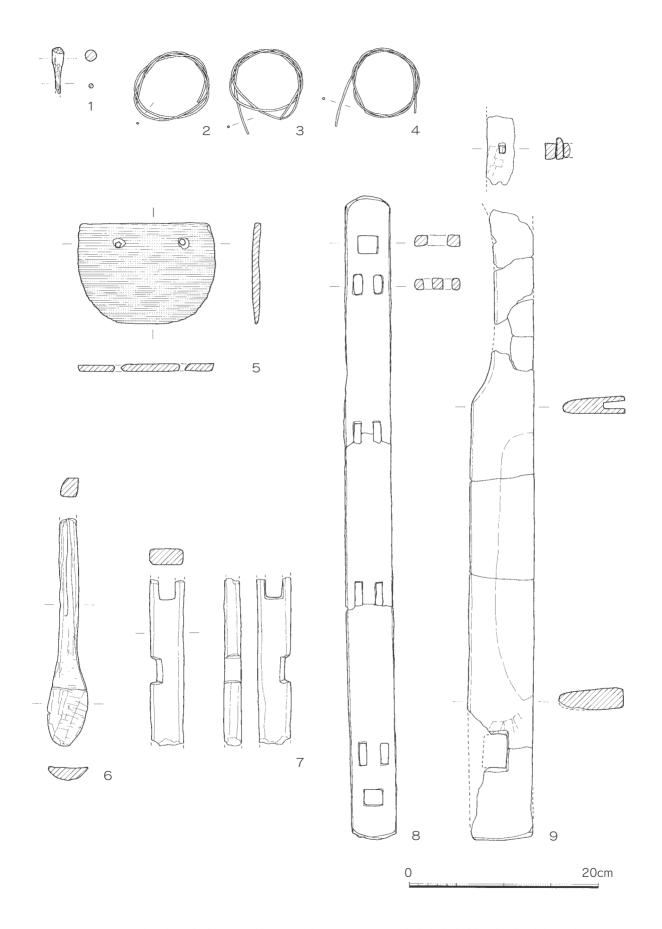


Fig.11 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(5) (1/4)

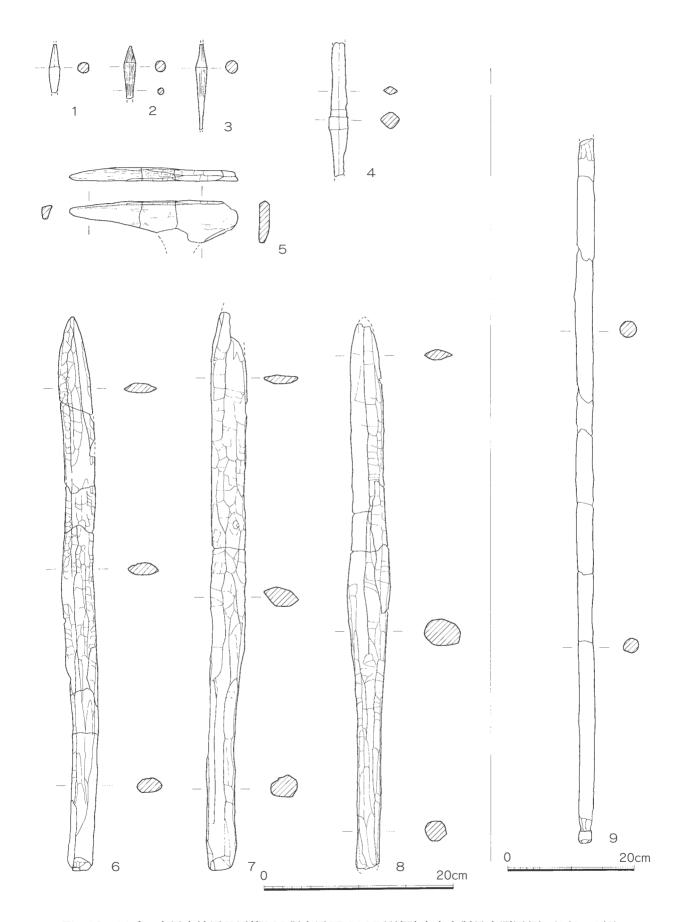


Fig.12 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(6) (1/4·1/6)

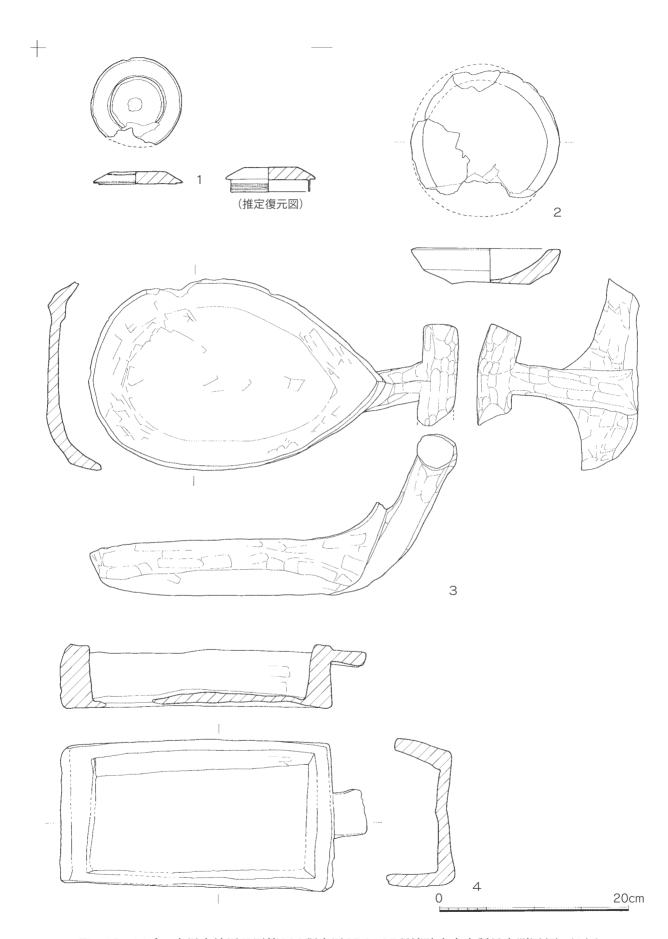


Fig.13 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(7) (1/4)

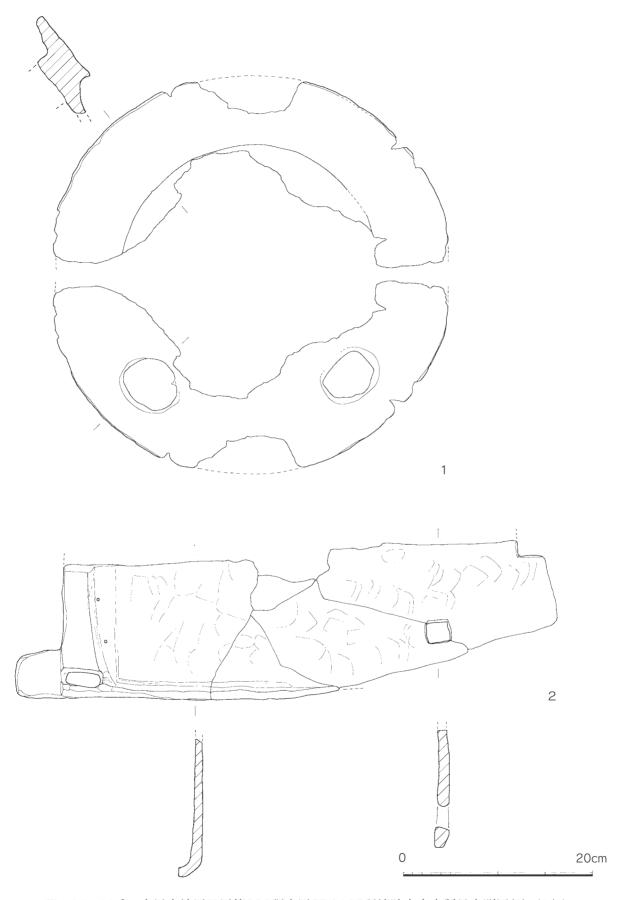


Fig.14 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(8) (1/4)

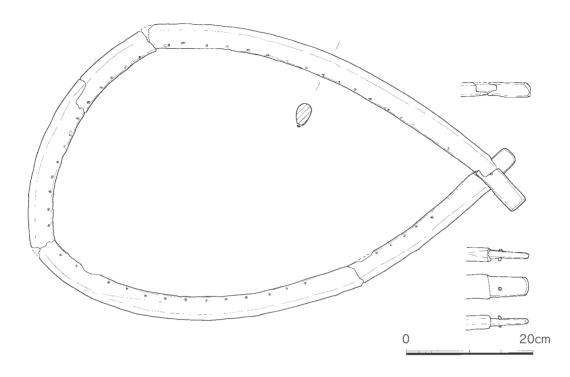


Fig.15 田手一本黒木地区II区第222調査区SD0105環壕跡出土木製品実測図(9) (1/4)

ギ。食事具である匙形木製品(Fig.11—6)は、身の部分が刳り込まれていないため、未製品と思われる。雑具(Fig.11—7~9)は3点図示した。8は、細長い板に両端に方形の孔を2ヶ所開け、その内側には2対1組の孔を4ヶ所に開ける。組合せ式の机の部材か。9は、幅約7.0 cmの板の一端に長方形の穿孔を持ち、上方でややくびれて細くなる。この板の側面にはホゾ孔が2ヶ所みられる。また、接合はしないが、同一個体と見られる破片には、目釘が残る。今回、この木製品は、雑具として取り扱ったが、建築部材の可能性も考えられる。

木鏃(Fig.12—1~3)3点を図示した。この木鏃は、他の地区でも出土している。樹種はいずれもイスノキ。刀子の形を模倣した木製品(Fig.12—4)は、刃部の断面は菱形で鎬を明瞭に持つ。祭祀具か。戈形と考えられる木製品(Fig.12—5)は、柄を欠失する。剣または矛形と考えられる木製品(Fig.12—6~8)は、3点出土している。6は、刃部がわずかに蛇行し、柄は扁平に削り出されている。8は、胴部中央が円形に近く、矛を模倣したものか。いずれも祭祀具。弓(Fig.12—9)は、1点出土している。出土時は完形品であったが、弓弭の一端が保管時に破損した。現存長116.5cm。短弓と考えられ、弓幹には樹皮が残る。樹種は、ヤマビワ。

容器または容器状と考えられる木製品(Fig.13・14)は、6点図示した。漆塗り木製品(Fig.13 -1)は、容器の蓋と考えられるものである。径9.6cmの円形で断面形が台形状をした木地に黒漆を塗り、その上から中央部に円文を蓋の稜部と縁に沿って赤漆を施す。裏側には、外周より0.7cm程内側にわずかな立ち上がりがある。この漆塗木製品の側からは、樹皮状のものに黒漆を塗り、赤漆で5条の直線を線描した断片が出土している。この漆が施された樹皮状のものは、漆塗り蓋の立ち上がり部分の周囲に沿って貼り付け、蓋の側面をなしていたと考えている。同種の漆塗り蓋は、吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区 I 区第237調査区の S D 0 3 0 8 溝跡、佐賀県神埼郡神埼町利田柳遺跡、同唐津市

千々賀遺跡のほか、福岡市雀居遺跡等でもみつかっている。平面が楕円形をした見込みの浅い身部に「T」字状をした把手がつく木製品(Fig.13—3)は、一木を削り出してつくられており、形状の優れた容器である。ただし、身部の両側縁の高さが異なり、傾いた形となるため、漁労具であるアカ取りとみる見方もある。見込みの深い長方形の容器(Fig.13—4)は、片側は失われているが、容器の短辺側の上端には、舌状の把手がつく。身の半分を欠失する容器(Fig.14—1)は、その形状が弥生時代中期の土器である須玖式土器の高杯の口縁部に類似する。ただし、高杯のように長い脚部がつくのではなく、円形の短い足が4ヶ所につくと考えられる。容器に類似した木製品(Fig.14—2)がある。把手の一端に舌状の突起がつくほか、把手の端部に長方形の穴や見込みの周囲に小さな孔等がみられる。形状が容器形をしているため、容器としているが、用途不明品である。

確実な漁労具として網枠(Fig.15)がある。一木を曲げ、片側に開けたホゾ穴に扁平な長方形に削り出した先端部を差込み、木製目釘で留める。樹種は、ブドウ属である。

# (2) 第223調査区(Fig. 4)

### 概要

丘陵裾部にあたる部分で、調査区の東側は日本国有鉄道長崎本線建設工事などの過去の土取りで大きく削平されていた。遺構は西側に集中して存在する。調査の結果、弥生時代中期後半から後期前半と考えられる掘立柱建物跡4基以上や土壙、中世の溝跡1条と井戸跡1基、弥生時代の可能性が高いが時期不明の溝跡などを検出した。

掘立柱建物跡群 (SB0082 · 0083 · 0084 · 0085 · 0086)

調査区の西に集中して、弥生時代後期のものと考えられる掘立柱建物群4基以上を検出した。調査区の西は調査区外で、かつ中世の溝跡(SD0060)が存在するため、全体規模を確実に把握できるものはない。それぞれの規模は、SD0082建物跡が1間以上×2間(2.08m以上×4.70m)、SD0083建物跡が1間×1間以上(2.81m×2.68m以上)、SD0084建物跡が1間×?間(2.15m×?m)、SD0085建物跡が1間×1間以上(3.40m×1.75m以上)、SD0086建物跡が1間×1間以上(3.05m×2.05m以上)である。なおSB0083建物跡の2個とSB0085建物跡の1個の柱穴底部には柱の沈下を防ぐための加工された枕木(横木)が遺存していた。他にも枕木が残る柱穴もあり、さらに数基の掘立柱建物跡が存在したことは確実であるが、全体規模は把握できなかった。

掘立柱建物跡群を構成する柱穴跡からは、弥生時代前期末から後期前半にかけての弥生土器 (Fig.16)が出土した。前期末から中期後半の甕や壺とともに、SB0085建物跡以外の柱穴からは後 期前半を主体とする甕(13)や壺(7・27・28)などが出土した。一帯で後期後半~終末期の土器片はわずかしか出土しないことなどから、これらの掘立柱建物跡群の時期は弥生時代後期前半以降、後期後 半までは下らない時期の建物群であったものと考えられる。

#### 溝跡 (SD0060)

調査区の南西部に位置する中世の溝跡である。南東―北西方向に延びている。約14m区間検出したが、トレンチを設けて発掘した部分で深さは0.60mであった。断面は底が平たい逆台形である。第222調査区北東部で検出したSD0117溝跡と同一の溝と考えられる。

この溝跡からは土器や陶磁器が出土した(Fig. 16)。土器には土師器坏(31)があり、陶磁器には碁笥

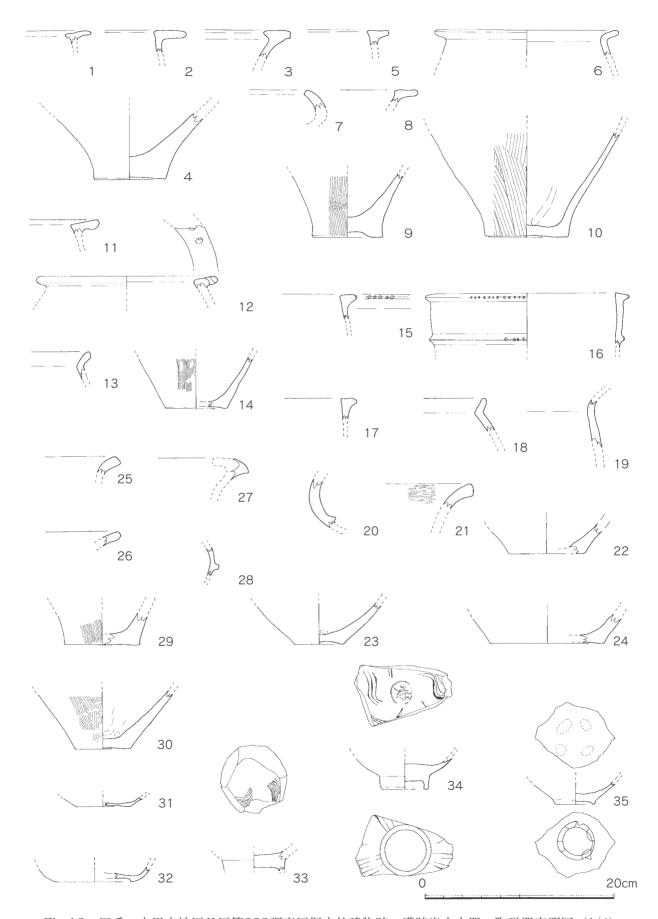


Fig.16 田手一本黒木地区 II 区第223調査区掘立柱建物跡・溝跡出土土器・陶磁器実測図 (1/4)  $(1\sim4$  はSB0082、 $5\sim10$  はSB0083、 $11\sim14$  はSB0084、 $15\sim24$  はSB0085、 $25\sim30$  はSB0086、 $31\sim35$  はSD0060出土)

底の青磁皿(32)や青磁碗(33・34)、李朝陶器の碗(35)などの輸入陶磁器が出土した。

#### 井戸跡 (SE0066)

調査区の北西部に位置する中世の井戸跡である。径1.2mの円形に近い平面形で、完全には発掘していないため深さは不明である。

## 2. 田一本松地区 I 区の遺構と遺物

遺跡南部西側の低地にあたる神埼町域の地区である。三田川町域とを隔てて南流する貝川の右岸にあたり、調査以前は水田として利用されていた湿潤な地区である。遺跡としては無指定地区にあたる。前述の第222調査区で環壕跡が検出され多数の木製品が出土したため、さらに西方の状況を把握するために、第232調査区を設定して調査を実施した。

## (1) 第232調査区

### 概要

調査区の東側は火山灰土が堆積する丘陵裾、西へ向かって次第に低地へと移行する位置にあたる。 調査の結果、弥生時代中期の環壕と考えられる溝跡1条と土壙数基、中世の溝跡2条や土壙数基、時 期不明の流路跡数条を検出した(Fig.17)。

#### 環壕跡 (SD0001 · 0006 · 0040)

調査区の南半部中央に位置する弥生時代中期の壕跡である。逆時計回りに少し湾曲しながら南から 北へ延びている。SD0001溝跡とSD0006溝跡は一連のものと考えられる。SD0040溝跡は、調 査区の北西部を斜めに横切り、多くの木製品を出土した。

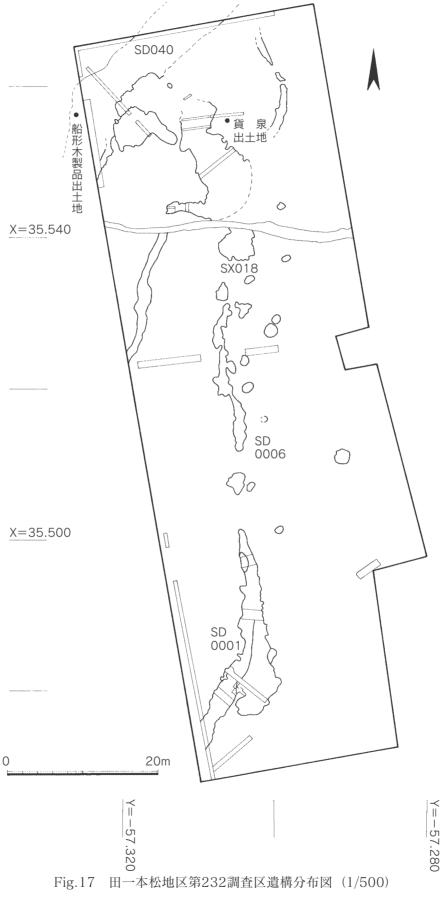
SD0001溝跡からは弥生時代中期の土器(Fig. 18)が出土した。

また、調査区北部の環壕にあたる部分からは弥生時代中期の土器(Fig. 18)とともに多数の木製品(Fig. 19~21)が出土した。甕底部の一つ(Fig. 18—4)は、朝鮮系無文土器の特徴をもつ。

田一本松地区第232調査区から出土した遺物のうち、青銅製品1点と木製品11点(Fig.19~21)を図示した。なお、平成10年度実施した県営吉野ヶ里歴史公園事業に伴い調査を実施した第295調査区から出土した船形木製品は、第232調査区の西隣で検出した溝跡も同一のものであることからここで取上げる。

青銅製品には、銭貨1点 (Fig.19—1) がある。自然流路の跡と考えられる砂層から出土した。この銭貨は、中国「新」時代に用いられた「貨泉」である。銅質は良好で文字も明瞭に読み取れる。径2.2cm、穿は、正方形で一辺が0.7cm。現在の重量は2.6g。

楔(Fig.19-2)は、裏面に長楕円状の抉りがある。斧柄(Fig.19-3)は先端部を欠失する。ただし、斧台部に相当する部分が、細くなっており、基部に袋部を有する鑿状鉄器の柄の可能性も考えられる。杓子形木製品(Fig.19-4)は、完形品である。全長54.8cmで、樹種は、シャンシャンボ。ヘラ状木製品(Fig.19-5)は完形品で、身部の両肩に抉りが入る。横槌(Fig.19-6・7)のうち、7は、身の中央部がへこみ、長期の使用を窺わせる。有頭棒(Fig.19-8)は、棒の先端を尖らせ、その反対側には、頭部を削り出す。身部には表皮を残す。径0.6cmの棒状木製品(Fig.20-1)は、先端部が尖っている。紡錘車の心棒か。エブリ(Fig.20-3)は、通常のエブリと異なり、身部に方形の孔を2つ持つ。エブリの上端部中央が破損しているところから、この破損部に柄を取り付けてい



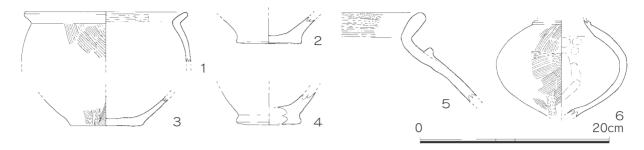


Fig.18 田一本松地区第232調査区SD0001環壕跡出土土器実測図 (1/4)

た可能性が考えられる。

## (2) 周辺の調査区

第232調査区周辺では、県営吉野ヶ里歴史公園整備に伴い県土木部の費用で、西側と南、北側に9ヶ所の小規模な調査区(第290・291調査区、第294調査区、第295~300調査区)を設定して調査を実施した。この内、第295調査区、第297~299調査区では、上記のSD0001・0006溝跡の北への延長と考えられる溝跡を確認した。さらに南の第294調査区では、中期の環壕と考えられる溝跡が丘陵側へと湾曲した部分を確認した。これらは中期の環壕を構成する一連のものと考えられる。なお、第295調査区のSD0040溝跡からは中期中頃の土器群とともに多数の木製品が出土したが、中でも船形木製品は注目される。

船形木製品 (Fig.20—4) は、全長49.0cm。最大幅7.2cm。一木を刳り抜きつくられたものであり、側片の一部を欠失するが、ほぼ、全形を窺うことができる。船首と船尾が反り上がるいわゆる「ゴンドラ」形で船底は丸底である。船首に近い左舷の縁は、櫂座を表現したと思われる小さな凹部がある。樹種はカヤ。

# 3. 田手二本黒木地区 I 区の遺構と遺物

遺跡南部西側の丘陵裾部から低地にあたり、南の田手一本黒木地区II区と北の吉野ヶ里地区V区、の間に位置する三田川町域の地区である。遺跡としては無指定地区にあたる。調査以前は水田として利用されていた湿潤な地区である。第230調査区・第233~266調査区・第270~278調査区の40ヶ所の調査区を設定して調査を実施した。大半の調査区は丘陵裾部や谷部一帯での環壕跡や溝跡の存在を確認する目的で設けた細長い小規模な調査区であり、面的な調査を実施したのは、第230・236・270・275調査区である。

## (1) 第230調査区

## 概要

谷が低地へ移行する位置にあたる。調査の結果、弥生時代中期の溝跡2条 (SD0310・0313溝跡)、 後期の環壕と考えられる大規模な溝跡 (SD0312)、大規模な溝跡を切って掘削された時期不明の溝 跡2条 (SD0309・0317) などを検出した(Fig.22)。

環壕跡·溝跡 (SD0310·SD0313·SD0312)

S D 0310 溝跡は、調査区の中央西寄りに位置する。南北に延びる弥生時代中期の溝跡で、幅0.48

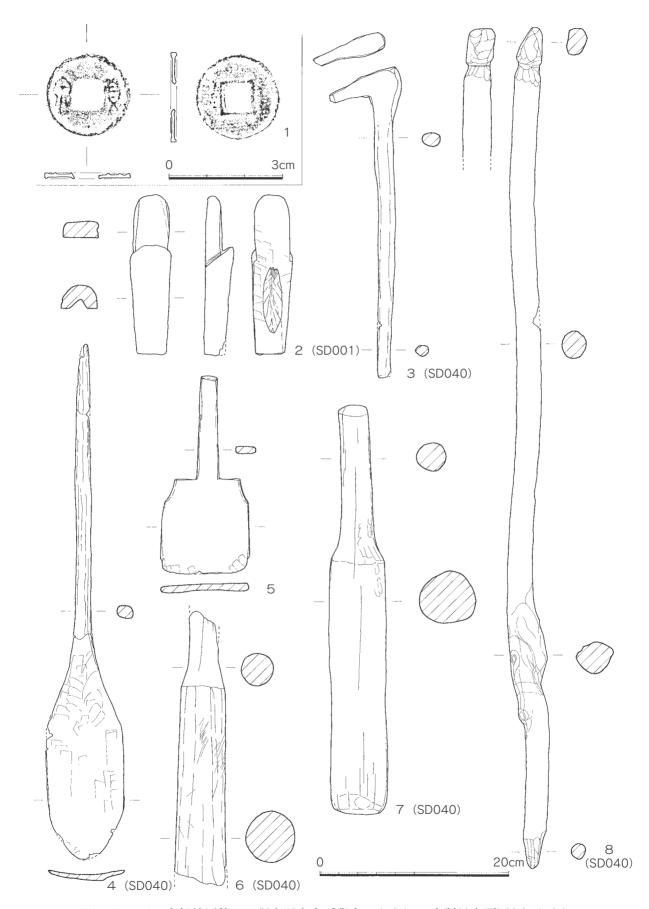


Fig.19 田一本松地区第232調査区出土「貨泉」(1/1) · 木製品実測図(1)(1/4)

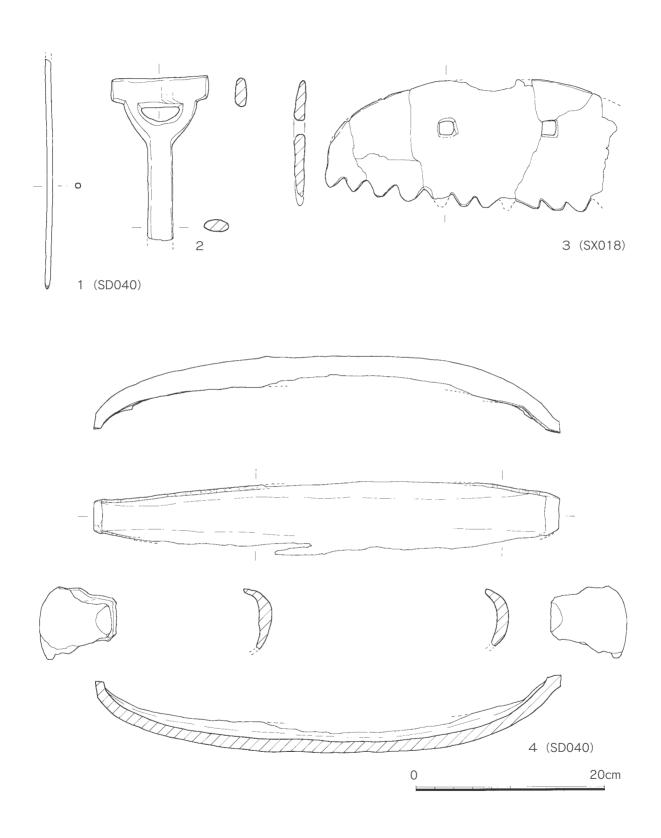


Fig.20 田一本松地区第232調查区出土木製品実測図(2)·第295調查区出土船形木製品実測図(1/4)

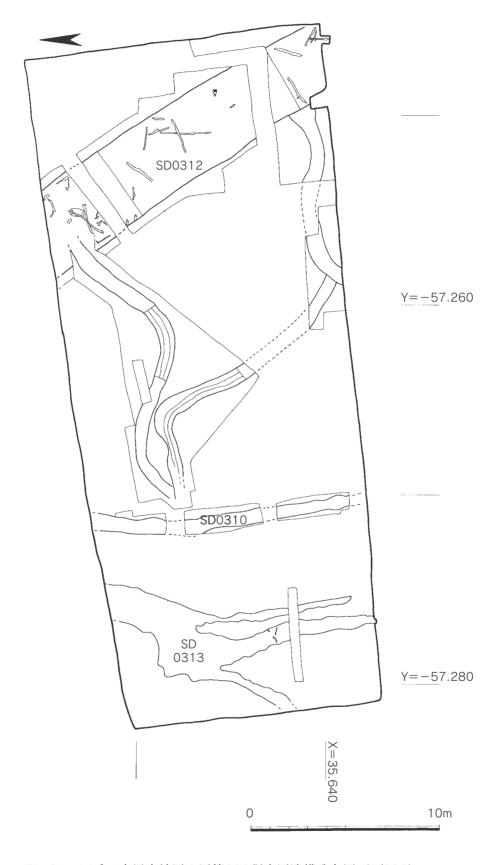


Fig.21 田手二本黒木地区 I 区第230調査区遺構分布図(1/200)

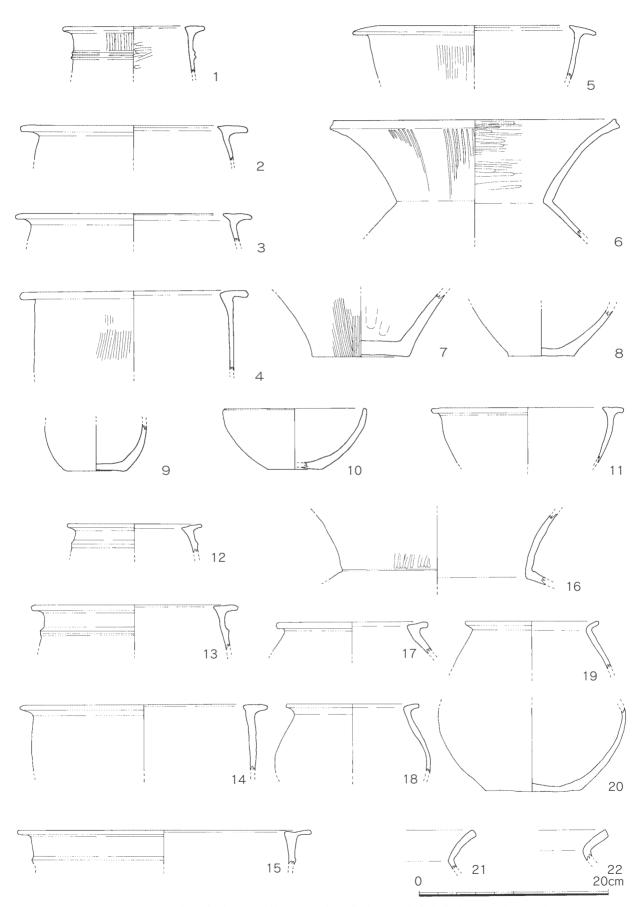


Fig.22 田手二本黒木地区 I 区第230調査区溝跡・環壕跡出土土器実測図 (1/4)  $(1 \sim 8$  はSD0310、 $9 \sim 20$  はSD0313、 $21 \cdot 22$  はSD0312出土)

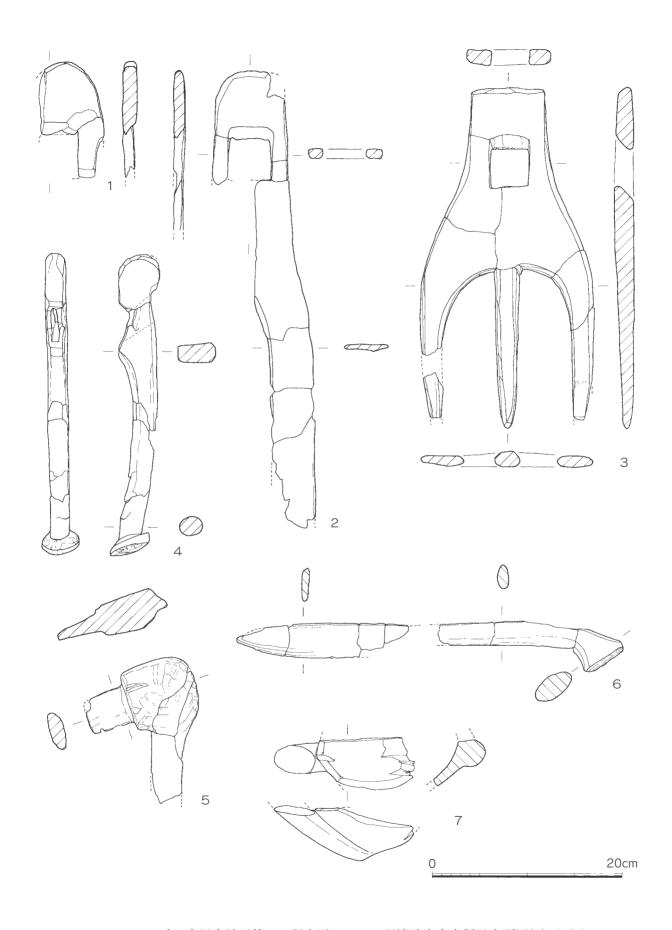


Fig.23 田手二本黒木地区第230調査区SD0312環壕跡出土木製品実測図(1) (1/4)

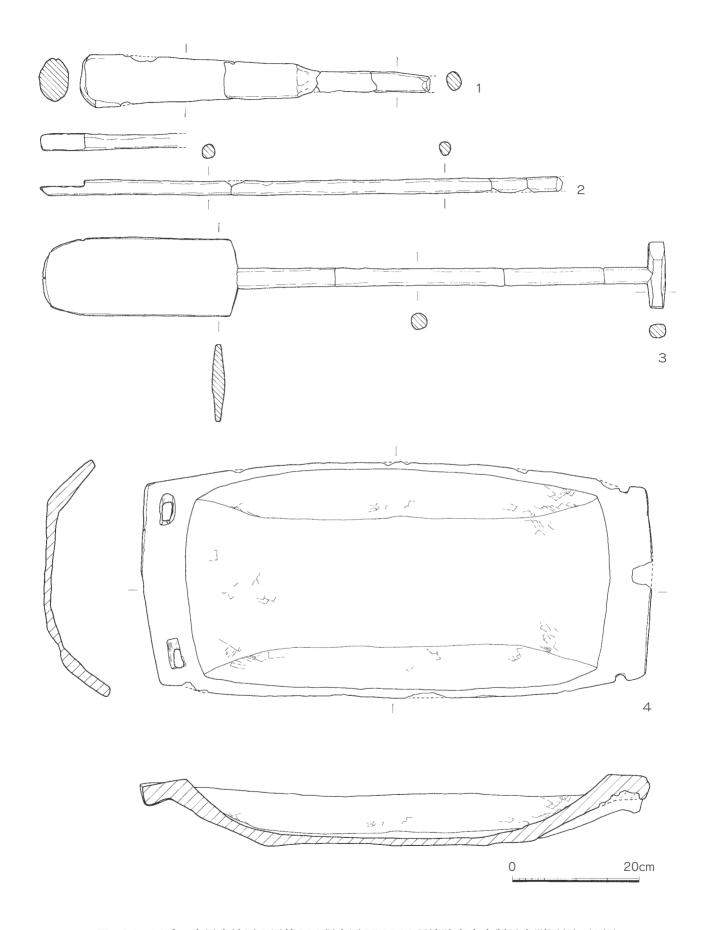


Fig.24 田手二本黒木地区 I 区第230調査区SD0312環壕跡出土木製品実測図(2) (1/6)

m~0.88m、深さ0.24mと遺存状態は悪かった。埋土からは弥生時代中期中頃の土器群とともに木製品・木片が出土した。SD0313溝跡は、調査区の西端に位置する。不整形の溝跡で、湾曲しながら南北に延びるが、南では3条の小規模な溝に分岐している。北端部あたりで、幅3.50m、深さ0.15mと遺存状態は悪かった。北部からは弥生時代中期中頃の土器群が、南部からは木片などが出土した。SD0312溝(環壕)跡は調査区の東部に位置し、北西—南東方向へ延びている弥生時代後期の大規模な溝跡である。幅5.2m前後、深さ0.84mで、溝の断面形は底が平らな逆台形である。埋土の状況から本来水を湛えた壕であったものと考えられる。

S D 0 3 1 0 溝跡からは中期中頃の甕や壺(Fig. 23 — 1 ~ 8)が、S D 0 3 1 3 溝跡から中期中頃の甕や壺、鉢(Fig. 23 — 9 ~ 20)などが出土した。S D 0 3 1 2 溝(環壕)跡から後期後半以降の甕の口縁部(Fig. 23 — 21 · 22) や、横槌や柄・鋤・槽などの木製品(Fig. 23 · 24)が出土した。

鍬(Fig.23—1~3)は3点図示した。このうち、2は、又鍬で方形の柄孔に2又に分かれた刃部がつく。刃部の片側は欠損。3は、直柄鍬身。鎌柄(Fig.23—4)は、1点出土している。鉄鎌用と思われ、柄の頭部直下に縦方向に開けられた鉄鎌を差し込むようになっている。柄の端部には円盤状のグリップを削り出す。樹種はアカガシ。斧柄(Fig.23—5)は、袋状鉄斧用で装着は縦方向。これまで吉野ヶ里遺跡から出土した鉄斧用の柄は、縦方向のみである。刀子形をした木製品(Fig.23—6)は、2つに折損し、接合部にあたりはないが、同一個体である。祭祀具と想定している。大型の横槌は、全長56.2cm。身の断面は、扁平。ただし、『木器集成図録 近畿原始篇』(奈良国立文化財研究所)の分類に従えば掛矢となる。鋤(Fig.24—3)は完形品で、「T」字の把手と断面円形の柄、先端が丸みをもつ長い身部からなる。全長100.4cm。大型の槽(Fig.24—4)は、平面形がやや丸みを持つ長方形で短辺の両側に把手状の突出部がつく。この突出部の片側には一対の抉りが、反対側の突出部には、一対の穿孔がみられる。樹種は、クスノキである。

この調査区の北の水田部分(吉野ヶ里地区VI区)は、県土木部の費用で小規模な調査区(第253~255・269・271・279~282調査区)を設け確認調査を実施した結果、一連のものと考えられる幅の広い溝跡を確認したため、弥生時代後期の吉野ヶ里環壕集落の最西端に位置する高床倉庫群(第306調査区一帯)を囲む環壕であった可能性が高いと判断された。この調査区のすぐ北側の吉野ヶ里地区VI区第226調査区(県)では、幅が極端に狭くなった部分を検出したが、あるいは環壕底部に木樋を設置し埋め戻した出入口かと考えられる。

# (2) 第233~249調査区 (特に第235・236・237・239調査区)

#### 概要

両調査区は、南内郭跡が存在する吉野ヶ里地区V区と南の田手二本黒木地区丘陵の間に存在する谷の南端の丘陵裾に沿って位置する。丘陵裾に沿って東西に延びる弥生時代中期と考えられる溝跡を検出した(Fig.25)。溝跡の埋土からは夥しい数の弥生時代中期を主体とする土器が出土した。なお、第236・239調査区は平面調査のみをおこなった。

#### 溝 (環壕) 跡 (SD0308)

SD0308溝跡の幅は、南側に農業基盤整備事業によって三面水路が設置してあったため不明であるが、広いところで10mを越すものと考えられる。底が平らな断面形であり、深さは1.12mであっ

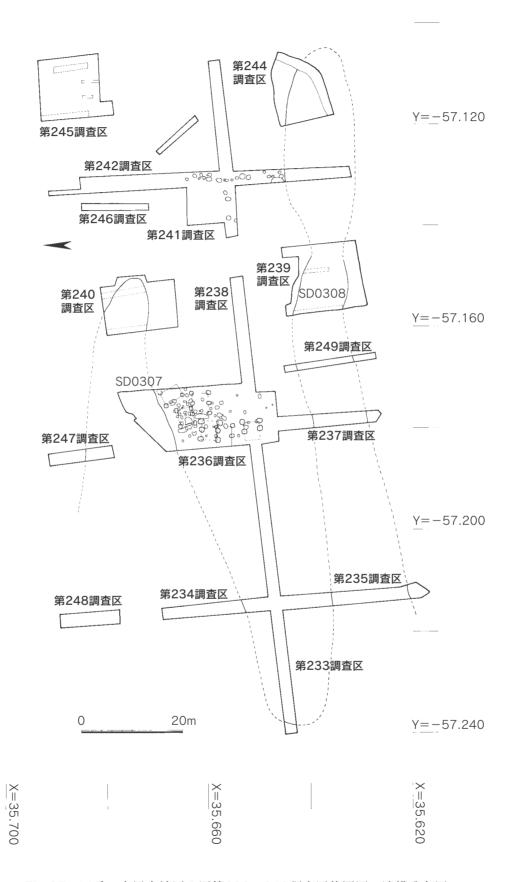


Fig.25 田手二本黒木地区 I 区第233~249調査区位置図、遺構分布図

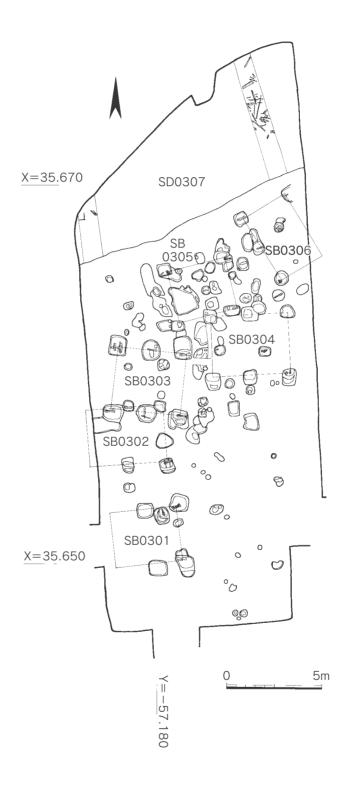


Fig.26 田手二本黒木地区 I 区第236調査区遺構分布図 (1/200)

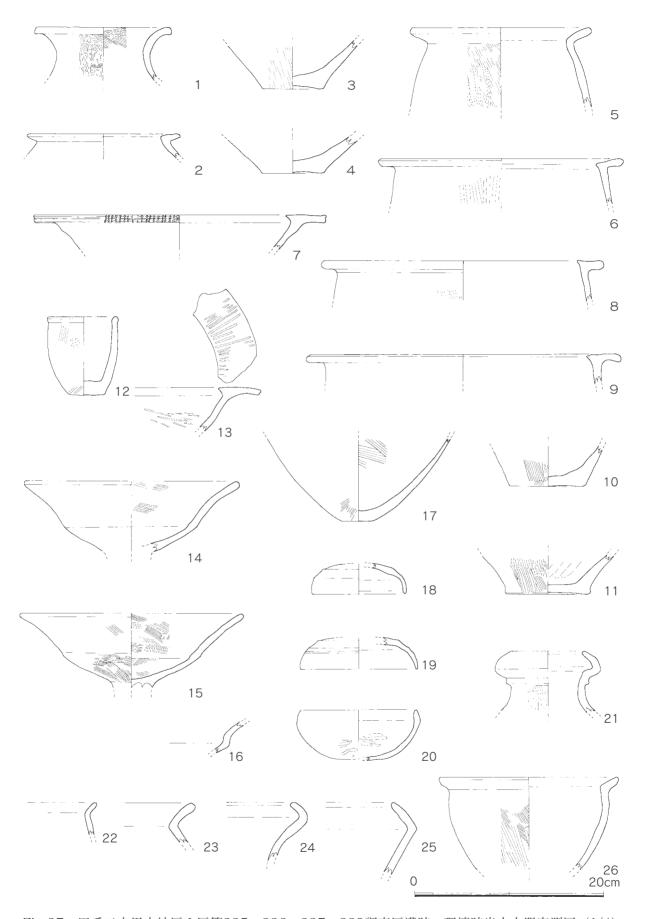


Fig.27 田手二本黒木地区 I 区第235 · 236 · 237 · 239調査区溝跡 · 環壕跡出土土器実測図 (1/4)  $(1\sim6$  は235区SD0308、 $7\sim20$  は237区SD0308、21 は239区SD0308、 $22\sim26$  は236区SD0307出土)

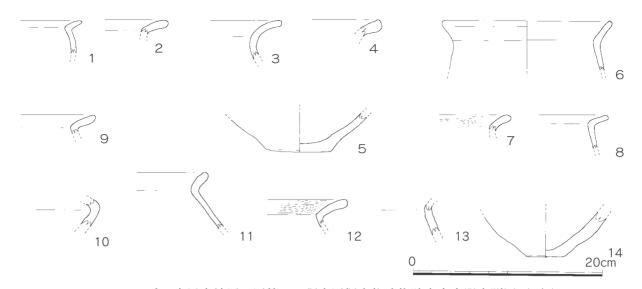


Fig.28 田手二本黒木地区 I 区第236調査区掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4) (1~3はSB0301、4·5はSB0302、6~8はSB0303、9·10はSB0304、11·12はSB0305、13·14はSB0306出土) た。溝跡からは大量の弥生土器を主体とする土器群が出土した。

第235・237調査区埋土からは弥生時代中期中頃~末を主体とする甕や壺・高坏など多数の土器片 (Fig.27—1~21)が出土したが、第239調査区上層では弥生時代後期前半の壺(21)が、第236調査区上層では後期後半を主体とする甕や壺・鉢(22~26)が、第237調査区上層からは古墳時代前期~後期にかけての土師器の甕や坏・高坏(14~17・20)、須恵器の坏(18・19)などが出土するなど、長期間にわたって溝状に窪んでいたものと考えられる。この溝状遺構は東方丘陵上に設けた吉野ヶ里丘陵地区VII区第185・186調査区(平成6年度)や田一本松地区第232調査区などで検出した溝跡と同時期・同形態であり、丘陵南部を囲む中期の環壕跡の一部と考えられる。

# (3) 第236調査区

### 概要

第235・237調査区が存在する谷部の中央に位置する。谷水田を棚田状に造成した際に削平を免れた区域と考えられる。調査の結果中央から北部にかけて掘立柱建物跡6基(SB0301~0306)以上、土壙数基が、北端では自然流路の可能性が高い溝跡(SD0307)を検出した(Fig.26)。この溝跡からは弥生時代中期から後期にかけての土器(Fig.27)が出土した。

掘立柱建物跡 (SB0301・0302・0303・0304・0305・0306)

掘立柱建物跡は、密集して存在しており建替えがあったものと考えられる。 1 間×2 間の建物が多いが、1 間×1 間のものも存在する (Fig. 26)。 S B 0 3 0 1 建物跡は 1 間×1 間 (2.75 m×1.7 m)分の柱穴が遺存していたが、桁行2 間 (3.4 m)であった可能性が高い。 S B 0 3 0 2 建物跡は 1 間×1 間 (3.1 m×2.05 m)分柱穴が遺存していたが、桁行2 間 (4.1 m)であった可能性が高い。 S B 0 3 0 3 建物跡は 1 間×2 間 (3.3 m×3.6 m)、 S B 0 3 0 4 建物跡は 1 間×2 間 (3.3 m×4.0 m)、 S B 0 3 0 5 建物跡は 1 間×1 間 (2.75 m×3.1 m)、 S B 0 3 0 6 建物跡は 1 間×2 間 (2.8 m×3.5 m)の規模であった。 なお、すべての建物跡の多くの柱穴底部には柱の沈下を防ぐための加工された枕木(横木)が遺存していたが、 S B 0 3 0 3 建物跡の柱穴の一つには枕木が井桁状に組まれていたものも存在した。

掘立柱建物を構成するすべての柱穴跡からは、弥生時代後期を主体とする弥生土器(Fig.28)が出土

した。大半は後期前半の甕や壺であった。一帯で後期後半~終末期の土器片はわずかしか出土しない ことなどから、これらの掘立柱建物跡群の時期は弥生時代後期前半以降、後期後半まではくだらない 時期の建物群であったものと考えられる。

## 溝跡 (SD0307)

北側の丘陵と建物跡群が存在する平地との境界に沿って、溝状遺構が存在する。この調査区では幅は確認できなかったが、第247調査区において幅15m前後、深さ約0.94mと判明した。第236調査区では、弥生時代後期前半~後半の甕や壺・鉢(Fig.27—22~26)などとともに、槽などの木製品も出土した。

## (4) 第270調査区

# 概要

丘陵最南端の田手二本黒木地区丘陵部西側の麓に位置する。調査の結果、弥生時代後期の溝跡 (SD0319) を検出した(Fig.29)が、環壕であった可能性もある。この溝跡の延長部分は東側の第274 調査区や南の第272・274調査区でも確認した。

### 溝跡 (SD0319)

調査区のほぼ中央に位置し、北北西一南南東方向に延びている。幅3.45m~5.25mで、深さは最大0.52mであった。調査区北西部では人頭大の石数個と一面に拳大の礫や土器片が敷き詰められた部分があり、その部分の環壕内では多数の木材が出土した。あるいは木道の可能性もある。

溝跡の埋土からは弥生時代後期前半のものを主体とする土器や、鋤の柄部分や木鏃、銅鏃などの木製品・青銅製品が出土した。土器(Fig.30)は後期前半~中頃のもので、甕・壺・鉢・高坏などがある。過去に第270調査区の北端に東西方向に設けた第257調査区の溝(SD0319と同一と考えられる)からも、弥生時代中期中頃~後期前半の甕や壺・蓋などが出土(Fig.30—1~8)している。他に、銅鏃や、鋤の柄部分や木鏃などの木製品が出土している(Fig.31)。3の木鏃は完形品で、全長7.7cm、大幅1.5cm。先端部は円錐形に尖り、基部には短い茎がつく。鋤柄(Fig.31—5)は、。残存長55.0cm。半円形の把手がつく。他に木製紡錘車(PL.14)も出土した。

銅鏃(Fig.31—1)は、完形の柳葉形で、全長4.8cm、最大幅0.9cm。笵ずれのため、身部の鎬の位置が両側でずれている。空気の遮断された粘質土中に埋まっていたため、出土時は、赤銅色の色調を留めていた。現在は、錆化が進み赤褐色になっている。また、第272調査区では、SD0319溝跡の延長と考えられる溝跡から木製の櫛(PL.14)が出土した。

## (5) 第275調査区

## 概要

第270調査区の北に約8mの間隔をもって設けた調査区である。弥生時代の溝跡(SD0322)などを検出した(Fig.29)。

## 溝跡 (SD0322)

調査区中央を南北に延びる後期の溝跡で、幅1.45~2.01m、深さ0.30mであった。この溝跡は、第275調査区の北に設けた第276調査区でこの溝跡は終わっているが、浅いためこの部分が先端であったかは不明である。

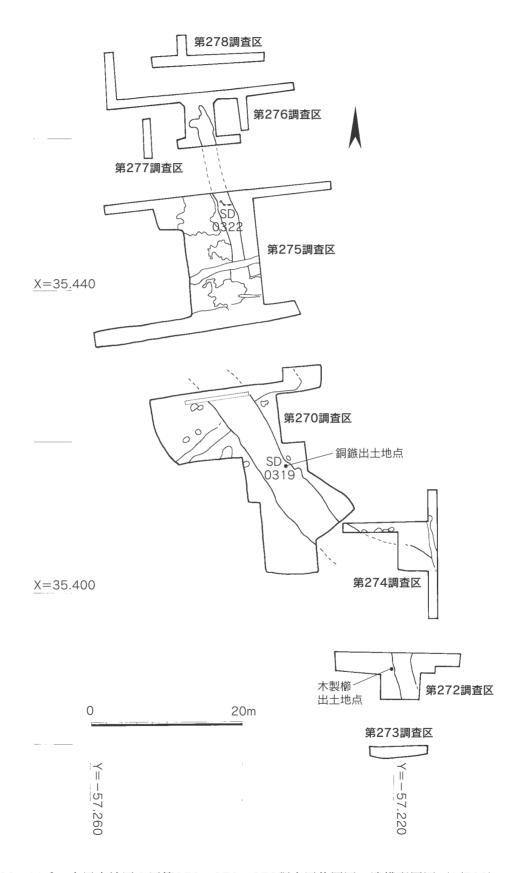


Fig.29 田手二本黒木地区 I 区第270·272~278調査区位置図、遺構配置図 (1/500)

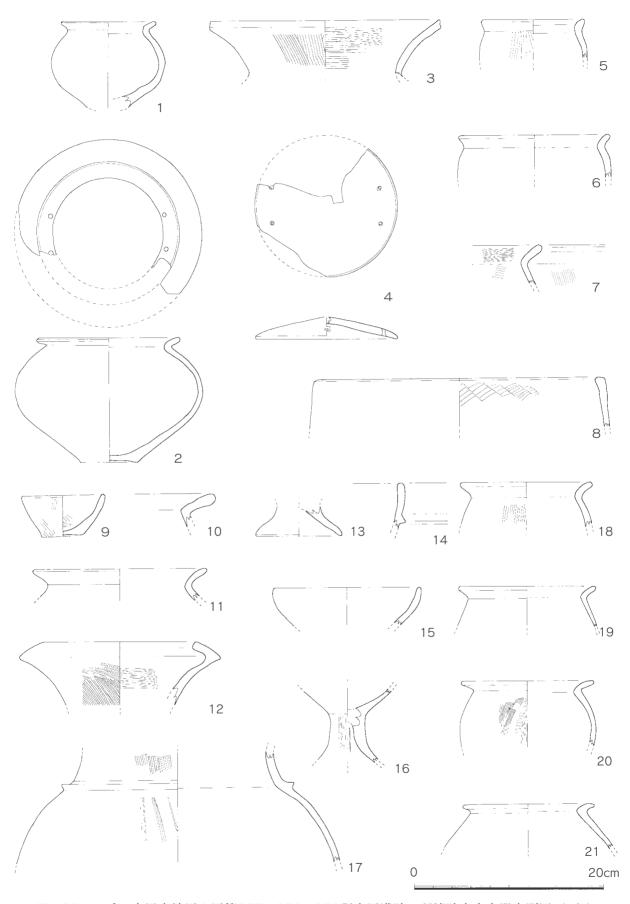


Fig.30 田手二本黒木地区 I 区第257~270・270調査区溝跡・環壕跡出土土器実測図 (1/4)  $(1\sim14$ は257・258・259区溝跡、 $15\sim21$ は270区SD0319出土)

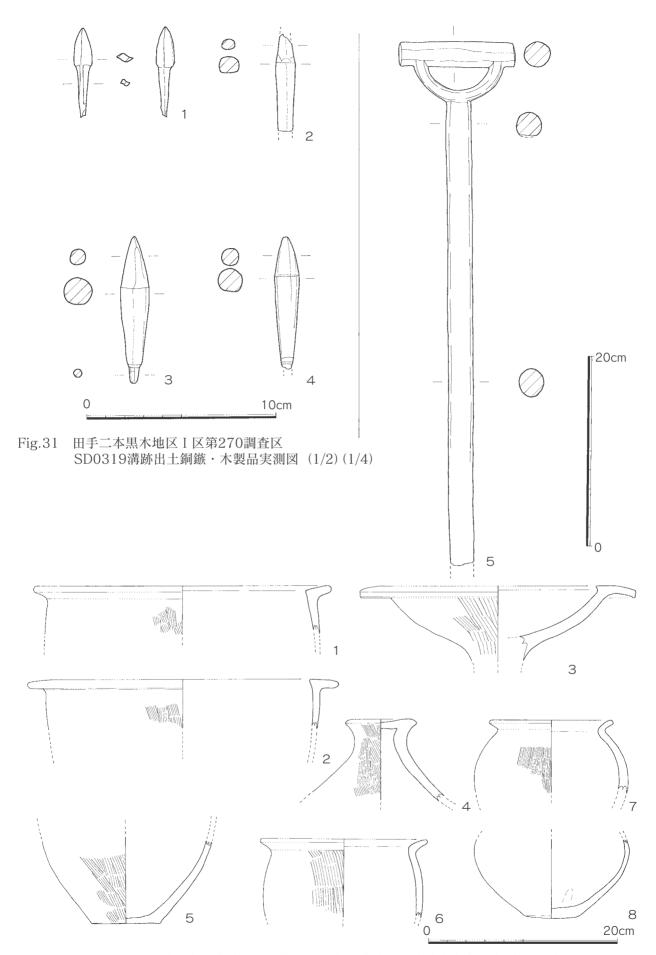


Fig.32 田手二本黒木地区 I 区第275調査区溝跡・環壕跡出土土器実測図 (1/4)  $(1\sim7$ はSD0322上層、8はSD0322下層出土)

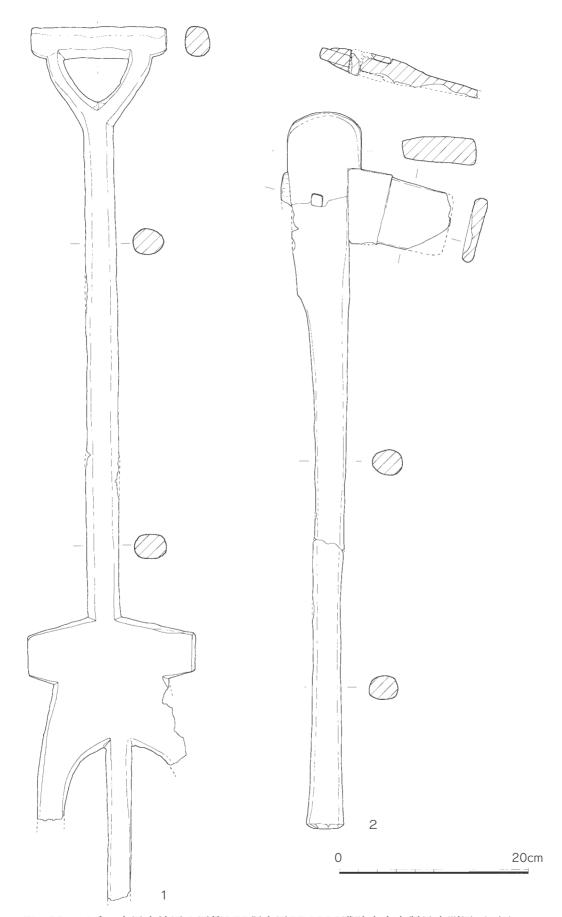


Fig.33 田手二本黒木地区 I 区第275調査区SD0322溝跡出土木製品実測図 (1/4)

溝跡埋土からは、弥生土器や木製品が少量出土した。溝跡に伴う弥生土器は1点(Fig.32—8)のみだが、この溝跡上で遺構検出中に中期前半~後期前半の甕や壺・蓋などが出土(Fig.32—1~7)しており、この溝跡の時期を推定させる。

木製品には網枠や三叉鋤のほか組合せ式の木製斧柄(Fig.33)などがある。1は、三叉状の又鋤で刃部の一部を折損する。残存長92.8cm、把手部幅14.3cm。柄部長62.2cm。柄と身の中央の刃部とがずれているほか、身部の肩の片側が幅広くつくられている。樹種は、アカガシである。2は縦斧柄である。ほぼ完形品で、全長76.1cm。頭部に縦方向の装着孔を開け、その装着孔には、段を有する扁平な板を差し込まれ、木の目釘で止められる。扁平な板の先端部には、鋳造鉄斧用が装着された痕跡が残ることから、鋳造鉄斧を装着する組み合せ式斧柄であることがわかる。

## 4. 吉野ヶ里地区V区の遺構と遺物

遺跡中部の丘陵西側丘陵の緩斜面にあたる神埼町域の地区である。調査以前は畑や果樹園(みかん)として利用されていた。特別史跡区域にあたる。第283~287調査区・第306調査区の6ヶ所の調査区を設定して調査を実施した。第283~287調査区は丘陵裾部での溝跡などの確認のために設けた細長い小規模な調査区であり、面的な調査を実施したのは第306調査区である。しかし、この調査区は平成11年度までの2ヶ年計画で実施したため、10年度は表土除去と遺構の検出作業をおこない、本格的な作業は11年度におこなった。概要については、平成15年度刊行予定の発掘調査概要報告書に記す予定である。

#### (1) 第306調査区

南内郭跡が存在する吉野ヶ里地区V区の丘陵西の緩斜面に位置する。昭和63年度の工業団地計画に伴う発掘調査によって、東部において多数の大型掘立柱建物跡を発掘し、平成元年度の確認調査においても掘立柱建物跡が広く分布していることが判明していたため、面的な確認調査を実施し、建物跡などの分布状況を把握する目的で確認調査を実施した。表土除去後、遺構の検出作業までを平成10年度に実施し、翌11年度に内容把握のための確認調査を実施した。

表土除去作業及び遺構検出作業などに伴って、弥生時代前期~後期終末期、古墳時代初頭~後期、 奈良・平安時代の土器片や、中世の土器・陶磁器片が多数出土した。

#### (2) その他の調査区

南内郭跡北東の丘陵裾部に位置する。田手二本黒木地区 I 区第230調査区で確認され、県費でその北方に設けた調査区(吉野ヶ里地区 VI 区第279~281調査区)で連続して確認された壕跡が、北方への延長を知る目的で第283~287調査区を設けて調査を実施した。調査の結果、第283・284・287調査区では畑地造成による削平のためか遺構は存在せず、第285・286調査区でのみ遺構を検出することができた。第285調査区では弥生時代中期と考えられる溝らしい遺構を検出、第286調査区では、同時期と考えられる小規模な溝跡 1 条と柱穴と考えられる穴を10個検出した。弥生時代中期の土器片数点が出土した。

### 5. 吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区の遺構と遺物

遺跡中部の丘陵上、南内郭跡の南にあたる三田川町域の地区である。調査以前は畑や果樹園(みかん・キーウィ)として利用されていた。県史跡区域にあたる。第227~229の3ヶ所の調査区を設定して調査を実施した。第227・228調査区は面的な調査を実施したが、第229調査区は以前の調査で調査区を設定していなかった地区に設けた細長い小規模な調査区である。

## (1) 第227調査区

#### 概要

南内郭跡の南東約45mの位置、特別史跡区域の南に接する県史跡区域にあたる。中央を南北に走る 農道を挟んで西には第228調査区を設けた。調査の結果、弥生時代中期の甕棺墓群や土壙(貯蔵穴や祭 祀土壙)、中期や後期の竪穴住居跡、後期終末期の溝跡、古墳時代初頭の溝跡、中世の溝跡(SD2118) などを検出した(Fig.34)。

### 竪穴住居跡 (SH2114・2115)

調査区南部東寄りの位置で弥生時代中期前半~中頃のSH2115竪穴住居跡を、調査区西部で弥生時代後期終末期のSH2114竪穴住居跡を検出した。SH2115竪穴住居跡は、径5.23mの平面円形で、深さ0.36mであった。甕棺墓群によって破壊されているため柱穴など内部構造は不明である。SH2114竪穴住居跡は、2.60m以上×3.52m以上の平面長方形の住居跡で、深さは0.14mしか遺存していなかった。SD2101・2113溝跡などによって多くを破壊されているため内部の構造は不明である。

竪穴住居跡からは少数の弥生土器(Fig.35—1~6)が出土した。SH2114住居跡からは中期前半の甕(4・6)と鉢(5)が、SH2115住居跡からは後期終末期の甕(1)と壺(2)などが出土した。

甕棺墓(S J 2103 · 2104 · 2105 · 2106 · 2107 · 2108 · 2109 · 2119)

調査区の中央より東側で、甕棺墓を8基検出した。いずれも中期中頃のもので、SJ2105甕棺墓のみが小型の小児用甕棺を用いていたが、他は大型棺であった。すべて合せ口式の甕棺で、甕と甕または甕と鉢を組み合わせていた。埋葬方向は南北方向のものが4基(SJ2105・2107・2108・2119)、北西一南東方向のものが2基(SJ2103・2106)、北東一南西方向のものが2基(SJ2104・2109)であった。検出状態のまま埋め戻して現地に保存している。

#### 貯蔵穴・土壙 (SK2111・2116・2110)

調査区の中央西寄りの位置で、弥生時代中期前半の貯蔵穴(穴倉)跡を1基(SK2111)を検出した。SK2111土壙(貯蔵穴)は、1.25m×1.56mの平面隅丸長方形で、深さは0.46mだった。また、甕棺墓群の北西には中期中頃の土壙2基(SK2110・2116)を検出した。SK2110土壙は5.10m×2.36mの楕円形に近い平面形、SK2116土壙は1.07m×1.48m、深さ0.73mの平面楕円形である。

SK2110土壙から出土した土器(Fig.35—7~13)には甕・壺・鉢・器台などが、SK2116土壙から出土した土器(Fig.35—14~16)には甕・高坏・鉢などがある。甕棺墓の祭祀に用いた土器を廃棄した遺構と考えられる。周辺の土壙群からも壺などの祭祀用と考えられる土器が出土していることから、甕棺墓群の周囲に祭祀に関連した遺構が存在していたことが推定される。

#### 溝跡 (SD2101·2102)

調査区南部に位置する東西方向に延びる2条の弥生時代後期終末期の溝跡である。西側のSD 2101溝跡と1.0mの陸橋部を挟んだ東側でSD2102溝跡を検出したが、本来は同時存在の溝と考え

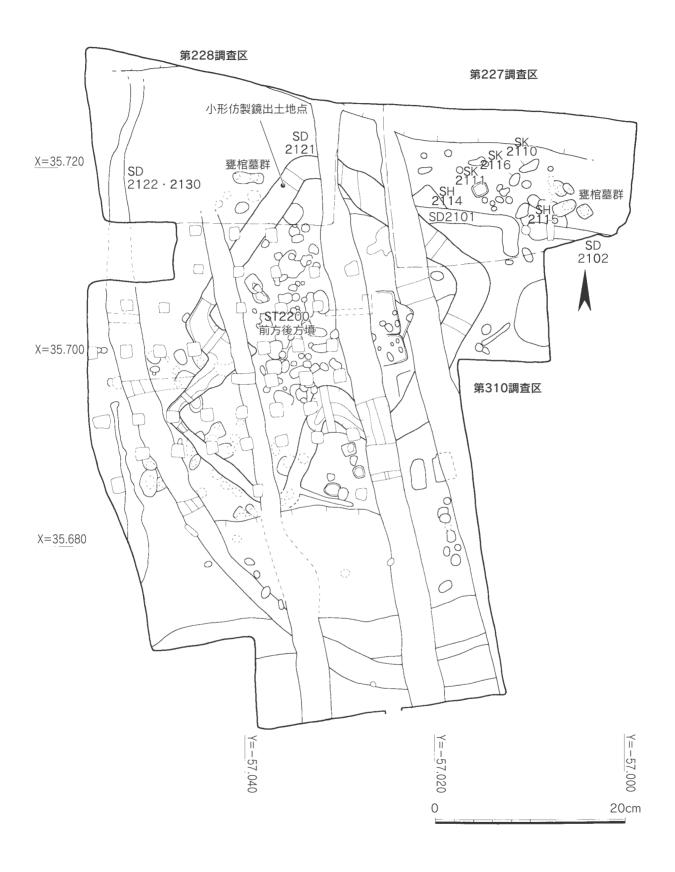


Fig.34 吉野ヶ里丘陵地区VII区第227・228(・310)調査区遺構分布図 (1/400)

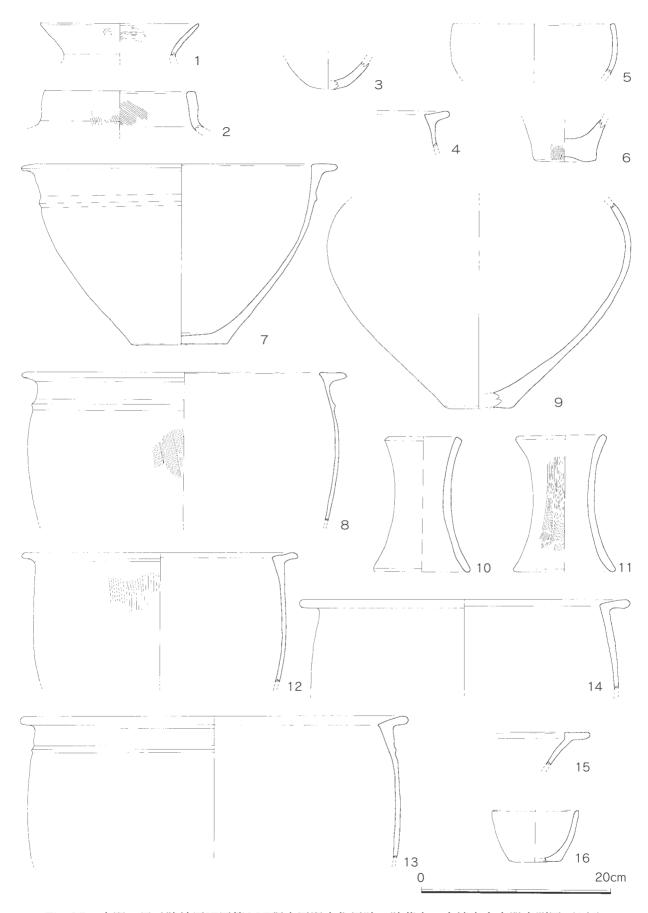


Fig.35 吉野ヶ里丘陵地区W区第227調査区竪穴住居跡・貯蔵穴・土壙出土土器実測図(1/4) (1~3はSH2114、4~6はSH2115、7~13はSK2110、14~16はSK2116出土)



Fig.36 吉野ヶ里丘陵地区W区第227調査区SD2101溝跡出土土器実測図(1) (1/4)

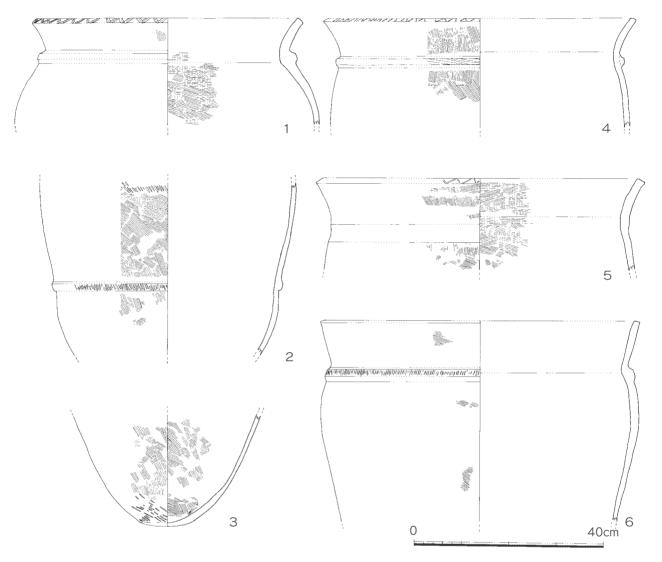


Fig.37 吉野ヶ里丘陵地区WI区第227調査区SD2101溝跡出土土器実測図(2) (1/8)

られる。いずれも断面は逆台形である。SD2101溝跡は幅 $0.90m\sim2.10m$ 、深さ0.77mであった。東端は南へ直角に折れ曲がっている。SD2102溝跡は幅 $1.30m\sim1.70m$ (南への屈曲部の幅1.25前後、深さ0.39m)であった。2.22名の溝跡のほかに調査区南西部で2.113溝跡を検出したが、次に述べる第2.28調査区南東部で検出した2.121溝跡と一連のものであり、平成2.11年度の第3.10 調査区の調査で明らかになった前方後方墳の周溝の後方部を囲む溝跡であったことが判明した (Fig. 3.4)。

S D2101溝跡とS D2102溝跡からは弥生時代後期終末期を主体とする多数の土器が出土した。S D2101溝跡から出土した土器(Fig.36~39)には、甕(Fig.36・37)、壺(Fig.38)、鉢(Fig.39—1~18)、高坏(Fig.39—19)、器台(Fig.39—20)、支脚(Fig.39—21)など多数がある。

S D 2102 溝跡から出土した土器(Fig. 40~42) には甕(Fig. 40—1~8)、高坏(Fig. 40—9)、器台(Fig. 40—10)、鉢(Fig. 41—1~6)、壺(Fig. 41—7~13)などがある。大半が在地系の土器であるが、

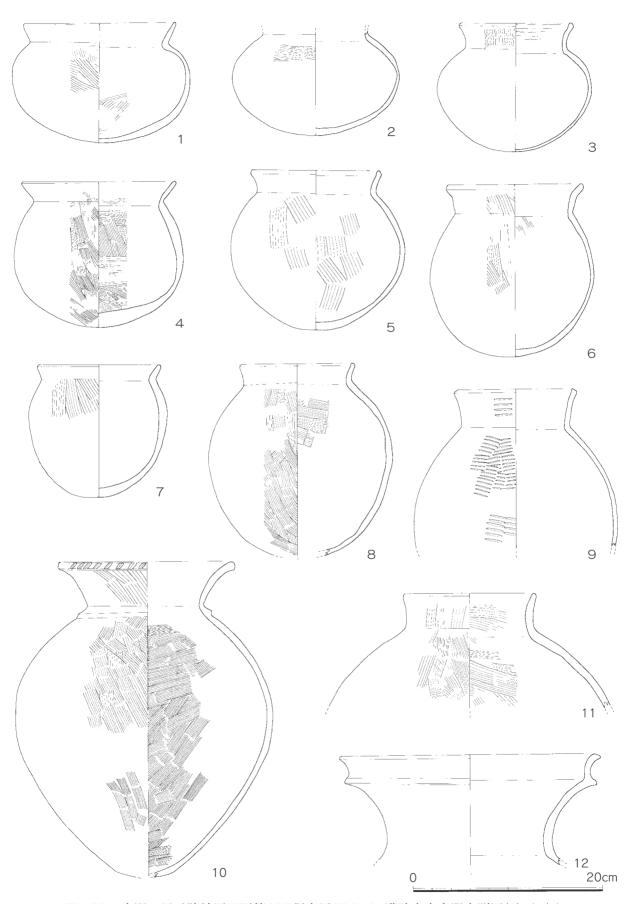


Fig.38 吉野ヶ里丘陵地区WI区第227調査区SD2101溝跡出土土器実測図(3) (1/4)

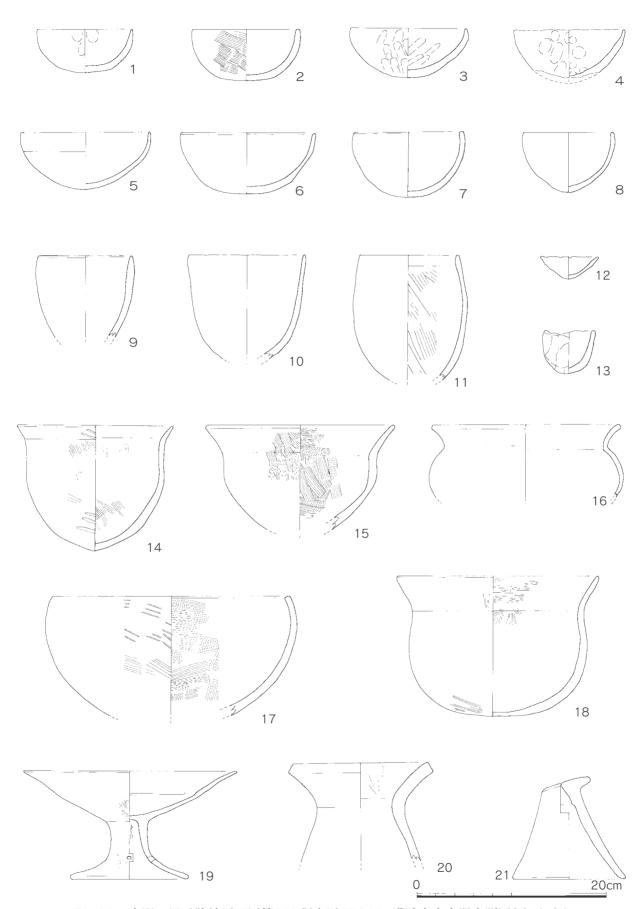


Fig.39 吉野ヶ里丘陵地区VII区第227調査区SD2101溝跡出土土器実測図(4) (1/4)

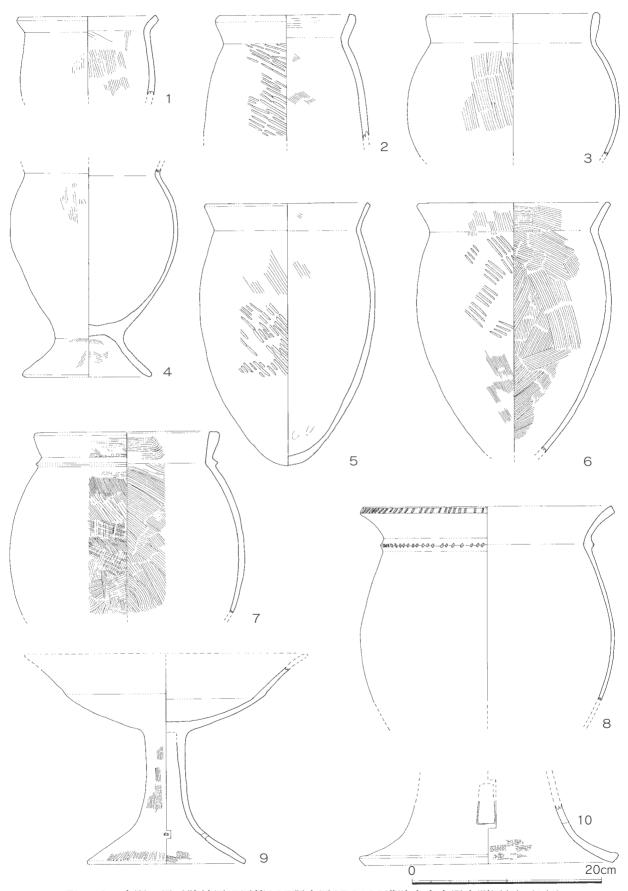


Fig.40 吉野ヶ里丘陵地区VII区第227調査区SD2102溝跡出土土器実測図(1) (1/4)

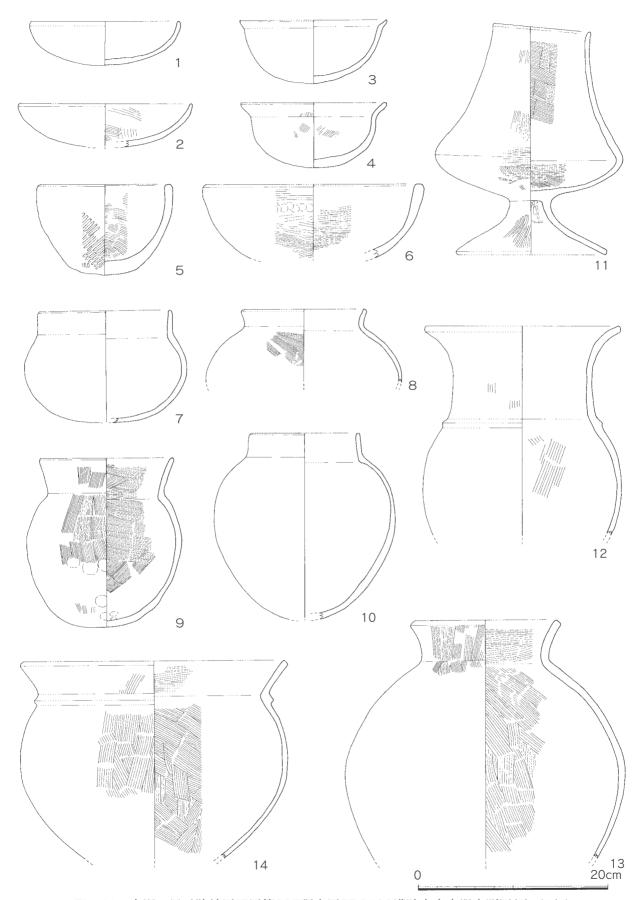


Fig.41 吉野ヶ里丘陵地区VII区第227調査区SD2102溝跡出土土器実測図(2) (1/4)

器台(Fig.40—10)と脚付き壺(Fig.41—11)は、それぞれ瀬戸内、畿内北部の系譜を引く形態をもつ。

## (2) 第228調査区

## 概要

農道を挟んで第227調査区の西に位置する調査区である。調査の結果、弥生時代前期~中期の甕棺 墓群や後期終末期の溝跡、古墳時代初頭の溝跡などを検出した(Fig.34)。

甕棺墓(S J 2124 · 2125 · 2126 · 2127 · 2128)

調査区の南部中央の狭い範囲で、弥生時代前期末~中期初頭の甕棺墓を5基検出した。SJ2127・2128甕棺墓は後世の破壊がひどく、甕棺の破片が数点残っていたのみであった。残り3基の甕棺墓(SJ2124・2125・2126)も上甕部分の大半と下甕の上部を破壊されていた。いずれも弥生時代前期末~中期初頭の形態をもつ。上甕と下甕の組合せは、下甕の口縁部を上甕の口縁で覆ういわゆる覆口式であった。傾斜角度は強い。

溝跡 (SD2122·2130·2121)

調査区西部で、弥生時代後期後半~終末期の溝跡2条 (SD2122・2130) を、調査区南東隅で、 古墳時代初頭の屈曲する溝跡1条 (SD2121) を検出した。SD2122・2130溝跡は、切り合って存 在しておりSD2130溝跡が古く、南端で幅2.05m、SD2122溝跡が新しく幅1.15mであった。弥 生時代後期後半~終末期の土器を出土した。

SD2122溝跡から出土した土器(Fig. 42—2~14)には、壺(2~5、9~11)、甕(6)、高坏(7・8)、鉢(12・13)、支脚(14)などがある。SD2122溝は、より古いSD2130溝によって切られているため、元来古い溝に埋没していた土器群が、新しい溝によって掘り起こされ埋没したものと考えられる。

SD2121溝跡は、第227調査区で検出された古墳時代初頭のSD2113溝跡の西への延長部分で、幅1.58m~2.52m、中央での深さ0.74mであった。なお、この溝跡は、平成11年度の第310調査区の調査で明らかになった前方後方墳の後方部を囲む周溝の一部であったことが判明した(Fig.34)。この調査区では、弥生時代後期終末期~古墳時代初頭の土器が出土した。土器(Fig.43)には鉢(1~4)や甕(5~13)、高坏(14・15)、器台(17)などがある。この溝跡からは後期終末期を主体とする土器群が出土したが、甕(5・6)や壺(12)、高坏坏部(14)などは、明らかに古墳時代初頭に下るものである。鉢(3)は有孔鉢(甑)かと思われる。

2は、縁の一部を欠失するもののほぼ、完形品に近い鏡である。吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区II 区第221調査区のSD0265溝跡から弥生時代後期後半~終末期の土器とともに出土した。面径 6.8cmでやや小型であるが、銅質は良好。鏡背の一部に有機質状のものが錆着しており、文様帯は、 一部不鮮明である。この鏡の文様構成は、縁から内側に向かって荒い櫛歯文帯、連弧文帯、圏線、紐 となる。縁は、平縁で幅0.9cm。半浮彫状の連弧文の数は、文様が一部不鮮明なため、判別できない

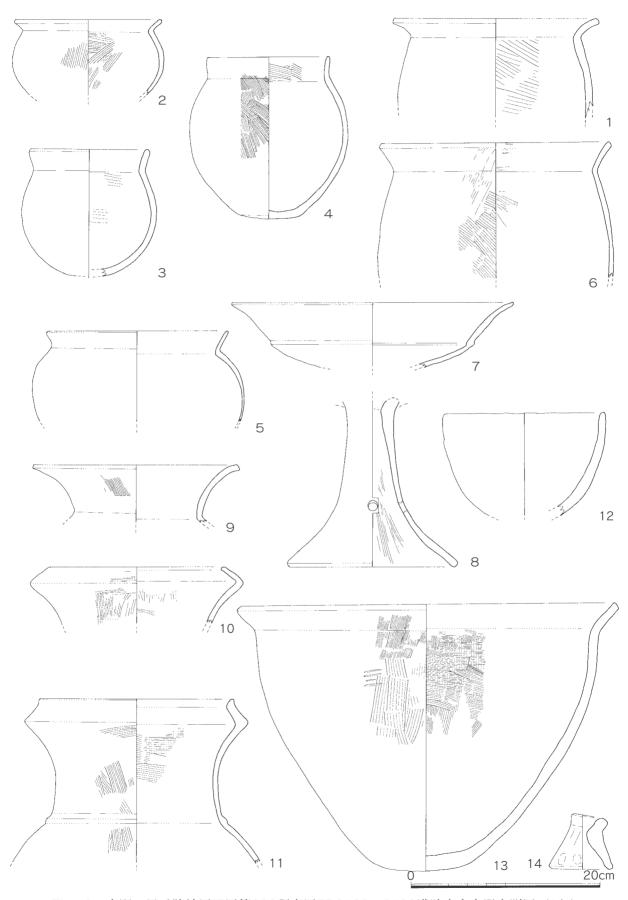


Fig.42 吉野ヶ里丘陵地区WI区第228調査区 $SD2122 \cdot 2130$ 溝跡出土土器実測図(1/4) (1はSD2130、他はSD2122出土)

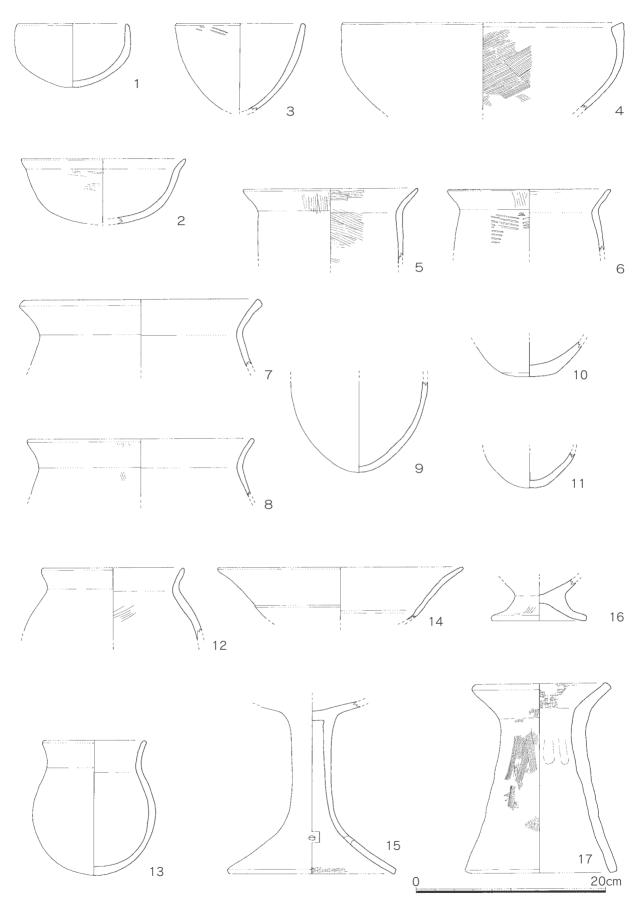
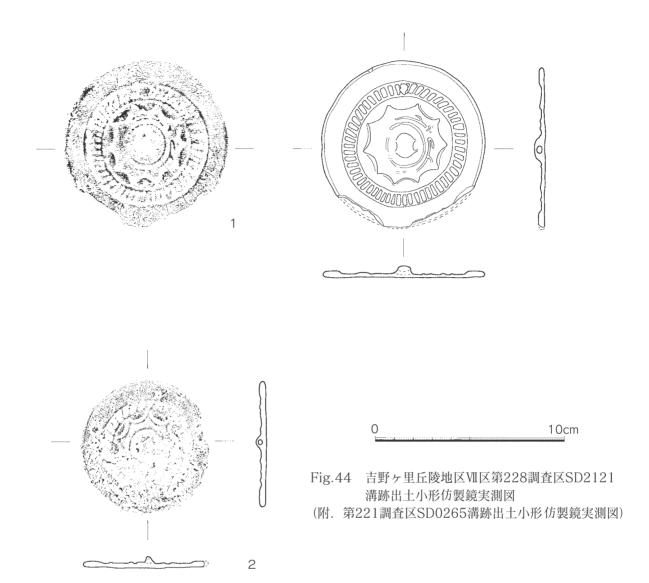


Fig.43 吉野ヶ里丘陵地区VII区第228調査区SD2121溝跡出土土器実測図 (1/4)



部分もあるが、肉眼では6個確認でき、おそらく、9~10個と考えられる。この鏡の特徴として半 浮彫状の連弧文の前面に一条の弧線が巡る。この鏡は、高倉洋彰氏による分類の内行花文鏡系仿製鏡 II aの亜種と考えられる。吉野ヶ里遺跡では、これまで4面の小形仿製鏡が出土しており、今回の2面を合わせ6面の小形仿製鏡の存在が知られた。

## (3) 第229調査区

# 概要

第227調査区の南方約80mの丘陵上に位置する。この付近は確認調査が及んでいなかった畑地で、遺構の有無や内容を把握するために調査区を設置した。調査の結果、古墳時代前期の溝跡 1条 (SD2132) や中世の溝跡 3条などを検出した。

## 溝跡 (SD2132)

調査区の西寄りに位置する。溝跡で、断面逆台形で、幅3.10m、深さ0.75mの規模で、東西方向に延びる。埋土からは弥生時代中期~後期終末期の土器片に伴って鉄鋤先が出土した。平成12・13年度の調査(第316・318区)で、この溝跡は、古墳時代前期の大型方形周溝墓の周溝跡であること

#### が判明した。

# 6. 田手二本黒木地区Ⅲ区・田手一本黒木地区 I 区の遺構と遺物

遺跡南部の丘陵上にあたる三田川町域の地区である。調査以前は畑や果樹園(みかん)として利用されていた。県史跡区域にあたる。平成10年度に田手一本黒木地区 I 区に第267調査区、田手二本黒木地区Ⅲ区に第268調査区を設けて調査を実施した。なお、9年度に小規模な第231調査区を設けて調査を実施したが、10年度の調査区に含まれるので、ここでは、第267調査区と第268調査区について記す。

## (1) 第267調査区

## 概要

南内郭跡の南方約350mの丘陵上に位置する。平成2年度の確認調査で、北方の墳丘墓と同様な築造法によると考えられる30m四方以上の人工の丘が確認されていた地区で、表土を除去してこの遺構の性格を把握するために確認調査を実施した。調査の結果、盛土遺構の上面から中世の溝跡や掘立柱建物跡などが、南東部からは弥生時代中期の丹塗りのものを含む土器群が検出された(Fig.45)。

盛土遺構の築造に関する調査はおこなわず、表土を全面的に除去し、盛土上面にどのような遺構が依存しているかについて調査した。

# 盛土遺構に伴う遺構

盛土遺構に伴う遺構としては、南東部に径約10mの範囲に弥生時代中期中頃を主体とする弥生土器が大量に廃棄された部分(SX0210)を確認した。一帯からは祭祀用土器を含む多数の土器が存在し、中には貝殻や鳥骨が詰まった装飾付きの壷もあった。

この壺(Fig. 46—1)は、高さ31.3cm、口外径35.7cm、体部最大径(下位突帯部)25.9cmの丁寧に作られた広口壺で、2条1対の突帯を頚部に縦方向に貼り付け、装飾性を増している。内部にはカキやアゲマキ・アカニシ・タニシなど有明海や河川で産する貝殻や、鳥の長管骨、ネズミやヘビ(アオダイショウ)などの動物骨(千葉市加曽利貝塚資料館の村田六郎太氏教示)が入っていた。おそらく、貝や鳥を充満して供物として供えたものと推定される。この盛土遺構の北西にほぼ接し、青銅器工房跡の可能性が高いSK0004土壙からも平成2年度の調査で、イノシシ類の獣骨が入った中期の広口壺が出土し、さらに壺の周辺からヒスイ製勾玉や碧玉製管玉・ガラス小玉とともにアオザメの歯やカモ類の鳥骨、イノシシ類の獣骨が出土したことと無関係ではないと考えられる。

将来、盛土築造に関する詳しい調査をおこない、人工の盛土遺構とこれらの土器群の関係や墳墓の 可能性がないのかなどについて把握する必要がある。

#### 溝跡 (SD0206・0406)

調査区の北東部で2条(SD0206・0406)、西部で1条(SD0203)の中世の溝跡を検出した。SD0206・0406溝跡は南西屈曲部に陸橋部を設け、一連のものとして方形区域を囲むように掘削されているが、北部は、北に設けた田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区にまたがって存在している。SD0206溝跡は、平面検出のみおこなったが幅4.40m~5.20m、SD0406溝跡は、幅2.65m~3.50m、トレンチ部分での深さ2.03mであった。

SD0406溝跡からは、土師器や土師質土器、陶器、青磁などが出土した(Fig.47—1~6)。土師器には坏(1)や皿(2)、土師質土器には土鍋(3)、陶器には擂鉢(4)、青磁には皿(5)や碗(6)などがある。

## 掘立柱建物跡 (SB0206)

調査区の北東部、SD0206・0406溝跡に囲まれた場所に位置する。1間×3間(4.60m×8.29m)規模で、平面円形の柱穴規模は径0.45m~0.8m前後であった。

## (2) 第268調査区

#### 概要

第267調査区の北に接して設けた調査区で、調査の結果、弥生時代の溝跡3条、中世の掘立柱建物跡1基、溝跡6条以上などを検出した(Fig.45)。他に弥生時代中期~後期の土壙(貯蔵穴跡を含む)や弥生時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡らしい遺構や多数の土壙も検出したが、遺構の遺存状態が悪いため、不明な部分が多い。

溝跡(SD0415・0431・0420・0406・0412・0414・0417・0418・0433など)

調査区の北東部と西端、中央部で弥生時代の溝跡3条 (SD415・0431・0420) を、調査区の全域で中世の溝跡6条 (SD0406・0412・0414・0417・0418) などを検出した。

SD0415溝跡は、幅 $1.22m\sim2.52m$ 、トレンチ部分での深さ0.40m、SD0431溝跡(SD0425 と同一)は、幅 $1.38m\sim1.95m$ 、トレンチ部分での深さ0.59m、SD0420溝跡は、幅 $0.72m\sim1.70m$ 、トレンチ部分での深さ0.83mであった。SD0420溝跡は、北東部で屈曲し盛土遺構を囲んでおり、弥生時代中期前半~中頃の壺や甕(Fig.48— $1\sim8$ )に混じって後期前半に下る壺(Fig.48—9)が出土したSD0415溝跡は、SD0431溝跡と一連のものと考えられ、いずれも盛土遺構を取り囲んだ溝であった可能性がある。

SD0431溝跡からは、弥生時代後期終末期の多数の土器を出土した(Fig. 49)。高坏( $1\cdot 2$ )や壺( $4\sim 6$ )、鉢( $7\cdot 8$ )、甕( $9\sim 12$ )などがある。ほとんどの土器が弥生時代後期終末期の特徴をもつ土器群である。他に鉄矛が出土した。

SD0406溝跡は、幅2.15m~3.05m、トレンチ部分での深さ2.20m、SD0412溝跡は、2.00m~2.30m、トレンチ部分での深さ1.18m、SD0414溝跡は、幅1.50m~2.45m、トレンチ部分での深1.44m、SD0417溝跡は、中央部で幅2.10m、SD0418溝跡は幅10m前後と大規模(未発掘)である。SD0406溝跡は、田手一本黒木地区I区第267調査区からの延長で、長さ28.6mの北溝の東西両端は南へ折れて延びている。また、SD0412溝跡やSD0414溝跡は、北東部で東西方向から南へ屈曲して延びる。いずれの溝跡も空間を平面方形または長方形に取り囲む溝であったと考えられる。

第268調査区のSD0406溝跡からは土師器や土師質土器、陶器、磁器などを出土した $(Fig.47-7 \sim 11 \cdot 16)$ 。土師器には坏(16)が、土師質土器には羽釜(11)や火鉢(7)などが、陶器には鉢(8)が、磁器には天目碗(9)や白磁皿(10)などがある。SD0414溝跡の埋土からは土師質土器や陶器、磁器などが出土した $(Fig.47-12\sim15)$ 。土師質土器には土鍋(15)が、陶器には擂鉢(14)が、磁器には青磁碗(12)や染付け碗(13)などの輸入磁器がある。

# 土壙·貯蔵穴跡 (SK0424·SX0408)

調査区の東部中央に位置する弥生時代のSK0424土壙は、貯蔵穴跡と考えられる。 $1.90m \times 3.80$  mの楕円形に近い隅丸長方形で、深さは1.57mであった。弥生時代中期中頃の土器(Fig. 46— $2\sim9$ )を出土した。甕( $2\sim5$ 、 $8\cdot9$ )や壺( $6\cdot7$ )がある。

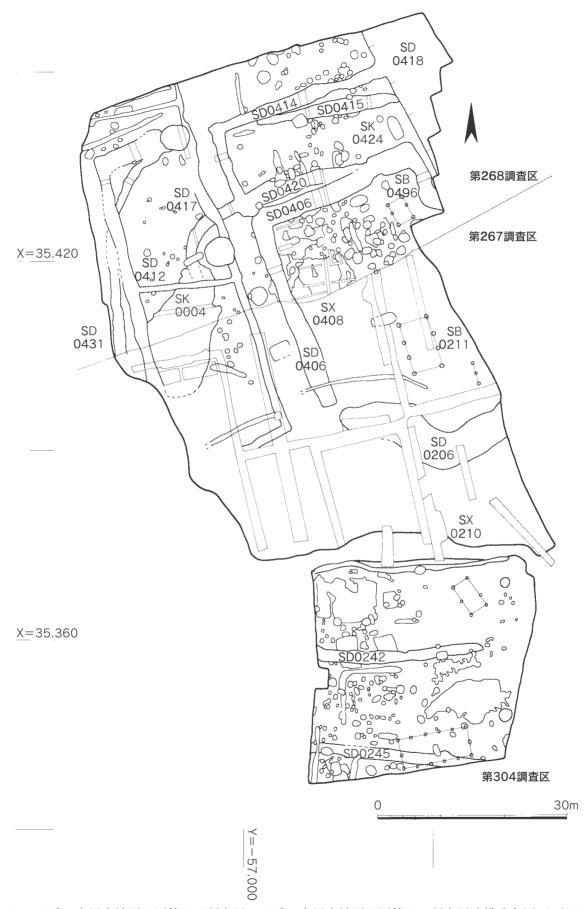


Fig.45 田手一本黒木地区 I 区第267調査区・田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区遺構分布図 (1/600)

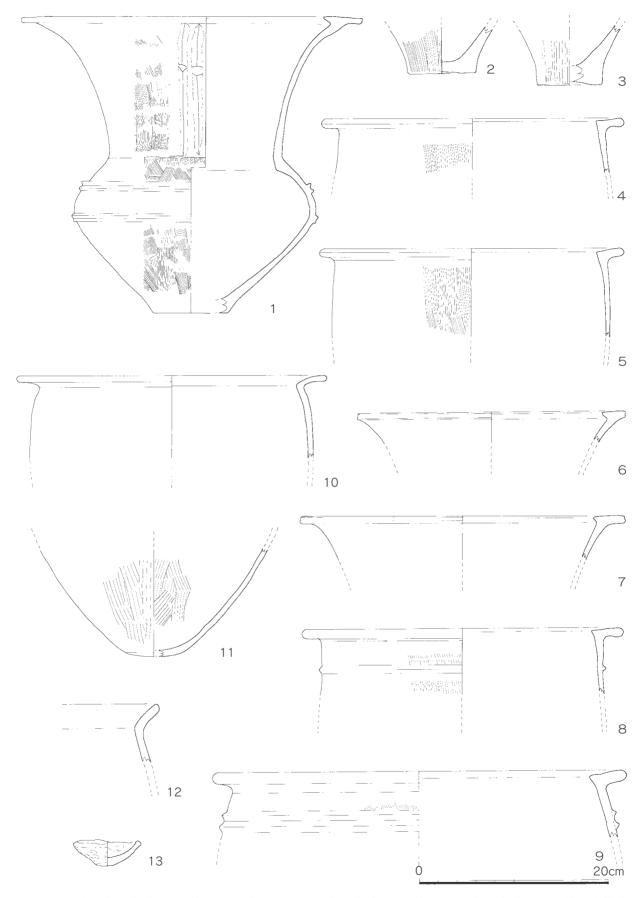


Fig.46 田手一本黒木地区 I 区第267調査区・田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区土壙・その他の遺構出 土土器実測図 (1/4) (1はSX0210、2~9はSK0424、10~13はSX0408出土)

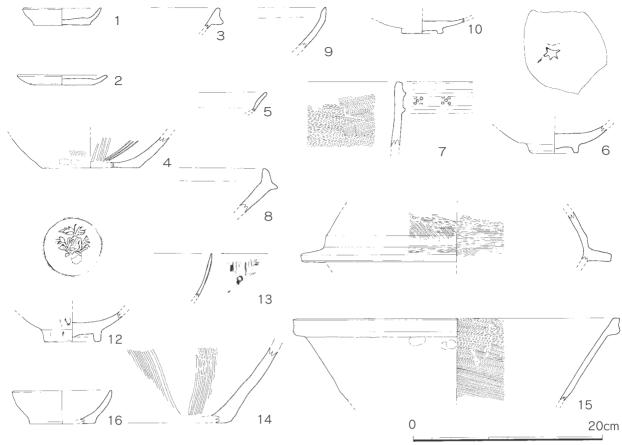


Fig.47 田手一本黒木地区 I 区第267調査区・田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区溝跡出土土器・陶磁器 実測図(1/4)( $1\sim6$ は267区SD0406、 $7\sim11\cdot16$ は268区SD0406、 $12\sim15$ は268区SD0414出土)

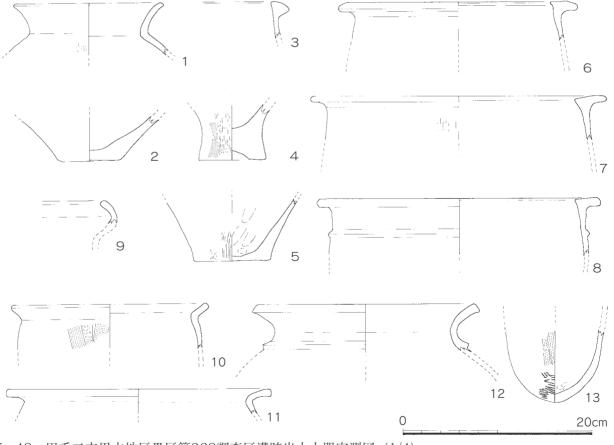


Fig.48 田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区溝跡出土土器実測図 (1/4) (1~8はSD0415、9~11はSD0420、12·13はSD0440出土)



Fig.49 田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区SD0431溝跡出土土器実測図 (1/4)

調査区の南部中央に位置する弥生時代後期のSX0408土壙は表面調査のみおこなったが、弥生土器(Fig.46—10~13)を出土した。中期後半と後期後半~終末期の甕(10~12)や手捏の鉢(13)がある。他に多くの土壙が存在するが、詳しい調査はおこなわなかった。

#### 掘立柱建物跡 (SB0496)

調査区の南東部にむ位置する。1間×2間 (2.60m×3.54m) 規模で、平面円形あるいは隅丸方 形基調の柱穴規模は径0.40m~0.75m前後であった。田手一本黒木地区第267調査区で検出された SB0206建物跡と同様、中世の溝 (SD0206・SD0406) によって囲まれた内部に存在している。

# N. まとめ

平成8年度~10年度にかけての確認調査の成果としては、それまで調査の手が及んでいなかった 丘陵西の旧水田部(低地)の様相が明らかになったことである。この調査では、中期の環壕らしい溝 跡が確認されたことや、南内郭跡西方の高床倉庫跡群の西側を囲む壕が確認され、低地の調査によっ て約300点もの木製品を得たこと、などである。また、丘陵上の調査によって、南端の盛土遺構(仮 称南墳丘墓)が墳墓ではなく祭祀遺構の可能性が出てきたことや、南内郭南方にも弥生時代後期の溝 跡などが存在することが判明したことも成果であった。

#### 丘陵西側低地の調査

過去に、丘陵南西の水田部に調査区を設定して確認調査を実施し、田手一本黒木地区II区第80調査区などで臼などの木製品を得るなどしていたが、平成9年度の調査によって、様々な事実が明らかになった。

南内郭南の谷部(田手二本黒木地区 I 区)の調査では、谷の南に沿って東西に走る溝跡が確認され、内部から多くの弥生時代中期の土器片群が発掘されたが、溝の時期や形態、方向性などから、東方の吉野ヶ里丘陵地区VII区で丘陵を横断する大規模な溝跡の延長である可能性が出てきた。さらに西方貝川以西の田一本松地区の調査でも、第232調査区や南の第294調査区などで確認した弥生時代中期の溝跡へと連続するものと考えられる。このように考えると、南内郭跡の南約90mより以南、JR長崎本線あたりまでの間を囲む環壕であった可能性が出てくる。南西や南、東方には調査が及んでいないが、丘陵上に設けた調査区に中期の同様な溝跡が確認されていない現状では、今回確認された溝跡は一連のものとして丘陵南部全域を取り囲む弥生時代中期の環壕跡と考えておく。南北400m、東西700m以上の平面楕円形の範囲20ha弱の範囲を囲む可能性がある。

また、南内郭南の谷部(田手二本黒木地区 I 区第230調査区)で確認された弥生時代後期の大規模な溝跡(S D 0312)は、県土木部の費用で調査した南内郭西方高床倉庫群西方の水田部(吉野ヶ里地区 VI 区第253~255、269・271、279~282調査区)の調査で確認された大規模な溝跡へと連続するものと判断した。第230調査区の溝からは小破片ではあるが、弥生時代後期後半の土器が出土し、さらに北方の溝跡からも同時期の土器が出土していることなどから、これらの溝跡は一連のものとして、東の南内郭との境に位置する深く切り立った大規模環壕(外環壕)とともに、南内郭西の掘立柱建物(高床倉庫)群を囲むための環壕であったものと判断した。

田手二本黒木の丘陵の西側水田部(田手二本黒木地区 I区)の調査では、第270・274・272調査

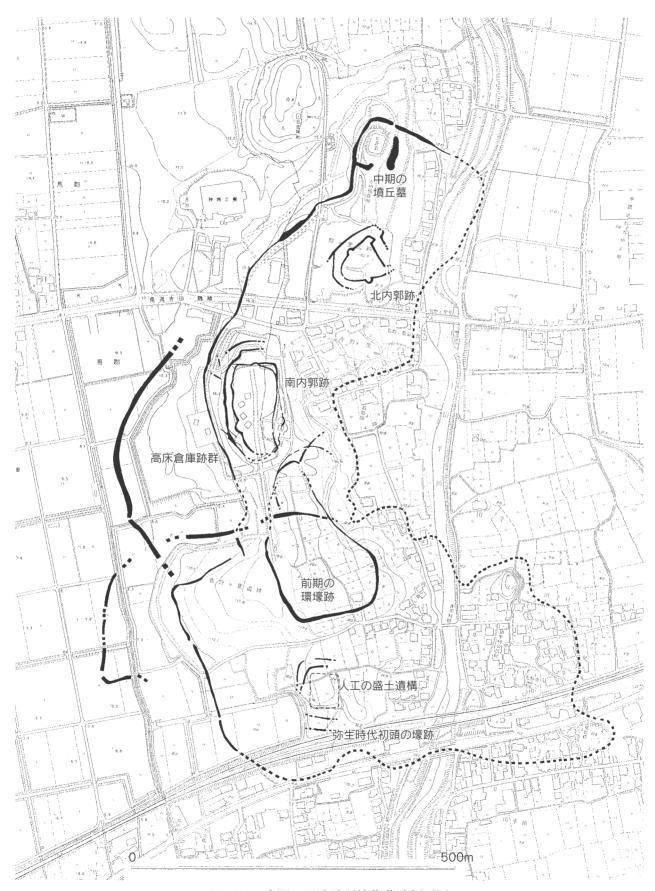


Fig.50 吉野ヶ里遺跡環壕集落跡概要図

区で確認されたSD0319溝跡、第275・276調査区で確認されたSD0322溝跡など、弥生時代後期の溝跡が丘陵と低地との境に存在することが判明した。後期初頭に丘陵全体を取り囲むように掘削され始め、後期終末期まで掘り直しされながら機能を維持していた後期の大規模環壕(外環壕)跡の存続期間と重複することから、外環壕のさらに外側の防御ラインなのかなど、今後検討を要する課題である。

#### 丘陵上の調査

3年間の確認調査によって丘陵上に設けた調査区は少なかったが、それぞれに大きな問題を提起したと言える。南内郭のすぐ南に設けた吉野ヶ里丘陵地区第227・228調査区では、第227調査区で弥生時代後期終末期を主体とする土器を多数包含した溝跡(SD2101・2102)が、また、第228調査区で弥生時代後期後半~終末期の溝跡(SD2122・2130)が検出されたが、これらは、南内郭との関連を念頭に機能や性格を考える必要がある。

SD2101・2102溝跡は一連のもので、南内郭跡の南東約70mに位置する直線的に伸びる溝跡である。SD2101溝跡の東端は南へL字形に折れ曲がり、東のSD2102溝跡の西端との間に陸橋部を持っている。陸橋の幅は0.5mと極端に狭いが、出入口に伴う施設と考えられる。一帯に直線的な溝による平面方形の区画が存在した可能性もあるが、西方や東方では後の開墾によって遺構は遺存しておらず、詳細は不明である。南内郭の出入口の南に位置することなどから、南あるいは南東側に対する防御の機能をもつ遺構かも知れない。

SD2122・2130溝跡は、工業団地計画に伴う発掘調査で発掘された、南内郭の東出入口(陸橋)の南南東約50mに出入口(陸橋)を設け、南東の空間を弧状に取り囲むように掘削された後期後半~終末期の新旧2条の溝跡に連続すると考えられる溝跡で、新しいSD2122溝跡と古いSD2130溝跡が切り合って存在する。これらの溝跡は後の調査でさらに南東へ延びることが判明した。南内郭を南東方向からの進入に備えるための「構え」のような防御目的の遺構と考えられる。

いずれにせよ、南内郭や北内郭を形成する環壕跡、外環壕跡などとの関係、あるいは建物などの施 設群との関わりを考慮しながら、その機能を分析する必要がある。

また、第227・228調査区や第229調査区で確認された古墳時代初頭の溝跡は、後の調査でそれぞれ前方後方墳と方形周溝墓であることが判明するなど、弥生時代から古墳時代へ移行する時期の吉野ヶ里集落及び墳墓の変遷を知る手がかりになった。

丘陵上の南端近くに設けた田手一本黒木地区 I 区第267調査区や田手二本黒木地区 II 区第268調査 区の調査では、平成元年度・2年度の確認調査によって墳丘墓の可能性が考えられていた弥生時代中期前半に築造された盛土遺構からは墳墓遺構が検出されず、南東部に弥生時代中期の祭祀土器群が散乱するなど、祭壇のような祭祀遺構の可能性が出てきたと言えよう。この盛土遺構の北や西あるいは南を囲むかのように存在する第228調査区の溝跡(SD0415・0431・0420)や南の田手一本黒木地区 I 区第304調査区(建設省委託)の溝跡(SD0242)は、弥生時代後期後半以降この盛土遺構について新たに意味付けがなされた結果かも知れない。後期の環壕集落最北端に位置する中期の墳丘墓から、200m南に位置する北内郭跡内部の大型建物跡の南北中軸への直線を、さらに南へ620m延長した位置に存在することが判明した。集落全体の構造や形成の過程を知る手がかりになるものと考えられる。

Tab.2 吉野ヶ里遺跡の環壕集落の変遷

時代・時期	環壕囲郭	環壕断面 態	内 部 施 設	備考
弥生初頭	規模不明	逆台形	?	夜臼式土器+板付 I 式土器、半島系磨製石器
弥生前期 前半~後半	3 ha	V字形	竪穴住居?・穴倉	後半に青銅器鋳造関連遺物(鞴羽口・取瓶)、半島系 磨製石器、環壕外に後半の甕棺墓・土壙・木棺墓
弥生中期 初頭~中期後半	推定 20ha以上	逆台形	竪穴住居・穴倉・掘立 柱建物 (高床倉庫) 群、 祭壇?	前半に青銅器 (剣・矛など) 鋳造、朝鮮系無文土 器、前半から中国製の鉄斧・書刀・耳環・鉄蝶番、 環壕内に少数の甕棺墓・土壙墓、環壕外に多数の 甕棺墓・土壙墓群の中に墳丘墓
弥生後期 前半~終末期	40ha以上	V字形 低地では 逆台形	竪穴住居・掘立柱建物 (高床倉庫)・南内郭・ 北内郭・入口構え・祭 壇?	前半に青銅器 (巴形銅器) 鋳造、終末期に外来系 土器(畿内・山陰・瀬戸内など)出現 環壕外に前半まで甕棺墓・土壙墓・木棺墓・箱式 石棺墓が一部
〔南内郭〕 後半~終末期	1.1ha	逆台形	竪穴住居・掘立柱建物 (物見櫓)	竪穴住居のみ、西方外環壕外に2ha以上の範囲に 高床倉庫群
〔北内郭〕 後半~終末期	0.78ha	逆台形	掘立柱建物(祭殿・高 床住居・物見櫓)	掘立柱建物が多い、北環壕外に高床倉庫群
古墳初頭	なし		竪穴住居・掘立柱建物	外来系土器(畿内・山陰・瀬戸内など)、前方後方墳・方形周溝墓、集落は弥生時代の北内郭一帯に残存、南内郭の集落は西方高床倉庫群一帯へ移動?

#### 中世の吉野ヶ里遺跡

昭和61年5月から平成元年4月まで実施した工業団地計画に伴う発掘調査によっても、主に丘陵上から大規模な壕跡や溝跡、掘立柱建物跡などが検出されていたが、平成元年度遺構の吉野ヶ里遺跡確認調査によっても各所から中世の遺構が検出されており、この丘陵が中世においても盛んに土地利用されていたことを示した。

平成8~10年度の確認調査では、丘陵西側の低地において、田手一本黒木地区II区第222調査区で検出された畑の畝らしい遺構や同第223調査区の溝跡、田一本松地区の溝跡やこの時期と考えられる多数の杭群が確認され、丘陵上では、吉野ヶ里丘陵地区WI区第227調査区西端と同第228調査区東端で確認された大規模な2条の壕跡、田手一本黒木地区II区第267調査区や田手二本黒木地区II区第268調査区では、弥生時代の盛土遺構を取り囲むかのように平面方形に巡る溝跡や、周囲に多くの溝跡を確認した。方形区画の内部には掘立柱建物跡2基があるが、うち1基は盛土遺構の上部に存在する。この盛土遺構は、中世寺院妙法寺の寺域の北西にあたると考えられるが、重要文化財の「東妙寺并妙法寺境内絵図」には妙法寺の西から北西にかけて小山が描かれており、その上に小規模な建物が存在することも注意を引く。中世の遺構、特に溝跡からは、礫や瓦片、土師器・土師質土器、備前などの国産陶器とともに、多数の輸入陶磁器が出土する。北宋時代から明時代にかけての青磁や白磁、染付けなどの中国陶磁や、李朝などの朝鮮陶器がある。13世紀以降16世紀まで間、吉野ヶ里遺跡一帯は墳墓や屋敷地として、また、城郭や寺院関連の施設が設けられるところとして利用され続けたものと考えられる。

# 図 版



田手一本黒木地区 II 区第222調査区全景(上層)



同SD0105環壕跡(北部)



第222調查区SD0105環壕跡鍬出土状況



同SD0105環壕跡鋤柄出土状況



同SD0105環壕跡エブリ出土状況



同SD0105環壕跡杵出土状況



同SD0105環壕跡杓子出土状況



同SD0105環壕跡漆塗容器出土状況



第222調查区SD0105環壕跡鎌柄出土状況



同SD0105環壕跡網枠出土状況



同SD0105環壕跡鼠返し出土状況



同SD0105環壕跡柱出土状況



同SD0105環壕跡履物出土状況



同SD0105環壕跡矛形土状況



田手一本黒木地区 II 区第223調査区西部全景



同掘立柱建物跡柱・枕木出土状況



同掘立柱建物跡柱・枕木出土状況



同掘立柱建物跡柱・枕木出土状況



同掘立柱建物跡柱·枕木出土状況



田一本松地区 I 区第232調査区SD0001環壕跡



同北部杭群





田手二本黒木地区 I 区第230調査区全景 (東から)



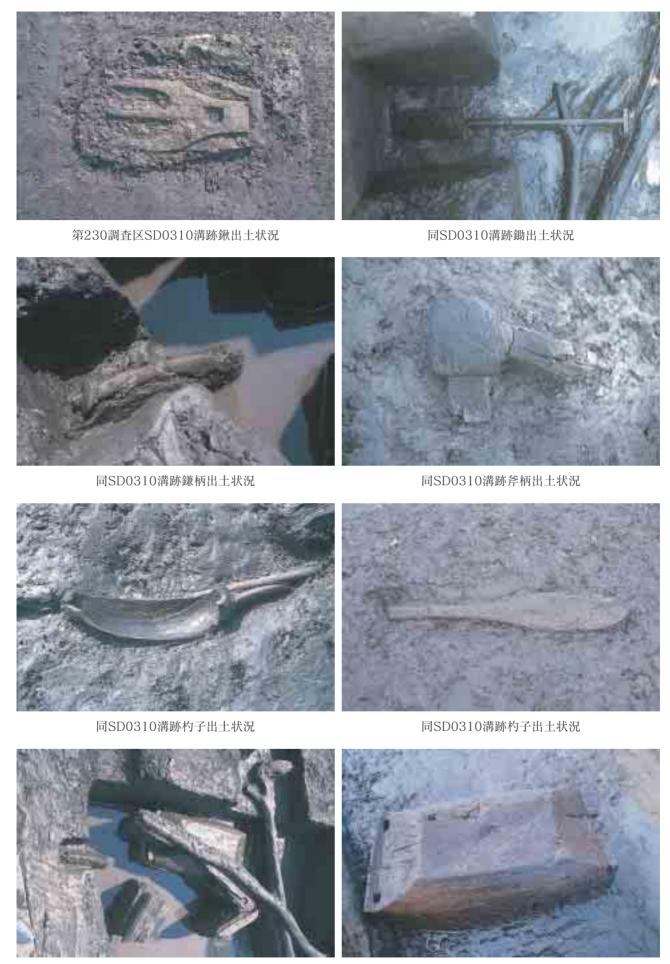
同 (西から)



第230調査区SD0310溝跡



同SD0313溝跡 (北から)



同SD0310溝跡槽出土状況

同SD0312溝跡容器出土状況



田手二本黒木地区 I 区第233~249調査区全景(東から)



第236調査区SD0307溝跡 (西から)



同SD0307溝跡 (東から)



同掘立柱建物跡群



同·239調查区SD0307環壕跡



第236調査区SB0301建物跡



同SB0302建物跡



同SB0303建物跡



同SB0304建物跡



同SB0305建物跡



同SB0306建物跡



第236調查区SB0301建物跡柱穴跡



同SB0301建物跡柱穴跡



同SB0303建物跡柱穴跡



同SB0303建物跡柱穴跡



同SB0305建物跡柱穴跡



同SB0305建物跡柱穴跡



同SB0306建物跡柱穴跡



同SB0306建物跡柱穴跡



田手二本黒木地区 I 区第270調査区SD0319溝跡(南から)

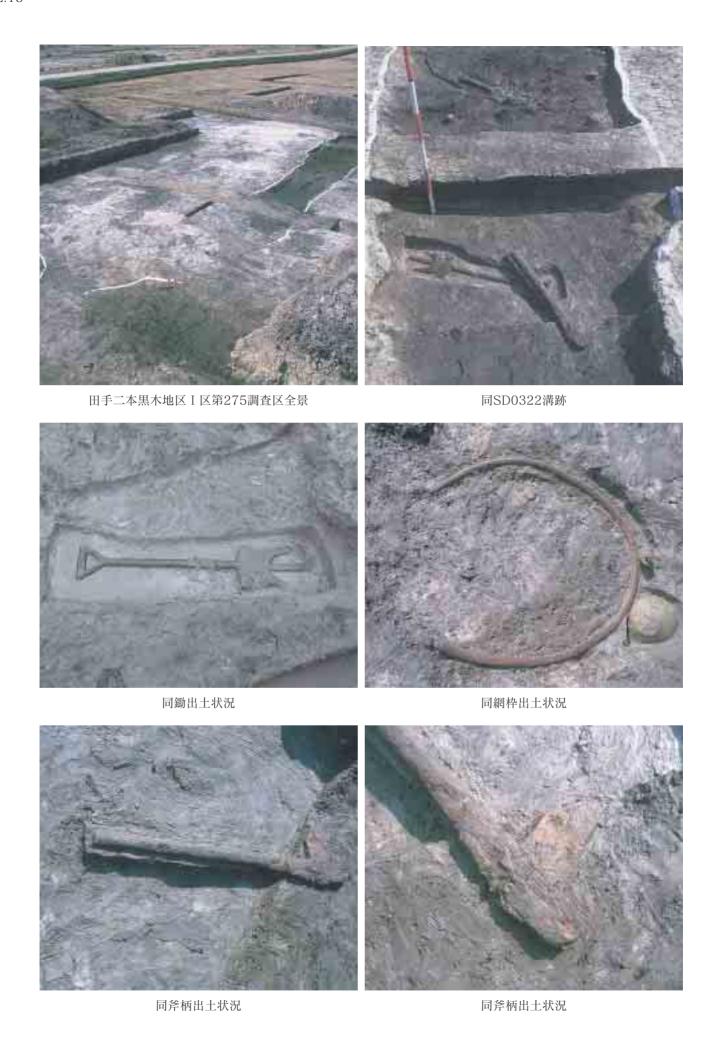


同北部の溝跡内木材・礫敷遺構出土状況 (東から)



同銅鏃出土状況

第272調査区櫛出土状況





吉野ヶ里地区V区第306調査区遺構検出状況(南東から)



同遺構検出状況 (西から)



吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区第227調査区全景(上が南)



同第228調査区全景(上が南)



第227調査区甕棺墓群(北から)



同SD2101溝跡 (西から)

同SD2102溝跡 (東から)



第228調査区全景(南東から)



同SJ2125 (左) · SJ2126甕棺墓



同SD2122溝跡



同SD2121溝跡



同SD2121溝跡小形仿製鏡出土状況



第229調査区全景 (西から)



田手一本黒木地区 I 区第267調査区全景 (東から)



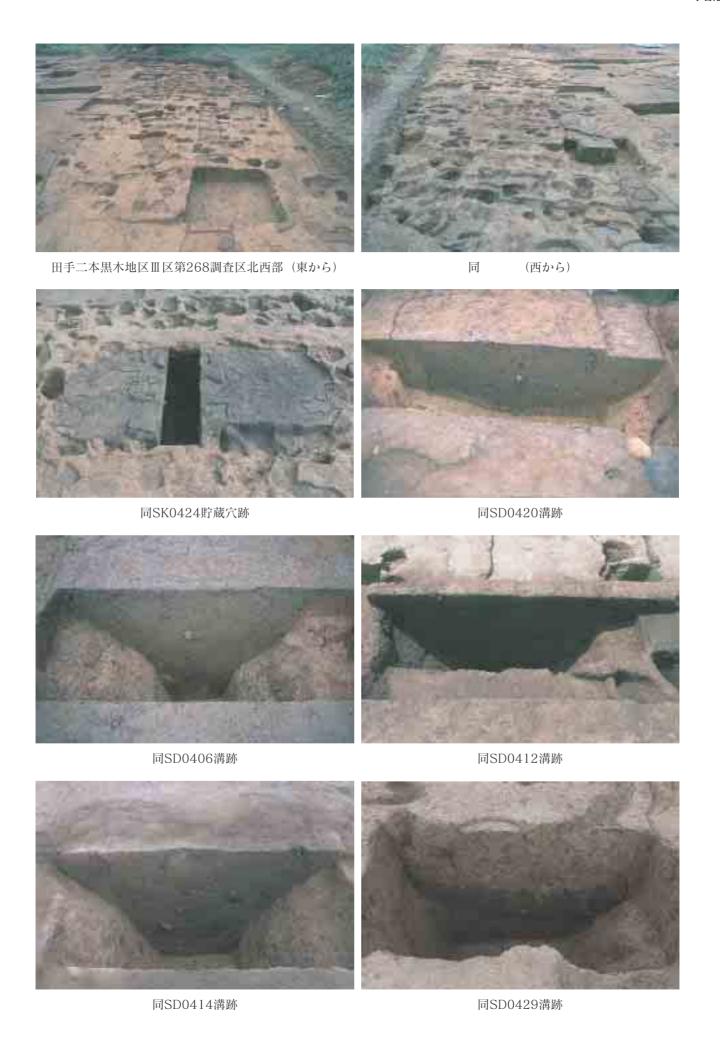
田手二本黒木地区Ⅲ区第268調査区全景(南から)



田手一本黒木地区 I 区第267調査区SX0210遺構土器出土状況



同遺構壺内部の貝殻・鳥骨





第222、230調査区出土鍬



第222、232調査区出土エブリ



第230調査区出土鋤



第275調査区出土三又鋤



第295調査区出土杵



第222調査区出土杵



第222調査区出土臼



同出土臼



第222他調査区出土横槌



第222(右) · 230調查区出土鎌柄



第222他調査区出土履物



第222調査区出土網枠



第222調査区出土斧柄



第275調査区出土斧柄 (上は複製)



第222調査区出土弓



第222他調查区出土木鏃



第222調査区出土鼠返し



第222調査区出土鼠返し



第222調査区出土鼠返し



第222調查区出土加工板材



第222調查区出土刷毛目原体



第232·298他調查区出土杓子



第222調査区出土容器



第295調查区出土船形木製品



第222他調查区出土容器



第222・230・295調査区出土武器形祭器・船形木製品



田手二本黒木地区 I 区第270調査区出土銅鏃



田一本松地区 I 区第232調查区出土貨泉



吉野ヶ里丘陵地区W区第228(左)・221調査区出土小形仿製鏡



整備進行中の国営吉野ヶ里歴史公園全景(南から)



整備された北内郭(西から)



整備された北内郭 (南東から)



整備された北内郭 (南東から)



整備中の南内郭西方倉庫群 (東から 平成15年1月)

## 報告 書抄録

ふりがな	よしのがりいせき へいせいはちねんど から じゅうねんどのはっくつちょうさのがいよう							
書 名	吉野ヶ里遺跡一平成8年度~10年度の発掘調査の概要一							
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 156集							
編著者名	編者 七田忠昭 、 著者 七田忠昭·細川金也							
編集機関	佐賀県教育委員会							
所 在 地	〒840-8570 佐賀市城内一丁目 1 - 59							
発行年月日	2003 (平成15) 年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	- 切潰跡名 ありがな		コード		東経	調査期間	調査対象	調査原因
(地区名)	所 在 地	市町村	遺跡番号				面積	
吉野ケ里遺跡	佐賀県神埼郡							遺跡の内容
田手一本黒木地区	三田川町	413232	2017	33°	130°	19960401	8771	の把握、国
([区・[[区)	<b>光</b> 縈 笛手		5003	19'	22'			営歴史公園
				6~24"	32~40"	~		整備に係る
苗手二苯黑木地区			1002				6459	資料を得る
(Ⅰ区·Ⅲ区)			2015			19990331		ため
W 0 V 5 5 2 5 2 7			3015					-
吉野ヶ里丘 陵地区			1001				3396	
(VII区)			2014					
でんいっぽんまつ ち 〈	かん ざき まち	410010	3013	-			0000	-
節一苯松地区	神埼町	413216					3080	
( I 🔀 )	大学 鶴		1001	000	1000			_
吉野ヶ里地区			1031	33°	130°		6883	
$(V \boxtimes)$			2081	19' 16"	22' 32"		(検出)	
			3079	10	32			

所収遺跡名(地区名)	種	別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田手一本黒木地区	集落跡		弥生時代	掘立柱建物跡・環壕	各種木製品・漆塗	弥生中期環壕?跡
( [ 区・ [] 区)			中世	跡・溝跡・甕棺墓	り容器	
田手二本黒木地区	集落跡		弥生時代	竪穴住居跡・掘立柱建	木製品 (組合せ式	弥生中期環壕?跡・後
( [ ☒ ⋅ ∭ ☒)			中世	物跡・環壕跡・溝跡・	斧柄)・漆塗り容	期環壕跡、高床倉庫跡
				井戸跡	器・銅鏃	群
吉野ヶ里丘陵地区	集落跡	・墓地	弥生時代	竪穴住居跡・掘立柱建	小形仿製鏡・鉄	弥生後期壕跡・古墳前
(VII区)	跡		中世	物跡・環壕跡・溝跡・	鏃・鉄製鋤先・ガ	期前方後方墳
				甕棺墓・前方後方墳	ラス小玉	
田一本松地区	集落跡		弥生時代	環壕跡・溝跡	銅銭 (貨泉)	弥生中期環壕?跡
( [ 区)			中世			
吉野ヶ里地区	集落跡	・墓地	弥生時代	竪穴住居跡・掘立柱建		10年度は検出のみ、
(V区)	跡		古墳時代	物跡・環壕跡・溝跡・甕		本格調査は11年度実
			中世	棺墓・井戸跡・土壙墓		施

佐賀県文化財調査報告書第156集

## 吉野ヶ里遺跡

一平成8年度~10年度の発掘調査の概要—

平成15年3月28日印刷 平成15年3月31日発行

編集 佐賀県教育委員会

発行 佐賀市城内一丁目1番地59号

印刷 (株) 三光

佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1